



陶醉

かもめ 7 4 4 0

文脈という鉱脈に、断ち切られた線路に、

「ドアにご注意」「開くドアにご注意」

夜な夜な-来る夜も来る夜も・・（縦一六・五センチ・横二〇センチ）

折れたカッターナイフや、鋸が見つかる-ラジコンと風船のゲエエム、

君の夢を見たんだ・・ 君の夢を見たよ・・・

――試合が始まる前に、野球選手がロッカーを移動する、ベンチから出てきて、
練習-彼はストレッチをする、彼はキャッチボールをする・・・

（ハイウェイを疾走する・・とんでもないリズムで・・・

終わりではない――終わりではない・・）

鳩-ラジコンでは面白くない、――神経症的な痙攣・・

たいまつ

炬火を三度振るように・・

（まるで、）・・（そう、まるで）

目で見えないものや、耳では聞こえないもののよう・・

a わかってくれる人達はいつだっている

b 黒と白の中

「ヘリコプターでやってみるか。」

さいわい

悩める者、貧しき者は福なるかな――

「いやジェット機で。」

《中庸》は都合のいい言葉・・で、（普通）・・という意味合い・・・。

自分もあんなに空が飛べたら――

きつと――面白くない世界では、深呼吸した後でため息が洩れる、

崩れ落ちた門の向こうにステレオタイプな世界が味方しても・・

「そんなにふわふわのベッドで眠れるのは今夜が最後かも知れないよ。」

「あ。ライオンの装飾が施されたドアノブが・・。」

世界はそれで腐敗する・・泣き叫ぶ子供が、

壊れたように泣いている、約束の言葉は反故にされ、

――ドアが開閉する直前に鳴る

――ドアが開閉しながら鳴る

――ドアが開いている間中ずっと鳴る

――そしてこの世界の薔薇はけして、蒼くはならない――これはみんなもう・・

はるか昔に・・吹きすぎた――昔取った杵柄、おぼろな思い出話・・・

ダブル・ミーニングやトリプル・ミーニングに加え、
クォーター・ミーニングや、クイント・ミーニング・・・頑丈かつ繊細な織物、

「中央に鍵穴のあるドアノブ・・」

だからあなたは悲しむべきことにも悲しまず、偉大な者に跪かない。

傷ついた足や倒れる身体を・・まっすぐ高くするものは何？・・羽根飾りをつけないのは？

勲章は？・・ねえ、ふたつの明るい窓に美しい白の入口がないのは何故？

時々自分が背負っている重荷に押しつぶされそうな時――見て！・・なあに、

「――狂ってる・・」

「…狂ってるのは、メロディーよ。」

・違うわ、狂っているのは、たぐいなくほめ讃える癖よ。

意志を肯定してくれるものは何？・栄光は？・・・

汗が滴り落ちるフロアさながら、ひくひくと細かく動く、

大きな翼をした鳥の歌声のような表現、

そして君はまるで本でも読むように僕を理解する・・

.....

痛そうだ、思い切ってすばやくやらないと——清冷な風景から、空漠たる絶対の幻覚へ…

水晶のように澄んだ天上の気圏-人の硬い心は彼の弱い心を傷つけずにそれに触れることが

出来ない。一握りの権力者が自分の利益から選択した外交-国際関係・

今わの際に口にしたくなる人名や地名、

（「安い葉巻を口にしながら玄関口のBlues」）

・ ・ ・ 夜更けが跪くように、はかりしれぬ雷雲のそびえる西の果て ・ ・ ・

それは、目を血走らせながら逆巻く泥水のように思える・・

美しい人生の不思議な固有名詞、強い力の奴隷となる宗教的な背景や神話、

ことわざ格言・・が、組みつほぐれる、そして悲しげに曇る、白絹を通したような、

光が落ち、頭の中でサルサ・柏木のようなクラブス、

――乾く、微笑は絶えて…いくぶん遅く/ゆっくりと動く 低くたなびく雲/女らし

くもなく 美しく輝く葉 固く凍りつく…急速度で停止した陶器製の枝 葉は鳥かごの中

にある枢を思わせる…センチメンタルなフランシスコ・ザビエル…

「坂を下り切ったところに、いつもの死神がいる…」

、、、、、、、、、、

人の目にどう映るだろう、だが多分に明るさが、愛の夢の、青春の、

より確かなリズムが、僕に…この僕に——そう言わせる…右顧左眄、とらえ難い空、

スピリット

この自由について考えていたら、詩は、魂かも知れないと思えてきた——

「教会の鐘の音…ねえ一体あれは誰のために鳴ってるんだろう？」

押し合いへしあい…テレビの連中とカメラの効果映像…演出、

部屋の硝子戸に、石英質の遠い山脈-胸郭…

太陽の塗料を剥がすように…佳き時代、

一度スイッチを入れると、テレビを消しても残像が残る——

「君はうんと遠くまで押し流されている。」

「何もかもすべてを失い…もはや何一つ隠すものをなくした時——。」

もしこれが戦地の中継で…脊髄を損傷し、下半身不随になりました、という兵士の声だっ

たらどうだろう？…振り返れないように、後戻りできないように橋を燃やした-反戦者の

人でなしの、非難と嘲笑——でも彼は（彼女は、と考えてもみたい…）国のために戦った

——死線を越えてきた…それはそれとしても…ねえ、

「入るか…入るか——ああ、入りました…レフトスタンドにぽおんと入りました、

ホームランです…ホームランです」

、、、、、、、、、、

そうした時間の絶えた所で…でたらめな尿検査を始める

…内外を隔てる一種の弁としての機能

淡彩の幸福-機織音と軋音をさせる工場という名の翻訳…

夕陽の中の銀鼠色の手袋-明るく輝く月-明るく輝く光…

ぱくぱくと食う-そいつはまるでパクパクと食う…そいつが、ある日の君のように行き場を

なくして、PAKUPAKUと食う-そいつは誰だろう、ぱく-パクと食う…

「過去のもの——とてもゆっくり休んでいるのに、動悸…」

やっぱり僕は負けたのかも知れない…だって僕は人を愛することを止められない、

自分が弱いと意識することで自尊心は傷つけられるけれど、その誠実さは、

今までの自分…すぐに傷付いた自分——表に出さない作り笑いの自分を想像させた…

戦争に関する非人道的な挑発-戦犯被告と捕虜に対する残虐行為…
それがもう色あせ、衰えた現在-風のように、よぎり、宙に輝く星空が、
センチさの欠片もない連中が、星になったとガルウィングドア——
きれいごととはよそうぜ、未来さえ既に過去のルール…

ああ、こんな荒廃している街に…その優しい夜の名ごりと化した苔ふかき庭に

嘆きや呻き-ため息やすすり泣き…を——埋めようと…して…る、

疾風が空をよぎる…迅い霊的な流れがあって…あれ以来、ずっと、

撞き終えた鐘の音の、最後の響き——運命の朦朧とした網の中で、呪われた熱病、

神の火の川…しかし神の名を呼んでも門前払い…

(だからその手を離してみなくちゃいけなかった-話してみなくちゃいけなかった)

すべてから遠く離れた自分の人生を突き放すように…幾枚ものレタア・ペイパア…

強い風が吹いて…ただ——この、強い風…が…吹い——て…

「昆虫の瞳孔が開く――それは照らし…火をつけること…」

《さあ…ジェスチャーゲームを続けよう――》

いくつものトンネル、と浮かんだ――〈樽の底…〉

《でもその前に、酒瓶が一本、手の中に必要だ――》

「際限なく 響く音」

「嘘だ。悲しいだけだ。病気なだけだ。」

「嘘じゃない。渴きを癒す子守唄の水音でさえ…。」

――気がつくと、いつも くだらないことでクスクスと笑う…

……それは 響いて――ただ 響い…て……

呼吸のピストン-空気の中に想像する幻の銃のフォルム…
僕は新しい銃弾を装填する-白い頁の、あおい波動に挟まれながら――

「思い出すのは何か？…敵意に満ちた都会や、薄情な町のこと――。」

「思い出すのは何か？…もうあれこれ悩まない、という台詞。」

僕に二度と取り戻せない夢が叶うように思わせる-でも何も起きない、

彼等は何もしない…でも空が明るくなれば、屋根にも火がつく…

――分け与えられるような気持ちで…太陽を夢見る――

（でも太陽でさえ、ひとりぼっちになったと押し流される日が来るかも知れない）

人は本当に変わっちま――う…ぜ……なんだか、次の日が、

人生最後の日かも知れない、と本当に思えてくる――

運転席で酔っ払った男みたいに、薄っ暗くて狭っ苦しい人生を謳歌する、

「きれいな花の名を呟こう…パンジー、ローズ…」

「一つだけ言いたい。それを夢の中のベッドにまで持っていけるなら、と…」

——でも、どこかで、木の実の落ちる音がしていた——

——でも、あなたはやって来た、あらゆる可能性を知りたくて——

《C A R Dがあります》-手に取って下さい、と指示がある。

「はい。」と答えれば…この意見を括弧でくくったことになる。とは言え…

暖かくもなくあまり冷たくもないな…C A R Dを捲ると、少しわかってくる…

そこには湖水があって——そこに無数の星々が映ってる…あるいは光る魚？…

「これは何だろう。」と考えれば…その瞬間から、神秘の発芽！…

——うまく説明できるかっていう疑問はあるけど…

——とりあえず、残っていた酒を飲み干そうとは思うな…

「だから、うんと落ち込もう…内省、女性に手ひどく傷つけられたことも、

身の証を立てねばならない詩に傷つけられたことも、あらゆる真実の内に潜む、

スポイルに傷つけられ、エクスキューズが僕の目の前を通り過ぎた…こと…」

こうして静かに考えていると、——復讐において生や死は記憶されるのかも知れない。道

理の道-悟りを開くため恐れを遠ざけようとすればするほど…真珠の首飾り——美しい思

い出が、死者を蘇らせる…そして人には誰でも誰かとつながる魔法の呪文がある…

《C A R Dがあります》-手に取って下さい、と指示がある。

「イエス。」と答えれば…あなたの眼に入る光景そのすべてが違う世界を認め始める、

でもそれを信じる必要はないんだ…C A R Dを捲ると、君はパンより肉が好きだ…

そこにワインがあってージュースがあって…さあ欲望の世界へ行こうよ？…

「これは何だろう。」と考えれば…その瞬間から、神秘の発芽！…

うたげ

それまで善悪はこの稲妻の歓宴に酔う――脚の間にある口に、

種子が蒔かれたように、この人びとは思想 (*Idea*) と感情 (*Emotion*)

…月は高く昇っている、夜が空が恋のように落ちてくる時――

――嵐の前という人生の場面…めぐる輝きに心惹かれながら…

(思惟の鋤のひとかえし…あるいはラグタイム調のジルバ、白い思考の紙屑、)

僕はアナベル・リーのこと…あるいはその妻ヴァージニアのことを考える、

……………目が回る気持ちにさせたのは、あなた！

「不幸な人生を生きたポーのように、僕もこの何年か、あなたと同じように生きてきた

――本当に尊敬しています、他のどんな詩人よりも…僕は、一人とぼとぼと歩いてきた。い

まようやくここまで歩いてきた…褒めてくれ、…俺がこの国の詩を変える、この国最大の詩

人になる――もう…なった、俺は奴等のいい加減さ、どうしようもなさに、一切の勇気を感じ

ない。誰かが呼んだようなこともあったが、空耳…そしてその度に、俺の身体はバラバラ

に壊れてどうしようもない。土砂降りの雨が降った…呼び止められなかった俺の愛する女は

、いつも、俯いてから、横を向いてどっかに消えた――でもだから、あの女が嫌いなんだ。

でもあの女がいなけりゃ、俺はいまでも、腑抜けだった――ぜ…」

、 、 、 、 、 、 、 、

あの女は嘘つきだ――あんな、魂までハーゲンダッツのように蕩ける眼をしちゃいけない

。コカコーラだ。でなけりゃ、拒む世界で、何かが燃えているよ！

トゥア・マシナ

「なんと塩辛い！」

「くよくよしなで、楽しくいこうね！」

なんて、言うのは――能天気な僕自身・・

「ねえ、ポー、うまく行くように祈ってくださいね。」

ひと粒の涙は国境線で凍えた・・ 未来永劫、僕は忘れない・・・

僕の傷跡が――僕の心の中の荒れ地が――この記憶が、この生活が――

（詩人の魂、ジャパニーズブランド・・覚えとけ、ポー、この国は俺ひとりで支える。）

協力者はいない――ジジイやババアさっさと死ね――出版社全部つぶれろ――

（でもポー、わかるだろう・・あなたになら、僕の本当の気持ち・・わかるだろう・・・）

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

「あなたの詩は僕の胸を打つ・・・生きることの一瞬一瞬の訪れは、あなたという道、たとえ

るなら断崖のある危うい潮騒の音を聴きながら山道へと行き、そこで無数の蛇のセクスを見

たよう-本当の話だ、殺されるかと思った。でも、ポー、俺は蛇に布をかけて、知らないふり

をした。でもその時に俺は学んだ・・命がなければ 誰の顔も見えなくなる。」

a 開腹手術はよじのぼる如き欲求の奥にある

b 花は咲いていて、やわらかい陽射しも咲いていて

c でも街角を曲がる悲しみが僕を追いたてる

「ユゴーも通り、ダンテも通った――地球数兆回分くらい、イメージの中で歩いて、時間

に縛られ、人の嘘に騙され、何も告げられない胸に音を立てて流れる血潮に全身全霊をふる

わせて・・俺は選んだ、神の道・・影響力の道、（志しに頬杖をつきながら、）世界をたった一

人で変えられる代わりに、悲劇を繰返す――個人の愛を失い、人生の意味を見失い・・戦地へ

と赴く僕はプロレタリア・モダン・ビート…いやそんな名じゃわからない、俺は詩の祝祭、
俺は詩人の魂——人生の道…俺たったひとりでお前の魂に火を点ける…」

（僕は知らない…）

「真夜中の列車にずっと乗っているんだ——」

瑪瑙いろのガラス・ランプのような心臓の抽象…
幾年も前に渚で見つけた貝殻の色…優しく話すたびに、粉を引く…
身を粉にして働く——

さてそれからの意識がぼんやりしている。そのまま置き忘れたような、はたまた、どこか
痒いところ…そう、手が届かないところに気まぐれでちょっと入れたような…

「ゴルフ練習場経営と、ボウリング場経営のどちらがいい？」

——なんだ、その質問。待ってよ旦那、あっしア、その返礼。

「毛糸販売と、薬品販売のどちらがいい？」

——なんすか、それ、なんすか、そのつながんない会話…

でも、思わないか？ くぼんだ目-悪だくみ-くず物商…

動く芸術が左に向く-悔しくて、むかつく-ろうそく…

「悪態をつく——揺らめく影…」

あくる日（next day）あくる朝（next morning）あくる年（the following year）

どうして音楽と強く向き合うのか…ただひたすら君を愛するのか、

どうして自分を見つけねばならないのか…ええ！と言いながらくそ、ええくそ、

it's the girl ——It's mother!——It tastes sweet——

ゆっくりとオールで漕ぎ進む舟のように、真実の言葉は、

「縞模様だった。」（この追跡はもう終わり…）

「違う。雪のようだった。」（悲しみはケープ、いや悲しみは落花生…）

あるいは掘っ建て小屋のある田舎の細い道-伝統の土台という歴史感情を刺激する道…

《深く沈む》——（深く探る…）

（僕は堪え切れない涙をこぼしながら、）——強く永遠の…真理に惹かれ…

気がつけば神秘に満ちた世界のとらわれ人…手のオブラート、レントゲンの光線…

フェンス-ガードレールに僕は押し付けられる…押し付けられている…

…さあ、僕を揺さぶっておくれ！ そして、この僕を——奪ってくれ…

「——何故こんなにまでなりながら生きていなければならないのかしら？」

思ったことは-考えたことは-口にしたことは…新しい目を産む…

心の中に展開する-夜明け前に…そうだ、その道を、僕はもう見つけ出してる…

ボクシンググローブ-チャンピオンベルト…

（でも頭の中はぐしゃぐしゃさ…ロールスロイスが欲しい…）

僕はあらゆる方法を試すように…勇気を口にするだろう…

よってたかって聖歌隊的奉仕-ロシアンルーレットな気分…

いやそんなんじゃよくわかんない、ボーイスカウト的ナパーム弾！…

（高温でレンガが溶けてつららのように垂れ下がった写真…も、

たとえば、逃げ惑う少女の話も——）

（あの暗い谷間のある、）——（天国へ…）

「自分で自分の肉体を傷つけたいような物狂おしさ…いつまでもほぐれない顔色…

焦れて…色んなものを失ったと決め付けたくなる——こんな日も…」

ウィスキーの樽のなかでへべれけになって溺れ死ぬように、僕は見た…

（ランプを暗くしてくれ）…（思い出が朧げになるまで）

——夜に響く自分の声は、肋骨の底深く沈み、宙ぶらりんのまま、

「でも君を愛そうとはしなかったかい。」

「…ねえ、君に気にかけてはいなかったかい。」

強烈なホルマリンの臭気…でも血管の中で、僕を前へ、

そう、前へと進ませる鮮紅色の *Guitar*

「掴むらしくみえる——割れる——響き——その刹那のひやりとした気持ち…」

一度や二度のしくじりで、人生が終わってしまう人もいる…

涙の雨が降る旅路…いつのまにか自分のかなしみにとらわれ-空腹も忘れ…

あどけない目をして、そう、——これから傷付けられることを知らない眼をして…

河原にずらりと並んでいる異形の重傷者の眼、裁判、律法-あることないことを言って、

口笛を吹く-わざと大きな欠伸をする-オーバーリアクションさ！ 弁護士！

でも少しでも有能な弁護士になるのが、

あのくらい-あれくらい-そのくらい-それくらい…

多くの過ち。ああ、君は認めるんだね、

だが、キャデラックは欠かせない-エイズ売りのヤク中も欠かせない、

豪華なマンションを手に入れる、というステータス…メグ・ライアンや、
オードリー・ヘップバーンみたいな恋人もいる——ピンセットで試験紙を、
挟むように…慎重に、涙がこぼれないように、心が引き裂かれないように、
立ち止まって振り返るたびに、無実の死を感じないように。

1. 展望台から見る排泄物…深奥の内秘-アaあァああAァァ…分泌——

2. 磁氣的未知-繖形花序…あるいは三角水晶を求む狂人！ダア…ダアアアア！

【すくい取り…船で広い範囲を移動しながら打つのに適し、体力のない人でも練習次第で、大きく網を打てるようになるうち方。】

…「努力に努力を重ねてきたのだ。」

（安価な楽天主義は…飢餓の欲求に等しい）

…「壁によじ登り、なまけ者たちを見てきたのだ。」

（しかし何故だろう…恐怖と心配に満ちた顔を思い浮べる君よ…）

多くの過ち-犠牲の代わりに社会的地位を得、信頼を得た…覚醒的航行…

「遠くなる…まるで途方もないジョークみたいに——」

、、、、、、、、、、

でも君はその代わりに、思いこまされたこと後ろぐらいことが、

ずしりと鉛のように落ちて身に迫り——偏見や差別を中々拭い去れない…歯に衣をつけず

に言う性格が、玉に瑕。多くを求めないから縋りつくこともない。心に描くCDを焼く。ヒ

ーリング・ミュージック。でも多くの欠点で舌を剥く。誤解を招き、互いに嫌悪を覚え喧嘩

別れしてしまう。疫病の塵。何かを哀願するような調子で、聴診器。この吸盤の冷たさ。

、、、、、、、、、、

医師の瞳から炎でも迸りそうな、マグマの熾烈な地上下・・

（嘆く人がいたら）――《立ち止まる人がいたら・・》

How shall I say it?――express it?――put it?

わざわざ

厄はあやかし（＝A Y A K A S I）の乏しい体温からなる白い波頭・・

――濁流の大河にうすずみ色の狂った樹木がしげる・・この窪みに嗅げる――

いまだ語られぬ物語は、エゴではない・・拒みようがない彼の人生の傷跡・・・

――たあいもない　ことばで・・

――ほんとうに　みつけない　なにかを　しるだけで

アメイジンググレイス――

まだ見つからない　人生の隔たりを知る　君・・ベビーベッドの中の神のご慈悲

曲げると折れる-だから冷まして飲むコーヒーのように、

これは確かだ・・まったくの所！・・ご名答！・・これは確かだ・・

「思い切って目を瞑じようとは・・想わない――」

（ひとりの少女がいます。）

両親にオープンで焼け殺されそうになった少女-下を向く、・・お父さんは仕事場の若い娘と浮気し-お母さんが会社付近で駐車場浮気現場を目撃した・・お母さんは胡瓜でお腹が冷え、トイレで下痢。ふらふらと血の気が引きながら歩いていたら、突如空から降って来た隕石の下痢の一つに・・

誰かが嘘を吐くのを耳にして、時計を刻む音が聴こえた――であり早死にをするのは善人

であり・・　頑ななひたむきさ、不毛で、むなしくついやされた才能が聞こえた――で

あり終末論的な陰影、不気味な獣、不可解な謎であり・・　ひと筋の光がフィクション

という想像力の別の名で聞こえた――であり、幸福な日への哀惜、歴史の中に埋もれてしま

った、とある一日であり・・・ 心にとどめておくべき少量の空気、いつも早く始まる春の
訪れとその終わりとして聞こえた――であり学生たちの抗議デモ、反乱と処刑、売春街の目
尻の鋭角な白人女性と歴史の輪郭と痛烈な皮肉そして疑いようなない茶番であり・・

「燐寸を擦り・・ピラミッドを完成させた。」

「ピラミッドは忌々しい犬のように、手を差し出すと、がぶり、と噛んだ。」

でもそれは際限のない女との厄介ごと-二人の影が優しく揺れる窓のカーテンのシルエット、
ト、楽しくて心もてあそぶ賭け事は、恋の病・・恋の沈黙、

百万ドルを集めて・・スイス銀行に振り込んだ ライオンに人の肉・・・

（海で通り雨に打たれながら、見てたんだよ・・浜に打ち上げられた水母、弧線の尖の渦、

雨に濡れながら・・心まで*Blue* になりながら・・やめろ、黙れ・・でも凶星だ、

と、自嘲しながら・・本当は白い翼の鴉のこと-黒い髪は銀色に変色した・・

うらやましくて・・歩く速度――奴隷船の亡霊・・裏切られたキリスト-苦悶の証人・・

鳥のようになれない自分・・まだ卵のような自分・・)

アイルランドの民謡「ネル・フラハティの雄アヒル」

（おお、あわれな、あわれな、アヒルくん）

飛ぶように過ぎ去っていく時間にも――感覚を研ぎ澄ます時があって、まるで寝返りを打

った拍子に腓がえりでもするように、のたうち廻って・・そしてその正体が、はるか遠くか

ら吹く、そよ風、あるいは月が浮き彫りにする、影絵のような、飛びそうな、風・・風だけ

が、まるで寄る辺ない不安に満ちた、この夜を、さまよい続ける理由みたいに・・

――カーペット

「オッサンだってさァ、きれいな足なら怒らないよ。な、熱愛発覚とかスポーツ新聞とか、雑誌に書かれてもいいよォ。ん？ そうだろ。な？ そうだろ」

…カーペットに諭される、泥んこの五歳児。

「でも…砂場で水遊びしたから。」

「ん？ おまえェ砂場で水遊びしたら、公園の水道か、鯉が泳いでいる池に飛び込め。――タピオカのいそうなプールに飛び込め。それによォ、てんめータオルがいるだろ、バスとかつくタオルとか、バスとかつくタオルとか」

………なんで、ぼく、カーペットにバスのつくタオルの話されなきゃいけないの？

――輪ゴム

「バババババ…バカ野郎！このバカ野郎。俺を飛ばすんじゃねえ、飛ばすのはフリスビー。第一候補としてパトラッシュか、パトラッシュか、やっぱり最終的にパトラッシュか。やめろよ、パトカーに追われたパトラッシュみたいなことをするの…」

…すみません、言ってる意味がよくわからないんです。

「バババババー―バズーカ砲！」

………そう言って、人差し指と親指で銃となった輪ゴムを飛ばすと、

怒声と泣き声。

「この野郎！…ああ――身体がひん剥かれちゃった、あァあァ…オヨヨオヨヨ――口ザリアや十字架ならいいけどさ、輪ゴムとか…輪ゴムだし、輪ゴムだから割りばしじゃな

いわけだし、この野郎！…ああ——ピーンと背筋！あァあァ…オヨヨオヨヨ——」

…ちょっと可愛いかも。でもやっぱり——

この輪ゴム、言ってる意味がよくわかんない。

〔 私たちに毎日の糧を今日も与えてください。 〕

〔 私たちを誘惑にあわせないでください。 〕

〔 邪悪なものから、私たちに自由にしてください。 〕

闘鶏の牡鶏…無表情で空っぽの瞳、あるいは密造酒づくり——

（もっと分かり易く言えよ…）

「ちんこ。」とK A M O M Eは言った。

…その瞬間、世界にシモネタなウォールストリート、ベンチャーキャピタリス

ト、スーパーリッチな個人投資家は感涙した。S I M O N E T Aハプニング。

（他人への思いやりや、助け合いの精神が失われた現在…

開けっ広げなおふざけが人を救うかも知れない。失われた愛とは——

燃えてるものを探して——僕は萌えの旅に出た…ストリッパー、女装、

バイブを握ったまま終始変な歌舞伎メイクしてる男…鬱くしい日本の、

忘れ去られた心象風景をお届けします）

溢れるお〇んこを届けたい——

（既に、放映中止になりそうなタイトルで、伏字になっているけど、

乾ききった現代人に本当のうるおいを与えたい）

「いつも心にS I M O N E T Aを」

絶賛上映中

「いくら？」

人が足を踏み入れたことのない道に進んだことがある。

水彩で描く 頭がくらくらする。

（カサガイは岩にくっつく。）…

——とささやく。 煙で目がちくちくした-なくてもよい物を取り除く…

その木はすくすく育った-でも同じくらい僕の良心が傷んだ…

（痒くなると）——（膿がじくじく出てくる）

「少なくとも—— ●▼ ■ ◆

油の差していない機械のように、ギンギンと軋んだ… ジャリジャリジャリ…

He goes——Does he go?

…………面白くひねくれた古木

……弾くんです！」

（本当は、）縄を柱にくくると言いたいはずなのだ——が、一旦は認めつつも、「蠅」を柱にくく

る、と言ってしまふ。〔世界—常識…経験に鋭敏に反応するスリリングで示 唆的なものが〕僕に

こう言わせる——こう言わせる…殺してくる——蠅という新聞紙 ではたき落とした——蠅たた

きで潰した既に、（です（ね 蠅の死と呼べるものをくく る——蠅を一つ消し、縄は二重の意味で

生まれる…「戻れ（ない）」——「崩れ（る）」…

「テレビ・テレビ…キノ—キノオ（とする…）」

いつのことでしたか…いつのことだったかしら——底のない、救いのない、

夢のような産物の背中を見た…それは星！——あれは星！

（トランプのカードは、手品の為の道具です。）

＊

道具に忍び寄る闇 道具。不可解で理不尽-家族、憩いの間、（道具-皿はその時翅に
、包丁は蛇）道具、豊穡の理をあらはす・・

_{1,} 2, _{3,} 4, _{5,} 6, _{7,} 8, _{9,}

道具-直接対象への恐れ-しかし間接により何処へも行かぬ心を確認せり。（道具-僕は、
僕は、自己完結のロボット）――《極彩色・・身体性の欠如・・》

『道具⇔道具』彼等の瞳の中で（道具-物-人・・）

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W X Y Z

●台所 （さあ、絶望せよ――立ち去れ・・）

流しの暗い棚の上に光っている硝子の酒瓶-舌にその味がする。

●バスルーム （さあ、掴め――身を起こせ・・）

瞳の中に滑り込むラベル-分量-見た目・・フォルム――霧の名から現われる視界。

頬の肉-鼻のふくらはぎ-眼窩・・虹彩・・・味覚――

●自室 （さあ、ご覧――お前だよ・・）

獅子舞いの獅子の顔-油紙に包んだ剃刀・・

縛り付けられた櫂の丸太-餅搗き用の杵...

井戸傍の跳ね釣瓶-割れた仮面...

*

1, A B 2, C D 3, 4, E F 5, G H 6, I J 7, K L 8, M N 9, O P

.....何も語る必要がない。

*

[正解] あなたの言葉わかります。

[不正解] あなたの子宮わかります。

*

わかるっていいことだね

わかるっていいことだ

わかるわかるわかる

わかるっていえばなんとなくわかる

でもわかるなんていうやつは

わからないやつのことのほうがおい

わからないやつはわかるやつのことを

わかるといいたいわからないやつだからだ

＊

「前よりずっと遠くなって気もするし・・・前より近づいてる気もする・・・

（でも、自分自身が・・・他人-他者だと認めた現在でも、

独裁者や・・・F B I の指揮官に憧れるよ）

悩みもどうでもよくなってきたし、道に迷ってる自分にも大分慣れてきた」

、、、、、、、、

億劫だった、僕の足・・・内なるもの-裂け目・・・

明確な欲求は無を告発する天啓の悪意だろう・・・でも、忘却する憎悪、卑しい青空――

ちょっと待っ――て・・・よ、僕はまだ裸足、視線の空しい夢、ステンレスな会話、

ねえ、君だけが僕の恋い慕うもの――種子の中に火種がある、

盲目の手探り-狭い壁へのまなざし、白紙の中の鏡の破片の散らばり・・・

「もしかしたら、僕は失われた命を救えたかも知れない」

・・・人道主義者――博愛主義者・・・

「もしかしたら、わたしはあなたを救えたかも知れない」

・・・なめらかなのは、砕けやすい夜の石。

、、、、、、、、

ベアトリーチェ・・・ことあるごとに見せてくれた僕の根強い生への執着の理由、

シャイン

とわ

肋骨を入れたくなる泥の塊・・・光を見るたび、永遠なるもの――

あなたの隣に常に立っている――あなたの魅力なくして目立たない僕も…
あなたの祈りで…僕の魂は、旅の終わりを知る…

、 、 、 、 、 、 、 、

人は人は神聖化し、あなたをあなたはあなたとして――あらゆる衝動が満たされている…

飲んだり踊ったり、笑ったり馬鹿やったりしながら、《崇高であった》…（あることの、

緊張の持続）…僕は取り乱す、泣き崩れそうになる、僕の時計の針がねじ切れそうに、

なる――なれ…ばいい、あなたはあなたのあなたがいたことのない夢の中…

「もうお起きになるの？」――「まさか、これは夢だよ」…
「イズミルの港だよ。」…「スフィンクスの君臨だよ。」

（僕に愛は必要ない――だって僕は愛そのもの…愛は永劫の風…存在する意味はない、

言葉はサインした契約書…価値なんかな…い――）

「多くの犠牲者を作った…僕という有罪宣告へようこそ。

――君の胸に突き刺さらない、国や、人…年齢の地質学」

僕がどう思っているかちゃんと伝わってない…ただひとつの場所…
でも、虚構は生命の、肉体のいかなる細胞のうちに宿らない、だから、

（心の声に従ったら…あたりに人影はまったくなくなっていた――

、 、 、 、 、 、 、 、

見知らぬ人はいる…つまり目の前にいる僕だけが、目を醒ましている世界…）

深い空-おお神々しい美の無限の扉よ、秘密の破水よ…
無言のおしゃべりよ――かわるがわるやさしく僕を満たす、快楽の憂鬱…

――キリスト、これが神話だ。誇大妄想-勇敢に対する勲章…莫大な値打ち、

それを支え得る常識の正確な把握-認識するヴィオロンだけが、王を真の王にする…

彼はバベルの塔のように優しい-それゆえ彼は瞳孔を通った礼拝堂のように-夕まぐれ、

何も思い出さない…誰の中にも存在しない――陰気な闇刻を後押しする魔術的な氷には…

「絵の中の咽喉に、あなたのいがいがが見える。エジプトやローマ、水甕-光縞、

あなたは泣きぬれてる、お棺・・あなたのドアが蹴破られた空想のアフロディーテ、

――かくも、善悪の区別・・身動きできない、荊の人生が、十字架が、群衆の嗟嘆、

苛烈な愛と美の女神が・・・そして聖書が・・聖なることばの列なりが・・・」

「影が凝る時、薄い虹色をしていたら、」――「していたら?..」
「していたら――滞るだけの感受性・・僕は特権的な感傷の反映..」

、、、、、、

僕の生命は、叫びながら儚く消え去るも・・非常に深い皺をつくる、その背中に

銃を突き付けられた想念の否定――愛国心も、悪党くらい満足させられる・・

僕の足枷は、いずれ帆となり・・僕の言葉はいずれ、君の生を延長する旗となる、

（でも、閉じられた回廊の幻想で・・僕の凝縮は不可視ではなく本質そのもの、

すなわち偽りであり・・仮面にしか見えない――有機的生命体）

そしてこの階段は、あなたの微笑みを知るためにある・・あなたの、ひどい仕打ち、

あなたの、虐待・・無意識のうちに了解されている-無力なる遠近法・・

そして完全な重荷は涙の侵食を生み、墮落する土地に嘘の堆積　を・・

でもおいで、世界は僕の目の前にある。だって、『世界（とは、）』

ここにいる地理的な拡充の最小単位・・自分の取り巻き、自分（の、）-

鎮魂がDNAレベルの螺旋を加速する・・超越への曖昧さ、紺青と深紅・・

――僕の目の前で、僕の魂以外に興味がないというふりをしてる・・

民主主義も・・資本主義も、世界を統治できないってことは確かだ..
というよりも、あらゆる考えが、何処かのメイド・インである限り、だから

「僕は思う・・春は瀕死、愛情への矢において倒れる季節――」

「手に負えそうにない、その椅子にすわってもいい？」

諸原因がメタモルフォーゼする、目を開く、目を明く（足の向くまま・・）

波は葉むらのきれぎれの文字、いとしい影は網の目の中、

心のざわめきは、（昨日への、）——（辿り着けない君という過去への…）

きれぎれに浮く、悪夢——階段を一つ下りれば…また濡れた足首が折れたら…

樹齢数千年の木々が…おぞましい蒼白な夢を語る——探し求めてやまない、死

それはもう飽きることのない、忘れぬ夜明け-黎明への乾いた瞳の-乾いた手であり…

あなたはもう、小さなおもちゃを抱き締めている僕がそこまで辿り着いたのを知る…

天使等は謳う 秘密をかきわけてすぎてゆく舟の夕間に
天使等は謳う 生温い掟に麝香を焚いては比類なきこの暗礁に

「僕は終わった——両腕で、あなたを抱き締めても、僕は悲しい愛の夢と思う…」

「あなたは知っている——死の深部に、象眼された青い意志があることを…」

ひとりぼっちで淋しい夜、教養がこんな風に駄目になる、

穏やかな宝石のよう——に…ほらまた、強欲が邪魔しにやって来る、

法律違反や、絶滅のニュースがやって来る、平和な迷宮の中に、石の女神…

——彼女はきっと目覚めない…だって、彼女を目覚めさせたくないのは、

いつだって…僕だから…僕は糸を手繰り寄せて、君の赤子、君の盲目…

いまでもやっぱり、心の中で…君のことを想う——

「本当の人生とは何か？…本当の愛とは何かと——僕は探してる…

見つからぬまま、しかめっ面しながら微笑む、僕は殺された少年…」

卑しく意地が悪くて、臆病な、それさえ…

心地よく冷たくて爽快（な、）

くりかえされるリズム（で、）…がりがり、

（飛ぶ、）…蚊の羽音も触（狂）れない

（**飛ぶ**、） 斑例ない——

「宇宙はまだ——あどけなくて…影で、ふわりとした——境目…」

小鼻 - 木にくぐられた自転車 - 犬 - 東西南北 - 君は触れない…

hurrah——H U R R A H…ふれない…魔法だけが 爆けて燃える…

[何を叫べばいいのか…わからない…砕かれた僕の命は、後三秒、

満たされて——た…屑 - scrap - S C R A P - 僕は…

形とか…意図とか——そんなこと全部忘れた…]

都合のいい言葉を並べてる詩人たちが、戦争を、災害を玩具にする…

（ すべてを壊したくなる——シラナカッタヨ…

オサナカッタ…ヨ—— to turn red——turn black…）

「ねえ、いますぐ死んで…この世界の非才たち、さっさと死んで——」

——僕はオータム、絶滅へと君を案内する…

——僕は 眠くなってきた…

昨日は「身体の絵…」を書いていて——「象の耳」がない…

下手くそ、そんなの、灰じゃない…

High - H I G H - 下手くそ（すぎる、）

めくらましはやめろ（*過ぎる*…、）——人間の一生が…

（飛ぶ、）…忘却した雑音（狂）れない

（*飛ぶ*、） 言え …ない——

「だって——君は嘘をついてる…才能は人を壊す…」

——ふと向こうに、晴れやかな日の光を見出して——

酸素吸入 *time marches on inexorably*

「いつか知ってしまった…はっきり答えられたら、小鳥はいなくなる…花卉はなくなって
しまう——薄明かりの窓越しに嗅いだ匂い、電車の雰囲気…」

そ…れ…でもしろっぽく…

みやく…はくは…くちずさむ…

（*飛ぶ*、） フライ …トゥー—ミイ…

つ…め…たい…君の空想…

ま…ちくた…びれ…た写真…

（*飛ぶ*、） ターミナル …ター—ミイ…

…濁ってゆく眼の奥が、抜け殻になる…！

拙い惑星の花——僕の宗教的水路…

…催涙ガスに南京錠、pressure -P R E S S U R E…

……「不誠実な人だけが、嘘の生活に微笑みを浮かべる」……

…………「早く死ね、生き恥をさらす詩人気取り…」…………

うつろいやすい世界は、僕の血管の破裂…

絶え間なく吹く微風（の、）

それでも現実か（で、）…天皇制、神道的宗教

（飛ぶ、）…時の破片が降（狂）れない

（**飛ぶ、**） 掉砺ない——

その呼吸 - 精神のチャイム - 弱い - 君のために - 僕の…

hurrah——H U R R A H…ふれない…かえ、ら、ない 夜明け…

〔ナイチンゲールを…ミルクに変えて…僕は、ソドムとゴモラさ、

頭がおかしくな——た…屑 - scrap - S C R A P - 僕は…

殺されるんだ…そして君は多分——色んな奴に-まわされる…〕

生きる価値のない女のデリケートなふり、死刑だ…頭のおかしなふり…

（ すべてを壊したくなる——シラナカッタヨ…

オサナカッタ…ヨ—— to turn red——turn black…）

「ねえ、いますぐ死んで…僕は子供をさらって、夢の国を作るから——」

——僕はオータム、来るべき冬に備える…

——僕は 眠くなってきた…

lasting for a markedly brief time——draw slowly or heavily…

昨日は「水掻き…」をしていた——「ペ ニスス 」…

古代オリエントの『ギルガメシュ叙事詩』…古代インドの『マハーバーラタ』

知識や認識の狂気に憑り依かれ、パラノイアとなった僕等の物語りは…

まるであらゆる真実を積み重ねていけば、神にでもなれると囁くかのよう…

ジジジ……と 強い劣情のリズム——鬢髪を逆立てたような、燃えるリズム…

即答などない、けれど言語のイメージではない、夜の街に噴きあげた、髪の毛の山…

Uh uh 網膜的色彩興奮-最高速度自己消滅……迷宮だね！

Uh uh 攻撃的注意干満-最高速度自己消滅……やがて、君はデリケートなふり…

殉教者が言う「司祭が売春婦とやりまくってる。」僕は聞く「ミケランジェロも？」
「もちろん、ミケネコも…またたびも——あらゆるものとやりまくってる。」

「空気の底で…孤独な口笛を吹いてた——意味のわからない世界に疲れて、

俺は眠るんだ…押し殺した核兵器の不安-社会正義のない仮面国民たち…

報道を歪曲するマスコミーそして俺は思う…意思疎通は必要ない…

ハリケーンよ、来い…海嘯よ、来い——こいつらを全員殺せ…」

、、、、、、、、
僕の凶暴な言葉が、世界を墓地にし、ゴーストタウンにした…

あっけなく燃え尽きた線香花火と、好きな快樂-幼い心の見せる連続写真は、重い脚…

フューチャアア——道化どもに、スパイネットワークを与えよう…

「調子のよい返事をする女を、唾液まみれにして、山で棄ててくる。」

…君は今、監視されてる。でも気をつけろ、暗号を口にしたら、変死する…

「赤ん坊より必要なもの、お金という信仰の森に深入り…。」

…でもためしに、受話器をよく聞いてみろ——笑い声が聞こえる…

そうだ、それはまるで壁に押付けられた蚊のような、不気味な血だ…

思い出さなければ、トビラ-トウビラ…何かを欠落させたまま…

痛みの出所-場所がわからないのに——気がつくと、氾濫…

、、、、、、、、
命の光は消えてゆく——あまりに輝かしい夢だけが美しく消えてゆく…

【おじいさんは山に汚い金を探しに・・松茸や、甲虫を探し・・・孫のために】

【おばあさんはサテンやシルクとなり・・A Vに 詩集に・・自分の欲望のために】

(ここは薄暗いレストラン、) 青い光が素敵な、狂気が魂を語らせる馬車・・

.....a reeling sensation

.....to cut something open in a swift manner

.....a star glittering beautifully at night

いつかその内わかるだろうって思っていたことが・・もう信じられないよ、

複雑な表情をして、のけぞった僕の身体-背中にチャックがなきゃこの空虚を、

説明・・できないー一切ない表情をプライヴァシーに変えて、上等の皿にする・・

わかりすぎてダボダゼ・・くねくねアナコンダが小動物を呑み込んでエネルギーにする・・・

嚙下吸収-上の方で、そしてまたすぐ下の方でありえない闇の息子がむくむくする、

スパイクシューズエレファント -致命傷をうけたお前・・

腹の底からこみあげて来るような衝動を感じて、ものも言わず、動かずにいながら、

地震で柱の歪んだような僕は、ウェイトレスを見てる-僕は、

モンキーダンスブローチ -あるいは、

身体の中に何者かが入ってゆくような、まどろむような卵感覚-自転車のペダルは廻る、

ショーウィンドーブルジョアジー (と、) 足音・・気付けなかった、からくり箱・・

フューチャアアアー壊れてゆかない心臓が・・脈拍を追いかけてる・・・

「あ。彼女に似てる、あの表情がちょっと似てる。」

「信号機の世界。」

銅製の雨どい・・

いやまったく似ていない、と思う・・でも、似ていたらプロマイドでも作るのかい、

それともまさか…お願いだ、ひと晩僕とデートしてくれないか？…とでも言うのかい、

髪の毛なんかとかしてさ、香水ぷんぷん…やること結局、あれじゃねえか、

ローリングサンダーパイナップル …よくわからねえ、

でも早魑に飢餓-死の大合唱…死神達が、あれ…「あれ。」（あれ。）と言いつける、

そして僕まで背を丸くして、あれ。まったく自由にならない呻き声、あれ。

エルサレムアルゼンチン …だから意味がわからねえ、

けれど、復讐の目隠し-ミルクや蜂蜜のデザート…あれ。あれ。あれれれれれ。

なんという奥行きのない、うすっぺらい言葉。あれ。あれが折れた腕、筆…意味――

ハイエナパワーブーツエキセントリック …それで？

フューチャアア―僕が生きてる時間が…どんどん汚されてゆく…

「君がいない人生は…淋しい墓場だ――ねえ、神様、それならいっそ、

きりぎり舞い――きゃっきゃっ…シャボンとか、石鹸とか、ボディーソープとか、

もう、泡…時計の針を戻すか、早めるかして、海を殺してくれないか？…」

（時に、僕は君の優しい瞳を思い出す…何度も僕を甘えさせ、僕を許し…

そして僕を傷つけ…それでもまだ、君を傷つけるよりよい、と思わせる――

あの瞳の輝きの心臓の鼓動、あの瞳の…僕を見透かす、永遠の水の流れ…）

フューチャアア―なんというか…ウザい…

――重い物を…持上げる――引っ張る

カオス

――（混沌）

とろけたるおもき鉛のうつし目にひらめくものを、

はてもなく限りも知らぬ『罪の日』花をつみをれば、

うす フレスコ しののめ ギア
淡れゆく鮮畫・・・ 暁晨の齒車・・・

紡錘形の飛魚、しだいに細胞の皺襞の中に――

――深くかくれている本当の考え・・・奥深く――繊細、

――（長く続く）・・・《波が》・・・激しく短く響く・・・

ほのほはひらめき過ぐる胸を燃やせども

あまたの影ぞ生命をてりかへす

提灯鯨鯢が、うとうとしている・・・シーラカンスが、
A B Cを歌っている――禿鷹がいる断崖絶壁、月の光の射すごとく、
夜ごと日ごと、不幸で孤独な、海の岸邊の王国・・・

曲がりくねった坂道で、前へ傾く・・・赤く錆びている螺旋階段のような孤独な時の摂理・・・突

然強く吹く風は、蛇のように、先の方だけ細く鋭く尖る――上辺だけの青写真だったな、と

気付くようなことばかり――そうさ、黒い天使！・・・黒い天使――

（たくさんの物を並べて置く、いく日も降り続く雨、くだものがよく実る年）

（大またでゆっくり歩く――多くのものを勢いよく外へ出すように！・・・）

（限りなく寄せてくる波・・・深い考えもなく、曇りがなく-よく映る鏡・・・）

・・・深い 断崖。

（紐でしっかりとくくることのできない、小さくいくつものに切れた煙）

（息を深く吸ってください――早く始めれば早く終わる・・・）

（靴をよく磨いてくれ・・・油を差すように！ 物が円を描いてくるくる動き出すように！）

・・・深い 断崖。

A. くらきあめはひとすじのひかり

・・・「平等」や「義」や「独立心」を重ねずる思想――
およそ世界には五色人・・・五線星と関係するか、
サビアン占いで言うところの“活力”・・・
猛獣の檻の眺望のすべては死線を巡らし・・・

なだらかに砂利は魚類の涙
肩にくだける紫の虹の消爰

B.ちのみごの顔の眼の中にひゞき

――その一枚の地図の中で 顔 声 身体 （許されて…より…）

記憶に残す (a) blank space/ (a) white space

あひまに、空が、あゝ、いろんな鳥が
小路に、なほもかたい羅紗、女をとらへてゐる

…行の間隔や傾き、音・息継ぎの妙――接続する、空間処理…

刺繍の間に文様がまんべんなく全体に散らされているように、曼陀羅、
胎盤・女体…忘却を中空に宿したままの意識（で、）
……さらに未知へ、長大な詩篇へ――

C.雨あがりの日が射すことのない庭には

…アスファルト、粉碎された小石、砂が混ざったもの――

石油とアスファルトの中間の濃厚な黒色のタール…フェルト繊維…
運動靴の片方みtainな形になったポスターは誰かに破かれてる――

やはらかい風の、息の根も止まるほど――
やはらかい風の、ふみにぢられてなほしろゐ花の――

君はきっと、僕の言葉がどういう種類のものかわからないと思う――

僕は死ぬほど傷付いたことがあるんだよ、ねえ…人を試す僕も、嘘をつく僕も、
そしてそれを物語だという僕も――全部、わからないだよね…

黒い悪魔なんてもはや一匹もいない…黒い天使――黒い天使が僕を骨と皮にする。人生最

悪の気分で僕は防波堤を見てる。缶ビールを買って、高層住宅を見てる。白いシャツと、白

いズボンをはいて、白い帽子をかぶっていた男。きっと、僕のように――アスファルトの道

路の脇にある街路樹を、鼻で笑ったりしない。きれいな家の芝生を見ながら、のっぺりした

デパート、洗剤臭い砂漠の一典型と複雑な比喩を言ったりしない。

彼はおよそ、午後の向こう岸に、しろい羽根を探しに来たような清潔感をただよわせてい

た。防波堤から、市街の方面を振り返ると、真新しいガソリンポンプみたいに、人の姿が見

えた…エアコンや自動車の排熱、緑地の不足。タクシーを呼びとめるには必要以上に大きな

声でしゃべらねばならず、気の変になりそうな僕は、ヒートアイリング現象、フェーン現

象、と考える。多すぎるんだ、コンクリートの建物やアスファルトの道…水はすぐに蒸発して、電線を切りたいような気分…

でもテレビのスイッチを切っても、もう残像は残らない…

シャワーを浴びると、肉体の汚れどころか、精神の汚れまで落ちる。

「何をしてるんだ？」

でもそんなの嘘だ。

でもそんなの嘘だ、と言っても。戦争はそれほど悪くない。価格という名の戦争。女選びという戦争。生きてゆくための戦争-競争原理に、僕等は時々気のきいたBGMを想像する。

「ビールを飲んでるのさ。」

地均しという、ローラーの付いた道具が海を滑ってるのさ、と僕は思った。

滅亡する…鷗は空を舞い、像が浮き彫り型の版から瞳の中へとローラーを使って転写され、僕は透かしが入っているかどうかと考える。でも多分、肌を光らせたただけだ。

「美味いか？」

「飲むかい？」

（僕はおもむろに缶ビールの一本を差し出すと、ありがとう、と言って、プシュッと開けて飲んだ。よく冷えてる、と乾いた声で言った。よく冷えてる、人生だってそうさ…と、僕が心の中で思ったことは、いつまでも震えてる…震えたまま、シティホテルで宿泊して、魚の数をかぞえてる。田舎で星の数を数えるようなものだ。）

でもきっと、僕はそうする——二十六歳だったから…

でもきっと彼はバス・ターミナルや、スーパー・マーケット、ガソリン・スタンドを見ている。そしてスポイルや、エクスキューズという井戸の底から、プラットフォーム依存症、銀行依存症、コンビニ依存症になる…都市生活という名のマーキングと言う習性。

…全身白い男は去って、全身黒い女の子がやって来た。黒いシャツを着て、黒いスカートを
はいて、チラッと見えた黒いブラジャーなんかをして、それと、黒い帽子をかむって、胸
元に黒い花なんかをつけて。

「わたし、閉所恐怖症なの。」

…僕はたびたび思うけど、それはやっぱりおかしいということ、どうしてもっともらし
く言うんだろう、と思う。もしかして彼女には、僕が否定しないことを本能的に感知してい
るのか、と思う。

、、、、、、

でも僕はもちろん、潜水艦の艦長ではない。

だって閉所恐怖症がどういうものであれ、黒はそれを連想させる。

でも確かに、黒が好きな閉所恐怖症がいてもいいのだろうと思う、多分。

「そうだね。実は僕も、高所恐怖症なんだ」

「高所恐怖症の人って嫌い、せめて広場恐怖症の人がいい。」

もちろん、誰もそんな理不尽な理屈を求めている。

「ねえ、あたし近頃、可愛って言われるんだけど、どう思う？」

「ゴシックロリータとして？」

「もちろん、ゴシックロリータとしてじゃなく。」

ガソリンスタンドや食堂、トイレ施設を提供する高速道路上の場所みたいに、まるで、
気がつくと、それらはステイタスとして僕等の紙袋の中に入ってる。生年月日も、血液型も
、住所も、電話番号も空中都市みたいに見える。クレジットカードをPOS端末にさし込み
、暗証番号を入力して、ガソリンを注入する――

「ねえ、黒い悪魔って見たことある？」

「ない——でも、黒い天使ならそこら中にいるさ」

（このすばらしい液体をあふれんばかりに満たした…）

（見たア-した…見たあ…らしい…みたらし みたらし ミタ！新しい-見た）

ほーお ほーお…耳、みみ みみ みみ——ピチャル ピチャル…

- 1 もりにあめをふらせる 2 はなのあたまにあせをかく
- 3 みなそこにゆっくりとひかりがおちてゆく

（ガラスの壺は粉々に砕け散った…覗きこまれて——いる…）

（イルボン-いる…イマジネーション-イルミネーション-イルボン…いる-いるか？）

バルブによって水が膨れ上がり、ねえそこに脈打つ血、よじれたオークの呻吟に、

カンコンカンコン…カーンコン その真下 ゴロヤゴ ゴロニャゴ ごろやご——

- 4 やわらかなひかりがふりそそぐいंकです 5 だんろのすももです
- 6 どろっとした たしつのしかい ざじっ と あるくあしおとです

（メロディアスな糸杉の揺れ…ひるがえる遙かな裳裾——）

、、、、、、、、

そしてまたお喋り…薄暗くて淋しい道で見るコンビニでたむろする誰かのお喋り…

「それでいいんですか？」（いいんですよ、煮干しや油揚げや味噌）

「いいんですかいいいんですか？」（タイヤ嫌い、タイヤキ食いたやアリンコロ）

……ジュッ ジュッ ジュジュッ

ななめのひび ななめのとんじょう ななめのいくぶんかげりをおびた

ななめにふくらむかぜ ななめのかべ ななめのめにはもうみえぬもの

ななめにおよいでいたなおまえ

（コーヒーブレイク都市-フルータリアン紋白蝶-テイクイットイージーNEWS）

…パンプキンは農夫の手で、携帯電話になる

額の汗をぬぐった農夫は連日の猛暑でじゃがいもみたいに見えました。じゃがいもは球根

ではないかしらん、と思え。ないかしらん、はきっと優しい気持ちで煮られ。

Chorus：ニラレバ！ニラレバ！

若い生命のほとばしりが血管における皺やカラスの足跡を激しく通過した。コーラスと共にシンフォニーを下さい政治の話題は陽気な眩暈-コンドルを舞わせる・・

.....ジュッ ジュッ ジュジュッ

ななめのないふ ななめのさるすべり ななめのとくり

ななめのきゅうり ななめのしっぽ ななめの――ななめの？

ななめ ななめ なめなめ・・なめ！

（君は器用なナメック星人-ナポリタンなつかい棒-さまよえる我等アル中！）

老化の影ふとしも思うワインにさようなら真紅の夜明けさるすべりの赤い花

ルームサービスに電話をかけて、食事を持ってくるようにとは、いかない、

ふかで

（Echoのように、）――血が滲んだ深傷の小動物のような・・

「ねえ、黒い肌の女の子を GANGLO っていうように、素敵な名前をつけて」

「GANGLO、ジグロ・・ニグロ――そして君はマックロ！・・そしてマグロ」

こむらさき

つまらない、と言われた男の子は濃紫の茄子で少し下世話な八百屋です。

Chorus：廃材置場にウィスキーの瓶が落ちてた！

のろし

狼煙が上がっている・・落ち着いている僕、賢げな僕は、憐れにも、月に向かって角を伸ば

す蛞蝓みたいだった。紳士達は言った、老婆の醜い容貌を用心深く危険なたわごとや、陰険

でいかがわしい囁きを隠しながら。でも玄関の灯りはついて門松を置いた。クリスマスツリ

ーを飾った。ビデオをセットしたやらしい汁という雨が降りだす前の喜劇×サスペンス。

.....ジュッ ジュッ ジュジュッ

「黒が死んだら、何て言うの？」

「まっしろ。」

こんにちは、と、部屋の扉をノックする・・豚のために餌をやると知りながら・・幸福に流れる薄いレースみたいな（～のようなもの）が溢れていて、それを僕は（～だと思われる）だとか、少し古めかしい感じで（～だと思われ）へと変換していった。

「黒い砦。黒い鳥が-黒いトリガー。黒い知。黒い血」

（と言っても、これ、僕の勝手な変換なのです。）

「黒い鳥で。黒い時が-黒い鳥が。黒い血。黒い地」

（かも知れないでしょう・・かも知れない運転を心掛けて、教習所に臨んで下さい）

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、

そして僕は酔っ払ってる-コマーシャルにやられて、ざあぶざぶ・・どんぶらこっこ、どんぶらこ。窓を開けると、桃だ！・・剃刀に肌をやられながら、いつのまにか広島原爆ドームみたいになった僕は八月の虫歯。ヨーイドンで真っ黒なシャドウボクシング。スマイレの花も、モクレンの木も、蜘蛛の巣も建前の夜の壁。そしてヴェネチアというイメージの影絵の小舟に乗って、もっと凍てつく世界・・さまよう悲しみの世界、あの川の流れるお伽噺の世界で自然の声に耳を傾けてる・・・

「あなたは腹黒いのと、原っぱが黒いのとどちらがいい？」

「わからないな――その質問の意図がよくわからないな」

「駄目ね・・男の人って――」

（まるで、僕の過失どころか、人類における男性の過失みたいに言う女！）

[心の安らぎは調和を失い・・僕は君を守る為の理由を奪われる。

――行動に移すべき時はいつなのか？・・小鳥や蜂たちは教えてくれない、

蛇の道は蛇だよ、とビジネスマン・・目の前に迫りくる、不幸せ・・

いたるところ洪水、たちのぼってくる川霧…硝子越しのラジオ放送…]

街燈が漆黒ノ闇ヲ蹴散ラス頃、僕ハ孤独ナ魔法ヲ掛ケラレタ向日葵。

目覚マシ時計デ呼吸ヲ開始スル、何世紀モノ幻想ガ黒イ向日葵ノ種子ヲ生ンダ。

でも-「何一つ浮かび上がって来ない」-(許せ) …

でも、さっき流れ星-うなだれた白い百合のようなものを見たよ…

(「耳を傾ける建物におけるBell」)

「ねえ、ホテル行かない？ もちろん、何するわけでもないんだけど…」

「もちろん、わかってる。僕も、何もしないよ」

(こんな、わざとらしいことを言ったって…いいんだよ——いいんだ、真っ黒なカンフー

映画に、極彩色のノイズ。ゴムの世界-輪ゴムを飛ばしたり、種子をつけた輪ゴムが、ズブズ

ブアアンなものの中へ、アアンなものの中へ—アアンなものなかへ…いわずもがな最中へ)

、、、、

憐れな男よ——どうしてお前はそれをモルタルや煉瓦だと言う、薔薇の宇宙で記述するク

ローゼット金メッキフレーム-雫は、太陽の中でいくつもの油膜の虹。

でも、もう二度と言うつもりはないよ、とイメージ上の彼…

家に帰りたいなんて…故郷に戻りたいなんて…

でもじゅくじゅくとした、桃のように…不夜城のシャム双生児——冷たい鉄の足枷、

……ジュッ ジュッ ジュジュッ

じゅくじゅくになりながら、僕は海を思い出した。腐ってゆく-屑になりそうな破廉恥なも

のの中で、動物と人の契約を思った。神が与えた試練と、ゴシック体の精神的な情熱の欠け

たアピールと誘惑と理性の死を思った。何が正しいのかはわからない、でも正しいことが間

違っているかどうかはわかる。正しいことが必要かどうかはわからないけど、正しいことが

不必要かどうかは個人の裁量。いつだって僕等の後ろには、そう、後ろにはマラソンランナー。ぴったりと隣みたいに後悔と、弱々しくて臆病な僕等がそこにいる――

タンポポの綿毛が飛んでいく-紙ヒコーキが高層ビルから滑り降りてゆく・・

突然すんと落ちる重力・・遠い生き物たちの孤独を感じながら、夜の闇に溺れる僕等は、

ようやく方舟の中に辿りついたのか、それとも方舟の外側で彼等を馬鹿にしていたのか――

（それでも――それでも・・驚くほど長い間泳いでいた）

「むらむらと肉を盛りあげる-もの憂げな気持ち・・太ってゆく身体……」

……前進する軍隊のように――何か一つのことを信じ続けていると・・
明日の支払いに少しずつ、本当に少しずつ遅れてゆくような気がする……

山奥で森林を伐採した

村人の言葉が、鼠のように過ぎる・・

「飛行機だ」――「飛行機が降りた」・・

秋の紅葉、黄葉――（にして、）昂揚

まるで、旅行パンフレットのざんざ降り

そんな光景を見てたら伝奇小説みたいだぜ

数年前は、それなりの会社、それなりの給料

《 》が見えてくる、空欄――

…………ラブ イズ ア、ラブ イズ ア

――夜でも皆が歌をうたって、町は賑やか・・だった……

てきとー な かんじで すこし だるかったけど

「無難な自分にやりきれなくて、やり甲斐がなくて、けれど、

給料をもらえる仕事……」

――ライフワークもどこ吹く風で、休日は思い切り遊んで、

「リラクゼーション！ アミューズメントパーク…」

——それなりにのんびりと過ごし、人の真似ばかりする厄介な癖（を、）

解らん。何の事ッたろう…と、ぼけたり、ふざけたり——

[自由律俳句]

耳たぶのかたさ 朝の会議 そして今日を寝そべってる雲

東風が山からあたらしく吹いて来た

必死の哀願を湛えた、断末魔の怒りを僕は聞かず…

ただ毎日、自分の気持ちを誤魔化しながら暮らしていた…

一触即発の事態を嗅ぎつけた野次馬どもが、こわごわ顔を突き出し、

「マンボウのような顔…」

…………マニアックなタイトル。

（欠けすぎた月みたいに、半分にも満たない彼や彼女の表情、）

——稀薄な意思表示…臓器提供カードは○と×だけでいい、

（と、）思ってる僕が何だか、不気味だ…

明方と日の出ごろとのあいだにその風は向きを変えて…

やにわに宙に舞う。威勢…鳥肌の立つ、数十羽の飛翔、

まるで峯に触れて冷されて、墨が水墨画になったように、

やがて、窮すれば通ず…

背丈が高いほかにはこれといって特徴のない、

あの山に紛れていった——紛れて いった …ヘイ、ボーイ！

カモン！

ハマってたわけじゃ全然ないけど、

ひとりにさせないで…

へえ…（ただ）しく さら さら と

（まが）るものだなあ …

（そんな、ものの言いかたをしちゃ、いけないよ。）

体をごろりと横に倒して、左の手に…左に目を据えて、

重心を置いて…

（へん。こごとを聞きに来たようなものだ。）

やぶれかぶれの手榴弾を投擲する…出撃命令を待つG I――

すかすかメール打ってる

…生の不思議に魅入られた迷いの森で――

…………愛を探す、夜の旅人

ふっと眼にとまる

車いすをご利用のお客様へ…

「なんか 優しい…」

のっぺりとした字の間抜けな立札

馬小屋で、馬が鼻をならしながら頻りにあがいているような文字

ごわごわ、と僕の心を鳴らす

背中が光ってる純情な女の子の感性みたいに

⇒ ○×へ数キロ

混ざり合いたい…溶け合いたい――犯罪の目撃者…

ざわりと揺れる…枝のやわらかさ…タまぐれ、

DNAは幾百万の鴉を巨大な癌と囁く…

くっきりと浮かぶ富士額…つづられてゆく悲しみ…

（いつだって僕は…一か八か、危険を冒してみなきゃわからない性格…

ハーモニカ状のおんぼろアパートで、血を思わせたものが拭きとられてゆく）

ガマガエルやイモリのように、加害者や被害者がいるとしたら、

…弛んで外れたネジは、真夜中のブーツの踵が火花を散らすのは、

悪魔のようにブリキの缶を叩き潰す青銅の鎧の騎士を思い描くのは…

「――支え合おう…」（A氏）

おっと、キャッチフレーズのような言葉…

これは目の痛くなるような夏の空を背景に、うすすみ色の意識、

読み進むたびに蜘蛛の巣のように次々と罠にかかってゆくと思えない、

数百段の嫌がらせと思えない階段を昇っていた時に、

（神様のご意見とやら）――《いわば、荒地から先祖を呼ぶインディアンの声…》

時々考える、隠されたパワー、超能力-不思議な力-先天的な能力…

そしてその為に…“鏡”があるのではないか――“真実を求める感情”が…

とっていた――思っていた…

――きっと別世界の陰謀に、君は科学を否定したいだけ…

――だって科学は、大勢の人たちを焼き殺したから…

（絵本を抜け出して、）

…他愛もないうわさ――うわさ…

テーパリング・クラウド！集中豪雨の前触れ…

（それは、交渉など地道な積み重ねができる人、ということですか？…）

ということ（は、）アンティーク・ショップで、

古書を、ソファを、家具を、照明を、小物を――

ということですね！

放尿の音がする…ちゃぽちゃぽ、と畸形の標本箱の底に、
途切れ途切れの水風船を弾ませている――

「思い切り進め――遙か遠くの船のように！」

「言論の自由は香水から…心が罠でも、伝道の冷たい海の傍…」

「設計時の意味論的間違いを検出する」

、奥行きの高い香りをたたえる。

波紋――さまざまな紆余曲折を経ながら…

（水神があらわれると、神木-この柳の樹が揺れる…）

――ひいやりと流れて来たひと糸の涙

「堅実なプロフェッショナル達が、もしワイングラスに入れられた、

一滴一滴そのものなら、限りなく透明な、その吐息に曇りたい…」

おっと、何か話している！

チャールズ・ブロンソンをイメージさせる渋い音声で..

たとえばそれは古い——本当に古い..真空管ラジオから！..

あるいは大学図書館のカード目録——

(ペイントテーブル..ペイントキャビネット...ああ！)

(ああ、愛しい人よ、くれぐれもこのことは二人だけの秘密に——)

その時の注目検索ワードは

「根拠となる事実（仮定を含む）」

重厚感たよう革張りの背表紙——味わいのある色味に変化したページ——
ディスプレイにお勧めのアイテム——

「いくら——いくら..言葉を連ねても、太陽に背を向ける《影》に過ぎない。

ちょっかいを出してくる影たち-負債たちのように、

、、、、、、、、、、

方向転換できないし——もちろん、友達じゃないし、線はスタートラインじゃなくて、

領土だし..わかる居場所はといえば..自分のいる所だけ..」

混乱が長く続いている気がします

——誰も信用できない時代が続いています..

...そうまるで、ここは超高層ビルの会議室で、

君はもしかしたらマヤコフスキイのあの詩について、

ぼんやりと想像したかも知れない、いわば悩ましい誘惑に..

ドイツ連邦議会の特別委員会会議室でなく——DGベルリン銀行の会議室でなく——
国会議事堂でなく——テレビ局の狭い会議室でなく——

ワンマン社長が悪夢の鏡像。

悪夢とは何故か？..鏡像とは何故か？——

だってもう既に君はあやしいまやかに揺らめき果てている..

シガーケースに高級葉巻、ジタンの灰皿..

ゴム手袋-(その、)手袋にピンセットとメス..

(プラスチックのナイフで、スパムを切るみたいに、)

器用に切開、器用に摘出..マウスのさまざまな部位

べとり、と銀の皿に置き..生理食塩水に浸ける——

ロール・プレイング・ゲームは指輪物語の設定から大きく影響を受けている…
有名な話だ—でも、驚きで顔を引き攀らせている人にとっては、
呪われた細い糸であり、灰色だかどめ色だかのボア口の悲しさ…

「無理矢理押し入って、いつも気になってしょうがないものに触れる、
それなのに、自分はまるで彼等のことをずっと気遣っていたかのような振る舞い、
洗練される誠実さ…海のうねりのような、まだ見えない、奥ゆかしさ—
うんざりするカイン…苦労の種、良心という生気の道案内をやめる—
触れたら貰えるみたいに、すべてが恥-それでも始まった時のイメージで..
そしてそこには、愛の感じを忘れてしまった、あたたかい抱擁を知らない、
夜中の駅前があるよ…」

もう一度、言ってくれませんかあああああ！

ともあれ彼は座っていた、
一九三〇年代のイギリス製チェスターフィールドソファ（に、）

サクソフオーン…テナアサクソフオオノ—
時代が変わっても、社長はジャズが好き…

「じゃが、事業-戦略マップ-目標..となれば—」
カスピ海ヨーグルトみたいな上層部連中..おお、宇宙をさまよう数千年後、
冬の光の淋しさ..曠野に、怖ろしげな女の顔が浮かぶ—
おっと、つい、ふふふふふふ…
いい加減なお世辞を言っても、汲みたての水を 鉢
（に、）入れるようなもの—

「みずがめ座の霊的な時代です」..

時はゆっくり流れていく、モンシロチョウのリズム（で、）

少しは雨なんて降ったのかも知れない…

昨日、パソコンの画面の向こうから
壊れてしまわないようにする
気配や、息遣い..を、感じていた—

｜アクセス方法｜路線｜下車駅/出口｜バス停｜所要時間｜

＊駐車場の料金は最初の1時間/480円。

以降30分毎に190円追加。

携帯電話の向こうから

レストラン/ショップ/エレベーター乗り場…

コードや電波やノイズが入り乱れていても

「いくら言われたところで

私はここを出て行けはしない。」

(私-カメラ・アイ…立体映像という三次元的に再現する映像、

心に浮かぶイメージ映像の単位を、記号化し、

符号としての場面を結合させ、音声を入れようとする、)

エンパイアスタイル-シャンデリア！

…ああ、その件でしたら、どうか前向きに善処させて下さいー

…ふむ。なるほど。コンビニは政治的な世界に暮らしている…か。

(このアナウンスは、) — 《自分で断ち切らねばならないひと続き、》

非生活型の版画コース…フルコースでない、

静電表示装置-画面処理技法を尋問的に磁気テープに送りこむ…

人類という真綿の感触-酷く暑い真夏の太陽の向こうに、

生きている誰もが選ぶことのできなかった別れ道を再生させるための説明。

ショッピング・センターの建物に沿った歩道で、

適当に広告でも眺めていた僕は、哺乳類——象…

でもゴリラやチンパンジーじゃなく、

(ブルドッグやシェパードなの——さ…)

» 保健所 ○×保健所 » 消防署 △□消防署

» 警察署 ○×消防署 » 救急病院・△□大付属病院

自転車をおりて、地下鉄降りて改札抜けて階段上って、

…省略して、売春、麻薬取引、暗殺、テロ行為…

「身分証明書を提示して下さい」

そんなことにもめげずに押し押しあがって往ったが、

その中から這いでて来た…重苦しい蒸暑さ（に、）

僕でさえ暗くなるし、なんだかシマウマ二元論だし、

王様の耳はロバの耳だし、触らぬ神にたたりなしだし、

——人っ子一人通らない

道路工事.道路工事.道路工事.

…………これが田舎だったら、大きな出来事なんだ、

…（で、）いまはひどく淋しかった。

（道路工事.道路工事.道路工事.）

十数年前、切手ほどの小さな写真を財布の中に入れていた…
違う…それは花片だったのではないか、あるいは、文字——
でも思い出せない、ただタイヤの痕だけがごちなく蚯蚓腫れしている…

そこにいるのは、ゴルフ焼けした恰幅のよい信楽焼。

——たとえば、この情報は一五〇センチ程度のということであり、

体重は、八十～九十キロを、という意味で、多汗-脂汗、

ワイン好き、高級車好き、などという余計な知識にスポットライトを…

モディリアーニ…またはピカソ——

うっせえよ。馬鹿野郎…家より、酒だよ…

ホテル？ バッカじゃないの…何あなた、やりたいただけなの——

身体の神経がほどけて、糸になる、僕の羞らい…

まるで真夜中で路地で、泣きながら、壁を叩き続けているよう——

「でも最初は、おいしそうなメレンゲ、かたつむりの内部…

砂糖で作った人間の妄想の起源…だという気はしませんか…？」

適切な証拠への依存 ⇒ 明確な結論の存在

⇒ 証拠と結論を結ぶ適切な推論過程の存在

故に、機能的分割、運用モデル-組織的なモデル、

そして事業体…だ——

ここは埋立地ですか？…と尋ねた人がいる——
そうですよ、と返せば、オパール指輪が光る…
でも忘れないで、それは、まだ、墓の中に入らない…
重厚なオーク材でできた上質なアンティークワードローブ。

カメラ・アイはその時、シフォン生地で作るアレンジお菓子、

…と言った――自動翻訳機能が、シベリアの白鳥を知っていた、

その色彩が淡く不鮮明な湖…に、死に絶えた星らしい薔薇いろの隕石が、

降り注いでいた――ロシアの片田舎で、釣り糸をそっと川の水面に垂らすように、

ああそれでも観客は言う…そんなのはプロジェクターにはいらない、

不必要な情報だ ⇒ ゆっくりと遡ってみることは個人的情報だ

でもあなたが興味がないだけの情報だ ⇒ あなたの情報は厳しい顔の情報だ

なんだか、たえずせわしく盛り上がる場面の興奮なんだけど、レコードに傷がある、

「レコードは、セットするものだと思っていた。」

「持ち上げて。ずっと、…スッと指から滑らせて、まるでショウみたいに…」

あるいは、教会の窓ガラスという窓ガラスを、全部たたき割ってしまうよう…

内部に浸透することのない《疑問》…

そんな侮り謗りを繰り返しながら、何度も

イギリスの作家、レイモンド・ブリッグズが1982年に発表した

グラフィックノベル。アニメーション映画化もされた…

『風が吹くとき』（*When the Wind Blows*）

…時々、彼等は忘れているけれど、それもまた、

風が吹くとき――風が…吹くとき…

――話はそこで途切れてしまった…

（事業ラインの仕組みと、能力と、

組織における割り当てられた当事者。

割り当てられたシステムの中で…）

論理的修正は可能か？

…A氏とは、KAMOME氏のことか？
もしそうなら尋ねたい…靖国とは何なのか？…
国家とは何なのか？――

と 言う…この野蛮なリズムは、言葉を交わすのを、

避けてばかりいる――体温が尽きる時の 孤独…でも、気持ちの整理がつかない、

あつらえたような上天気の良い服を着て、でも、何も言えない…

たとえまわりに誰もいなくても、そこに僕一人しかいなくても――確かに…

後じさりしそうになる…欲しいものがどんどん手に入らなくなるような気がする…

滅多につけない香水は、かすかな声…それを捕まえた敏い耳は、

破滅そのものの永遠を――夢見た…

「泣いたり、嫉妬をしたりすると…どんなかすかな物音にも、

慄えるような反響が全身に伝わって、僕は知る…僕を残して、

僕を置き去りにして――闇…闇が子供のように僕をあやす…」

話の切れ目にふと顔をあげると、すべてが空中に漂うもののように見え――
井戸の中に枯れ葉が落ち始める…それは飾りとなり、浮き彫りとなった…

泥の上にバラックが建っているように、そこには卑しい人、

・・・そいつらが、どこまでもどこまで押し広げていく、小さな穴を・・・

・・・チャンスを、ことごとく、フイにしたくせに・・・

A氏は長い沈黙を破って答えた…

(それは手紙…頻ずりしながら、その封筒に鼻を寄せると、
モルトウィスキーの薫りがした…)

吸血鬼がついに見つかったと思われるヨーロッパの小さな町に来た二人、

ロマン・ポランスキ監督、ジェラルド・ブラッシュ脚本の、

一九六七年に公開された映画である『吸血鬼』のように、

私は思う――ワークフロー及び無政府主義的なシステムに対する真剣な考察…

Aは溶けて行った、Bという黒いマントのポケットに…

でもBはシュルル ルル シュルル…

ルール-組織のサイクル、周期、及びタイミング

(相互の仲介…接続図、商取引、データ交換。)

最適化が生産性であるという考えの中では、料理の数は限定され、
発想は貧困になる…揺れないから――揺れないから…
前方を睨んでいる言葉なら、火の粉のように、
さまざまな時代が見えたはず…

ヒッチコックの「鳥」という映画のラストシーンを見たことはないが、

二車線道路でおそらくトラックに、あるいは車に轢かれ、

さらに何度もぐちゃぐちゃにされた鳥のラストシーンなら見たことがある、

会社やテナントもころころ変わるビルを見ているような…
抽象化したインタフェースやライブラリを備えたプログラミング言語――

忘却された井戸と、溺死者の海…そして知恵から逃れることのできない砂漠…

互いに傷つけ合いそんなことを叫んで――手あたり次第にあたりの物品を投げ散らかし、

自尊心でも傷つけられた如く鷹揚に駄目な転倒を繰返す…

たくさんの人達が泣いている-笑っている…

また繰返している-誰も救われずにいることを認めている…

（そして、気がつくと、みんな自分を縛っているものは何かと思う。

うまくいってれば、都合のいいことだけを。時に、冷静な判断を失いながら、

うぬぼれて…今日もぐらついて、誇大妄想で声もなく死の意識を探りだす男女たち…

セクスが必要だと彼等は言う…でも必要なのは多分、愛なんだと思う…よ――）

「…こんなに雪が降っている」

と 僕はマリンスノウでも見るように――深海の中において、医者にも治療できない、

寒々としたものを、たえずさざめく流れへと押しやって凍らせ、

雪のようにふんわりとした紫いろ…恵みの目を向ける、堇のいろを見る。

（油蟬が落ちている…しゃがみこんでいる男が棄てられている…

ダッシュボードの上にパンティーがあるような…ダーウィンの欲望の進化論…

プリンスを知り…ボブディランを知り、僕はハイスピードな幻の中…蜃気楼の中…）

適者生存-それはまるで建築現場の足場のような危うい生を選択しながら、

心細さに蓋をする、愛の陰気さ…愛の財宝の難しさ――

「あなたが自分の中に閉じこもったら、あなたの本当の声が聞こえない」

「嘘つき。あなたは、あたしが一言も本当のことを話してないと知ってるくせに。」

月の爪にやられて…僕まで――蟹になる…

そうさ、こいつらに思慮深いところなんて、ひとつまみもありゃしない…

こいつにどんないい所があるかといえば、人をどんどん駄目にしていく素晴らしさ！

電気笠のように見える街燈と…青銅の若葉と――蛾…
ヒヤシンスの球根のように思える液化天然ガスを入れるタンク…

「タイヤの空気圧が下がりにくいように窒素を入れる、

またタイヤやホイール類の劣化を遅らせる――」

（動く機械のころよさ！ 突きすすむ車輪、翔ける翼！）

女性のやわらかさを強調する、ふわっとしたグレーのフリル系の服、

胸の谷間の所に下着らしきものが見えるので、セクシーさをアピールしている。

――でも壊れる…揺るがぬ塔などない――

(水の精はかく語りき…)

でも、ウンディーネ…あるいは、僕の愛した人魚よ――
僕は見失ってないよ…夏の日が…夏の夜が過ぎ去ってしまったけど、
まだ揺れてるけど…おそらく最後の詩人になるとは思ってるけど…

たいていの時、人の肩なんて掴んだりしない-本当だ、

たいていの時、キスしたって唇の感触なんかぜんぜん覚えてない…

君へと贈る、花飾りがゆつとりとほぐれてゆく僕の詩（のように、）――

壁にもたれて、僕の翼までくっついたような背中だし、磔刑だけど、

欺いたりはしない、だから心の中で燃える炎を過去の隠された思い出にしない、

（忘れられぬ不思議な形だ）…（でも、忘れられた海だ――）

いまでも君を想ってる…動けないけど、もう石像のようだけど…

でもきっとコオロギの鳴き声にだって、ロングコート的一面がある、

たとえば牧師の説教のように、焦点が合わない、両足が地につかないようなことが、

だから――ちよくちよく顔を出している何かを見ているだけなんだと思う

ダンスレッスンをしているようなものなんだ、でも、たいていの時は、

色んな物が大きくたわんでいて、さまざまな嘆きや苦しみに慰めがない…

「いつだってとても…大きな意味を持ってる…」

かちかちと試験管入れのなかの試験管を指で押すように、
心の中に満ち足りた色を入れていくような気分…

[ガス欠で、すぐにエンストを起こしそうな人びとだけど…できないことはないさ、

できないって誰が決めたの、誰が言ったの――誰もハンマーを握ってない、

釘の頭が見えなくなるまで、打ち込んでない…]

でも、僕は弱い、僕は弱い――本当の僕は…こんなに僕は弱い…

二階建てのアパートの窓の上と下とでげらげら

（と、）笑い合っ て た…

数年前までは…こんな瞬間を指折り数えて楽しみにしていたものだ――

………陽よけの天蓋のような屋根が四角に

…鰓のように、張り出して。

BE WITH YOU

(何度も見てほしい、何度も聴いてほしい…)

風の強い日に頭の上に枝が載るような、

細かい埃じゃなく——で…もっと分かり易い何かがあった、

片手でしきりにうなじを撫でた

——エアシャワー

足を動かせば、それがまるで地団駄を踏むように、ひとり芝居。冷たく僕の身体のある部

分を這ってくる…最低と最上——雷雲と暴風雨…妙に取すました反省の力に束縛され、僕

の罵詈雑言は、歯の間に…血の味として流れ込む——

巻き髪-ヘアピンでとめて後ろに軽く流す-ストレート。

髪型を変えることで、印象を変える…たとえば、君が笑うと、

、、、

笑うと、中国の片田舎の少女のような印象。

[傷の中を探ると大きなガラス片が入っている-刺さっている、

コンクリートのかげらが隠れている…噂話がある——陰口がある…

誰もがそれぞれ異なる意見を持っている…]

——希望は、そっと覗いて*Knock* する。

神経の過敏さを傷つけないため、人びとは沢山のことを忘れる、

でも、希望の種子は…なく——ならない…

Poem

子供よ、俺は無事にお前が生まれてくると心で祈りながら、

ぼんやり空を見上げていた——不器用に…前後に反回転しようとする、

ペダルを踏みしめながら…この視界——昼の自転車の視界…

きっと——『忘れている…のは…僕…』 だと思う、ああ、 そうだって、

揺れる——内面的な自慰とでも言えそうな、『拒絶…』や『別離…』を知り、

舞えば…舞えば——花片…が…この風の吹く夕方に舞えば…

クリスマス・キャロルや、ロミオとジュリエットのことを忘れる

糸に鉋をあてるように、いまにもプツツリと切れることは御存じ…

そうだ、わかってくれる人はいつも心臓から血を流している人達——

(穴があく) … (赤らんだ光が見え始める)

…………この、いやはての、うすぐらい緑の濃い森の夢

「太陽を追いかけるように僕は――ワインを飲んだ…」

灰いろの夢…極彩色の夢――あからさまに咽喉に引っかかる、

峠を越えるように…そうだ、色褪せた扉を越えて、イメージを越えて、

、、、、、、、、

あの谷へ着くのは…星が流れるのは、ことに一際輝いてる星が流れるのは、

野蛮な唇が焦土を貪り…いつしか身体中を砂で満たすのは、

何べん同じことを繰り返しても、稲穂にはならない、しきたり-因習…笑い、

まるでひとつの筋肉も動かない、甲高い叫びの、病の、ありがたい笑い――

見ろ、風になぶられ、栄養がなくてささくれ、すりきれ…窮屈な窮地、

友の手を離し、恋人の手を離し…そしてもう僕には何も無い、元々何にも無い、

少しも早く何事かを仕上げようと考えている限り、本当の情熱は見えてこない、

「…必要なものなんて一つもない、文化も情報もいらない」

（口に出しても黙っているのと同じ扱い-あるいは変な奴と後ろ指をさす、

…まるで他所者-まるで土砂降りの中で肺炎になる男…）

「でもどうか…君だけは手を伸ばしてくれ、何があっても――僕から、

離れないでくれ…そして、辛いだろうけど、恥ずかしいだろうけど、

僕のものになると言ってくれ…あなた以外、愛せないと言ってくれ、

お願いだ…苦しみもがきながら、時間に追われ――仕事に追われ…

人びとの嘘に染まりそうな僕は…愛を語りながら反吐を吐く僕には、

良心や、誠実さが要だ…

僕以外の誰も見ていないと言うほど、強く、愛してくれる君が必要だ…」

――人間の悪行の運命-度重なる罪…

――蝸牛は木の葉のゆらぎをその觸角の中に閉じ込め（る、）

ねえ、知性の限りを尽くしても-儀式を厳粛に行う僧侶でいても、

罅欠は生まれるし-亀裂は深まるし、足を踏み外すほかない氷の世界の薄氷のようだから、

そして僕は凍えたまま、ここ何年も生き続けているから――

僕は思いつめたような瞳をして…蒸し暑くてよだれ、眠たげな模様を見せる
魅惑の花の匂いを嗅ぎながら、生は過ぎ去る時の影のように、
「いまでも生きて…」と言い――「いまでも、ほほ笑みを…」と――

「では、安らかにやすみなさい…グウウッ…ナイイ……」

（暫くの間…僕はじっとしていた――部屋の隅で、じっとしていた、
蹲った肉食獣のように――心の中で爪を…研いでいた…）

眠らない――眠れない――僕はまだ眠らない…

「文化の保存や、永遠の進歩なんて人は、口先…

ブラインドの隙間から、色んなものがお払い箱――希望は金色の砂のように、
僕の指からこぼれては…誰かが言うように、人を信じられない時代だ、
希望の持てない時代だ、とジメジメした陰鬱の涙-やがて蛇…」

（でも何も起こらないんだ…強い風が吹いても、人の目には、敗北者-征服者…
誇りを傷つけられて、睨んでいる少年に――死にたいかい？…と聞くような、
間抜けな連中――骨の髄まで腐りきってる、卑怯者たちの平和…）

横顔で見る、細い眼は非常にセクシー。

学校でいうところの、後輩たちにジュースを買ってあげたり、相談によくのったり、
誰かが旅行をする時、ひとりでさみしいなあ、と思った時、あ、彼女どうだろう、
と、いつも誘われるタイプ。

――虹彩に封印する、まつ毛の奥は困難な境界、
彼女を知る…知ると――人に優しくなれます…

…君はこんな僕に優しくしてくれるなんて、すごくよい人だね！と…自然と言うと…

――彼女は照れる…ジンとイタリアンベルモットのカクテルみたいに、

そして僕は暗闇の中で、鍵を廻そうとしてる…胡弓のやうに……鳴っている、

そして…そして――しきりに遠くへと、手をさしのべる…

無限に深い力に、心はだんだん広がって行って、

まだ見たことも聞いたこともない苦しみや涙のために、

キスしたい――抱き締め…たい…と思えてくる……

「ねえ、あの強い風に砂は巻き上げられ…僕は俯いているよ――

でも瞳の中には水がある…僕の火を吹き消すような――愛の偽りと、その正しさの中で、

僕はこの人生を生きてる…愛の光を灯そうと、色んなことを考えながら…

君を見てる――君だけを見てる…」

誰かがとても輝いて見えるのは、その瞬間、自分が才能に嫉妬しているからだ。

誰だって同じなのに、目標や夢に挫折したり、仮にうまくいってもうだつが上がらないのに

思い通りにならない、君はいつだって、自分の卑しさを抱きしめる。

時代とか年代とか、場合によっては愛とかで塗り重ねて世界を真っ黒にする。

でもきれいごとを言えてことじゃない、自分を美化修飾した発言の数々、

——本当のあなたが見つからない…

＊

風が生まれる

気まぐれな風が生まれる

風は吹き止まない

決して吹き止まない

＊

押入れの埃の底から出て来た

、マスク…「あれっ！ これ、昔、俺がつけてた仮面だ」

、マスクー（そういや、近頃の傾向…）

目を瞑ると…だれかの鼓動、クラシックコンサート

…しかめっ面で暑い、オペラ…机の隅や、天井の端、

いつかそのダンボールの影から。ジャズやロックやR & B…

元気のいい声で「そうら降つて来た」と言ってた——笑ってた…

プロペラーの回転を落した空中滑走…

色が乱れた、ジャンヌ・ダルク、マリー・アントワネット、ナポレオン

ベンチの前にクリーンレインコートが座り、

「黄な衣服を着た者の話す声…」

（いつか彼のことを、イエローモンキーと言い、

違う黄色人種だと言い——免れ難い苦悩、鸚鵡のように繰り返し、

雀のように朝現れ…カナリアやナイチンゲール気取った…)

いま目の前をクリーンウィンドブレーカーが歩く

クリーンショートパンツ（に、）

クリーンワンピース（も、）

太宰治になりきって新しい名作を作ってしまうグッドバイ

「こ、こ、こ…」

「コケコー！」

…女驚く、吃っていて一心に言おうとしていたものだから余計に驚く。

「すみません」

…それで泣く。また泣く。しかし決まりが悪い。ぼく、恐縮。顰め面で恐縮。

「いや、こちらこそ、ごめんね」

…けったいな話から始まるけれど、

「君さ、どうでもいいけどさ…」

ああ、このシトさ、いつまでも「すみません」って言うのね。スミマセン・オンナ。スピーディーな早口スミマセン・オンナは調子こいてるけど、コイツの場合、このシトは…

「コーラ飲みたいんだよね？」

「（ばあっと明るく）…はい」

「だよね、——コーラ飲みたかったんだ、実は」

…ジドーハンバイキ、財布とりいだして、かしゃかしゃ、親指スロット台のようなうごき

「ねえ、…」

…ヤバイ、そこには犬がいた。尻っ尾が見えた。服従を誓う、ジュージュンナメスイヌが見えた。

「はい、熱いから気を付けて」

「（きょとんとした顔）・・・」

「グッドバイ！」

・・・袖つかまれた。服破けた。三文文士らしい安衣装だった。こましのオサムちゃんと言えば俺のことよ。服破けたので女の耳を噛む。噛むといえば噛む。女、平手打ちする。俺、転げる。「あ・・」という顔する。

「どうしてくれるんだ！この服高かったのに！」

「（心底申し訳なさそうに）すみません」

「おーお、言ってくれるじゃないか、うちの妹に」

・・・そこに現れるは、怪力乱神ヘラクレス。柔道部プロレス部格闘技派の栄光の筋肉隆々。しかしイガイとガタイのわりに恐妻家だったりする趣味ボディビル・筋トレ消防士の兄。

「グッドバイ！」

「おう待たんかいすけこまし野郎」

「・・・あ、あんなところにＵＦＯが！」

「ふざけとんのか」

・・・男はこういう時、土下座する。プライドなし。ごめんなさい、すみません、こんな男ですが文学を志しております。天才です。殴られると仕事に支障をきたします。謝って許していただけるなら、御覧の通り、地面にこすりつけだっけます。むしろもう踏んでください。踏みつけて下さい。喜びです。頭をふんづけることで済むなら、これにまさる喜びはありますまい。ありません！ありません！

「（心底ケイベツしきった声で）何ちゅう、糞野郎だ」

「・・・お兄ちゃん、やめて！」

「（そうだ、やめろやめろやめろ、俺の心の声）・・・」

「どうしてお前はこんな糞野郎が好きなんだ！」

「（女の機微に俺は無敵なのさ、心の中の声）・・・」

「・・・だって、いい人なんだもの」

「いい人って、おまえ、そんな奴世界中何処にでもいるだろう」

「（俺のように超二枚目で、超天才はいないがな、心の中の声）・・・」

・・・それにしても何故単細胞の筋肉ゴリラというのは話し合いができないのだろう。何と言う、愚かな労力の無駄遣いをするのだろう。暴力で話が済む、と想っている。これでも法治国家何だろうか。こういう奴に守られる国というのもこわいものだ。警察と一緒に。前に俺が危険思想を持っているとかで、捕まえようとしやがった。むしろ、塚元寛一を捕まえろ。あんな危ないバタフライナイフみたいなやつ、牢獄にぶちこんでしまえばいい。この前、顔見た瞬間、塚元寛一にぼこられたぜ。痛かったなあ。パンチ力あるなあ。何やってたんだろう、アイツ。強いなあ。詩人ってあんな奴じゃないだろう、ふつう。中也なんか、いかにも女の子じゃないか

「反省したんだな、糞野郎」

「しました！」

「この野郎！・・・なんでそんな調子がいいんだ」

「すみません、すみません」

・・・とでも言っていたら満足なんだろう。筋肉ゴリラめ。俺はいずれノーベル賞を獲るんだ。詩だって書いて、ピューリッツァ賞も獲るんだ。芥川賞に直木賞、ありとあらゆる賞を獲って、暇つぶしや羽目はずし、息抜きに女遊びして何が悪いこの馬鹿野郎。塚元寛一みたいな奴が危険思想なんだ。俺見た瞬間、ぼこったぜ、マジデ！

「まあいい、妹泣かせてみろ、次は仕事できない身体にしてやる」

「（顔のあたりに、ゴリラのでっかい拳がある）・・・」

「スミマセン・・・そ、そ、粗暴な兄で」

「いやいや、文学というのは蛞蝓みたいなもの、挫けやしません」

・・・「塚元寛一、俺は本当にそう思ってるんだぜ。お前が尊敬してる三島由紀生は、割腹自殺したじゃないか。羽目はずさないから、ああなる。いいこと沢山したって、きれいごと

だけじゃ救われぬ。いつかお前にだってわかるさ。」――やがてそこに、塚元寛一が現れる。「あ、てめえ」

—

彼岸じみた闇の塩をすりこまれ

とお

半眼の杳い瞳のおくに覆された墓を憶うが

稲妻が 無明の空を 追憶の鐘のようにさまよう

鳴りを沈めた大砲は、そらまだ見えるようだ

それにまだ蜘蛛の巣の張られた人気のない部屋にも

こめかみ

戦士の顚顚がある・・・まだ崩れぬ、熱い血が心臓をゆさぶり

でも一滴の涙も零さずにいるのは？ 虚無か？ 喪失感

か・・・？

熱い煙と物音が・・、弱い陽光の影のように、

死神が！ 朦朧とした催眠――火の鎖・・煉獄――。

陽のきららをつかみたかったのに

この鋭い光に左半身がだらりと下がって動けない

つづらおり

九十九折の道――〔夢の中で過ぎ去った怨念の紐〕

そして戦士は杖を携ち！ 梗塞を発症させる、逝く者の

痩せ細ったうしろ姿

花冷えの風――窓硝子の向こうには 花びらだ

そのらんまんな死体、始原へとむかう西陽…。

二

枝！ それは地への愛をあらわす！ 枝 つつましく 枝。

セイリア ちょっと

蛇型の尾に 狼星…寸時の間に肌に雅やかな祈りをふくらませる。

プラチナ盤の燻し、ざらざらした業の隠し味。

カリュプティス

火の砂ぼこり——あるいは水の鱗の混迷の淵。

すみ

いやこれは移り変わり迅やかな 薄翅蜉蝣。

齢をかさねるごとに、深い雪に埋もれ…ひじょうに希少な赤い彩雲

一枚ずつ雫る薔薇にもまがう！ 扉一壁板…数珠のように

大壁画がまといつく、——まるで弱い世界の墓碑のように。

夜つゆは凌げて、内奥の思い出までは消せはしまい！

風は風景の向こうにあった、シベリヤのような壮麗な凝結、

ため息が、百の眼、千の花…万の手、億の花——

ピンク

ときおり通行人が分厚い赤い花びら、石竹の霧

ああ、銀の鰭、その靄めく乳ぶさを強く絞ることがあった

泥水の逆流のような媚態…。

ゆうゆうと浮遊する、子供たちの夢、青年の夢、老人の夢——

まなじり

みな 乾いた死者の眈、あの水晶細工の極微の傷を見知った

そしておさえようもなく…あふれた——恋

——この古生層、…藻類、シダ類のようなまぶしさよ…。

——芯までとろけたい！——その時、雲が大きく揺れて

飛びつづけた…純粋な無垢の形。

三

十日間、群舞している形

舞い、どこか遠いかすかな脈のよう^{なみ}な！——

際限なく吹きつゝの風は瞼毛をふるわせる

くらげ^{た こ}
水母——それとも章魚？

変幻する海底…！^{レエテエ} 忘却

徐々にめくれあがる舞台はつれづれ

かく^{かく}
咽喉の奥に匿した——まるで葉のように

dried flower 夢の花のように

最後まで薫りが消えないように…

明るい波間に映えている！——

とうめいな玻璃

それが黄なるもの眞っ赤に熟すもの

くらくらする白の導火線

エルフ

いま、妖精がぶあつい象皮のふたりに・・・！

手まねきする、——おいでなさいよお馬鹿さん！

次の瞬間、細胞に光の矢が射抜かれている

頭上を輪舞する輝部・・うちゅうの瀑布

稲妻と速さをきそう。——飛翔。・・

ゆえに微風は溶けるように甘い。・・

無邪気な夢遊——やさしい闇

ベンチの上で、ふくよかな光の澱みが生まれ

砂と霧さえ遠慮した・・・、虫さえ匍匐した

獣さえ降伏した！ ——忽然とあらわれるパノラマ

それがどうしても此の世のものとは思われず

眩暈のような、・・翼々たる小心に翻弄されるような

らいらい

誰か触れでもしたら跣音の癩々たるひびき

馬にイーーンホホー。

しろい微塵の粉・・。

分裂してゆくナルシス——或いは、虹のイマージュ

光彩陸離——〔くすぐったかった、〕

咽喉などもうシンバルの細く鋭い音のような

扁平なもの、けれど触れるのをためらうもの、

月や星の光が美しいと言うことに・・

ただためらうこと——夕暮れの風になびき

玲瓏の——欄干たる星斗まで

木の海。波の音・・波そしてまた、花

僕は 水面をかすめて泳ぎまわる

——ガーガー？——それでいい、白っぽくしなだれよう

君は笑った——湖のボートが、たぷたぷ・・。

四

ここは桃源郷！——死ぬほど高い壁の向こう側にあり

窓に一斉に羽搏きの音・・・！

重力のない雑踏の静寂・・脳内に埋もれる化学記号

井戸のなかからの声のように青黒い軟泥をあたえて・・。

リゅうりょう

とある細い投げ槍——嚙喰と風なるヒステリイ

累々たる重傷者、か弱い声の波紋…迷い人の大海原。

翻弄される——小じわ。ハウレイセン…語る時はすなわち

ぼうだ

朽ちてあらなむ——見てもかすか、朦朧、雨滂沱として

ここは桃源郷！——身をけずられても、白帆を浮かべるごとし

酔歩蹣跚！ 地平線にのしあがってくる、

幻の都…さればバベルの塔…おおされば地上最古の楽園！

遠く天を衝いている、…馥郁と香料でも撒き散らしながら

ふかみ

まだ陽気な歌声！ ああ、はかりしれない時の深淵

砂地獄！ ものごとだけが迅く進む——進め！ 追いたてられる

世間の気まり悪さ、居心地の悪さ——渦をまく、口から泡がでる

——とぎれとぎれに水の音がきこえてくる

たえずわきでているもの！ すなわち心のなかにひそむ神韻よ

…大笑のおくに熱涙。おまえの、——おまえの心像

ひかりはくだる 虫などが蠢くように

まるで虫けら…ここは桃源郷——！

琴の音などが珊瑚する…ああ！ 茫然自失のスフィンクス

プロメテウス

ああ、——先見の明を持つ者…教えてくれ

どうして神殿の円柱が見えないのだ、花崗岩—玻璃—金剛石

美しい言葉なら網羅している、

いかにも神を喜ばしそうな台詞！ 欣々として素っ頓狂な大明神

それなのに厳々として物に動ぜぬ器をもてぬのはどうしてだ

やさしいものに、やさしいと言えぬのは…。

ここは桃源郷！——侃々たる正義の唱道まことに恐れ入った

されど旅人よ…黄金色の砂を浴びよ！

怒号を喰らえ！ ——あたかも拍手喝采のごとき罵詈雑言の数々

こちらこそ恐れ入った！ 巍々蕩々ちがった

——巍々堂々たる声の主よ、変貌よ…！

ここはまさしく風に燃えたつ桃源郷——！

しかし何故壁があるのだ、…広がりを超えてなお己を高めるため

太陽は沈む——星は昇る、しかし何故壁は峰と大道を思わす…
たいどう

何故言葉は、直言を嫌うようになる、——紆余曲折する、そして意識は

何故ひねこびる、…王よ！ ばらばらになった言葉こそが記憶——

かなとこ
地上に命を与えられた鉄床と槌の宿命…

蜂にあって蝶にあるもの——底なしの憎しみ、あこがれよ！

太陽と月。まことの王ならば、王の声を聞くがいい…！

――それ、熱風の怒号！　それ、たけり狂った稲妻、火の車！

不在、苦しみ、死。絶望、不安、悲しさ。

――たえまなく波に押し返される日々よ…。

五

ぼくは大空にとぶ一片の雲でもあったかしら？

風船――メタンそれ自身であったかしら

どんな笛の音なの…そのひそめられた炎のささやき

白い咽喉…まるで跛をひくような喋り方
びっこ

虐待というくさび！

ねえそれはいつ、混沌をあらわすようになったの

大蛇のように――不規則な羽ばたきのように

愛の蒸留器、まるで…！

かつてない腹に空いた洩れる笑い

どうしたら、雲の横腹へ行けるの…！

宝石をちりばめた階段でもあるの

答えは *NO*！　もう蝶になるべきなの

それとも蜂のまま不穏な物音で警戒をつづけるべきなの

ねえ・・・！ 猿が――泣いてる

梯子でも掛けてやろうか、見殺しにしようか

雨水のつやでもかけようか！ オヤ

根をはるためにおなじみの冷たい風

ヘイ！ まいどおなじみ、・・・ちり紙交換

おおつなみ

砂漠！ それは燃える砂 大海嘯

アアン！ 神様

どうして皆に言ってやらないのです基督を殺したのは

わたしです、と！ ・・・おまえ、何故名乗りでねえ

おう、このすつとこどっこい、すべては――神の所有物

好きなように生殺与奪・・・ちがう？ ちがうでしょ

ああ、お腹いっぱい綿菓子

ぐるぐるとめがまわるほどグルグルとお腹が鳴るほど

ぼくは飢えている よ・・・？

――その砂漠にいるのが斑なす蛇だったらいい

ときおり不敬な物音で〔E C S T A S Y〕と叫んでたらいい

災いが、あなたと結び付けられなくなるほど、未熟な動物なら・・・

細く――かすかに――もう聞こえない――子供の時の予言・・。

愛が衰え、偽ることを語るなら「手を切らないで・・・！」

月光を浴びておおっている陰鬱な無人の土地、

影法師。・・・悪魔、跳梁跋扈したおのぞみの地獄都市

キャセロール

それにまた見えるようだ、蒸焼き鍋。ダンテの八つ当たり聖書

さあ墮胎しろ！ ペニスはソーセージではありませんよ

なまこ

ヴァギナはもちろん海鼠ではありませんよ！

でも難解なマラルメ、純粋な移行、のたうちまわるわれわれ

崩れてゆく、理性・・笑えない、不幸・・鎖された獣――人生・・。

「晩御飯ですよ！」とお母さんは言う――ママ！ 旧石器時代の未開人させてください

きざれ

ヤンキーくらい・・・！ どうせストーヴにもってこいの木片じゃないっすか

ピアスして金髪して、喧嘩して、カツアゲしていいじゃないっすか

この国のやってることと、どこが違うんすか・・・？ バッファロー機関車、

ベールース！ ――何世紀経っても、・・・何も変わらない

人間のむなしさ――「冒険を求め＝殺戮を好む」は正しい・・。

おきて

みたて

闇が律法――不能する外観――死を知って自殺する・・・その階段は、

空中分解手術。一空中楼閣を内閣にするという空無、天皇も！ 大統領も無意味

ウィンチェスターライフル、ウィンチェスターライフル…

蔭口は人間の屑！ なのに、する——ぼくらは、まるで蛆虫、毛虫、蛔蟲

^{やわ}
憂慮なんて柔、いますぐ全員射殺すべき…！ でなけりゃ、全員更生させるべき

ウィンチェスターロケット、ウィンチェスターロケット…

そのむかし…くずれたのだ…詩人の不幸は——神の不在とブランショは謳う…。

ニーチェ、サルトル！ …オレは知らない、オマエの顔を知らないから——。

^{いき} ^{いき}
くるしみやつらさが、ことばのなかで呼吸する…いや、呼吸するだけ

そこに壁の割れ目があって、しゅこしゅこ、いってる——。

とどめをさそう、と何故たった一言のうつくしい言葉を呟かなかった

オレは不服だ！ それで死や孤独がある、窮乏もする——全部！全部！ぜんぶ、嘘だ

でも壁がある〔蟹の甲羅みたいに、たくさんの、あんが、詰まってる〕

愛は、滅んだか…美は、滅ばされたか…神は？ そして…語り手は——

狂気のさたがつぎつぎに蔓を生んだ——木綿より毛皮がいいとぶっこいたブランド

にも理由があるのかしら？ …ある の ？

空は？ ねえ、海は？ そして宇宙の星にすら値札をつけるの？

夜は？ 昼は？ まるで、それ…！ オオハゲタカの群れ、サソリの群れ

なのにまだ、羊の毛がちらつく、この群れ、ヒト科の群れ

——草むらに見えるだろう、醜女を思うだろう

こちらにも波 あちらにも波。

——ニヒリズムがオレにある、オレの本質がある…。

七

するとだ、実らぬ夏のように暗い梅雨の雲間がやってきて

わたし、抗鬱剤をのむ。——

ねむれない日がつづく、やけに捨て鉢になる

「神は完全無欠なんて仰りますけどね…」とすこしぼやき節で

でも、冗談じゃないよ！ マッタク、マクドナルドさ

欠点ありすぎ。そもそも、欲望がワンセットなんて、

ああ肉体の重み——本音を話した…。

わたしは知らなかった、伏し目がちになる、木枯らしのことなど…

雪でバイクが滑って、——大丈夫ですか、と半笑いで声をかけられたこと…。

ひたいのあたりに靄がかかっている…ススキみたいに軽くない、

猫じゃらしみたいにはなれない——肺炎で死にかかったこともある

自ら命を絶った詩人、戦争で亡くなった詩人の名前なんか、

十本指じゃ足りない――ぜんぶ、ほんとうさ、・・・ホントさ

足の引っ張り合い、醜い小競り合い――。

社会か？ 時代か？ おいおまえ、・・・責任とれよ、

高みから見下ろすなよ、政治家よりタチが悪ィよ、てめえと喧嘩してえ

わたしは、こんなに大声で叫んでる・・・！

月の光によって、浮かび上がったわたしの影は段々と塔のように見えてくる

バナナそびえる夜更けかな、などと自由律俳句・・・ううん、ちがうなあ――

何か生暖かいものを刷り込まされそうだった、しんとした部屋で・・・。

わたしは感謝などしたくない、生まれさせてくれてありがとう、と・・・。

階段ぶちぬいて、地獄の最下層まで落っこちちゃあいいのに！

花にきれいだといわない、嫌だ！ 絶対に嫌！ ・・・もみじ葉、血尿の色！

おまえがぶかっこんな人間にした、自由に生きれねえ身の周り

夢・・・！ それすらもお前が見させるから嫌だ

ダダッ子？ おお、わたしは、まったくもって、ナフタリン

でも、巨石、巨木、にはおもわず、恐れ入る、頭を下げる・・・撫でさせてください

おもわず、ポロリと水のようなものが、まなじりを濡らす

でも信じない・・・！ おまえは怠惰だ、そしてわたしたちを嘆かせた

そして人がゴミみたいに死んでゆくような惨状をおまえは輪廻と名前をつけやがった

白粥を匙で食べる奴にありがとうなんて言わせやがった

ここは悲しみのアーケード！ ろくなところじゃねえ、天の廂にわたしは歌う、

塔——よし、無心に見入ってやる。いつか、おまえにとどめをくれてやる！

大きな滝はおまえの小便、・・・だから鼻をつまむ、

雲！ あれはおまえの胃の残留物。ああくそう、おまえの顔ひとつ見えない

そもそもおまえ男なのか？ オカマなのか？ ナオンか・・・？

と も

おお、碧玉の無数の偶像！ ——星、あれはわたしの友、すばらしき同胞

そこに坂道だ・・・くらい、波木路だ、ああ嫌だ！ おまえの膝にのってる気がする、

やさしくおまえにあやされているような気持ちで、ひどく胸が悪い

なんでこんなに嫌っている奴をお前は生かす！ 偽善者め、何故罰をあたえない

わたしは生きている限りお前を許すということがない

空を見れば嫌な過去を思い出す——歩けなくなる前に、俯くような男だ

世界中を闇にした張本人の名はそこにある！ 星屑などに誤魔化されるな

岬に立て！ すくくと立て・・・それで、そいつがしでかした罪状をならべろ、

おまえの嫌な過去全部——そいつのせい！ 神さまっていう極悪人のせいだ

パチンコをする奴も！ ギャンブル狂いになる奴も！

わたしの嫌いな糞野郎を産む原因も！ ——あいつのせいだ

このギスギスして人情味のない都会も、優しさの欠片もなく、忙しいふりする

おまえを産んだのも——あいつのせいだ・・・！

また嫌な徒花がうまれるのもあいつが醜い快楽を産んだせい

何故おまえら！ 奇麗事を言っていやがる・・・神がいないなんかで誤魔化すな

そこで胃潰瘍になってる奴、不幸な面をしてる奴——ああ世界よ！

太陽は沈んでいく。そして、すべてが宝石のように眠ってしまうのに…

わたしはまだ、樹の影にいる——墓地にいる…。

これからまた起こされる犯罪、自殺——生きることへの拒絶すらも、

無関心の町や、つめたい時代のせいにしやがるあほんだらを残しやがった。

闇を切り裂くわたしの肩に、手を置く者などいない、

おお、…あほんだら！ 宴の最後の灯まで、夜ごと夜ごと、馬鹿騒ぎをする、

わたし、ヤクザになりたい。人をむしように斬りたい——。

街の片隅で泣いてる奴がいる…夢を見ろ、なんてわたしには言えない！

顔をあげろ、嘘こけ——餓えちまってる、そいつに、どんな言葉も響かない

昼の光さえも嫌い…！ やさしさなんて聞くだけでおぞましい

おお神、——やめてくれ、わたしにおまえが懶うく呟く優しい台詞

どうかこのままひと思いにやっちまってくれ

おお神よ…トラの皮のように延びている、

わたしはここにいるぞ！

何もしないー不在の相

新聞坊ー娑婆

深淵のようにおしひろげ

意図ー絃

硫黄の雨となって降りそそぎ

硬質のかがやき

死の宣告

ー異邦の人びとの芝居。

道具

思いこみー戯れ合う

〔ミスー。ダンス！〕

燃えるような黒雲が

末梢作用ーされど現前性

表面の存在を通して

黒雲の大きな口は

入れ歯ー虫歯

稲妻…ビリビリ！

するーしない

すこしも穢されることはない無垢

労働ー死

豪華な邸宅はくずれ落ちた。

勤勉

無責任ー無意味

体質。人は誰もがペテン師

ナニモナイーアアナニヒトツアリヤシナイ

もえろ！もえろ

隔絶ー錯誤

ぐらぐら揺れる

触れていないーでも触れている、

薄暗い通路ー社会人の入口

ミトコンドリア

まちがったモラトリアム

生活者のにおい

やさしさーとんでもない

すべての可能性

不名誉

固有名詞一いっばんめいし

とりたてて意味はない

リリシズム

意味のはたらき

その真逆一相反する性質

記号性

シュールレアリスト的不協和音

でもそれもまちがい

解放

燃えあがり 流れだす

通奏低音一共同歩調

意味作用一さまざまな語の批判

それでも余裕

さらに速く！ もっと速く！

べつに指し示したいものもない

自己欺瞞

ナルシズム一悪魔

つながり

係留されている一刺戟をうけている

場所一時間一タイミング

超越！ 超越！

飛躍一不評

融解状態

アナキー

ピークに達した

JUMP!

およそ意外な形で生成し

火は溶かす、ろうのように

みずみずしさ

緊張を欠くな

神一危険を知らない唯一の存在

理性は巨人を産むが

自由はまったくのところそれに値しない

想像力の解体的消滅

連想の禁止！

きょうど一ばいあぐら

よくわからない

強度一ばいあぐら

この瞬発力すらも墮落なのか

大知識人

注釈の存続

進んできた芸術の諸現象にまとわりつく

鬱陶しさ――自由？

革命

すれ違う

死んでいる

ひしめく人びとの沈黙

炎の波、特異な変形

xyz、とくにいみはない、

おもわせぶりになりたい

いっさいをむすぶのうりよく

いってみただけ

冷たい氷のかけらのように！

個性がなくなってゆく

踏み外してゆく

使い分けられない言泉をさがす

不条理な凶器一

真理にみちびくよくわからない手口

属性一他方の岸へとむかう詩

ひとはことばをもたぬおもちゃである

にじゅうのしーさんじゅうとび

やはりこれも意味はない

男も 女も

べつにしみはない

目をふさがれるような関係だった

証明書だった

文明一その極限的状况

不在すらもが規則をうむ

神はなにものをも餌食にしない

人は本性をあらわすまで切り刻む

終わりになき対話

九

＊ 容疑者は警官に向かってみだりに発砲してはいけない

年老いた囚人が、黄色い歯を見せながらニタニタと笑った。

＊ 心臓が悪い人は走るのはいいけど歩くのはいけない

心優しい医者が、白衣に指をいれながらクスクスと笑った。

＊ その珈琲はいいにおいがしないけど美味しいね

いつもの男が、いつもの女にクスリともせずに言った。

―――鳥が鳴いてるね？ ……花が揺れてる

十

ある日、ぼくはこんなことを考えたのだ

恋をする人は、無力な人、暇な人かも知れない、と！…。

白鳥がいたら一まっしろな嘘だったんだけど、

ちょうど、無駄を嫌っていたギスギスした時期だったから、

常に不在、常に無所属であろうとする人を考えてみたんだ、

なんだか、寺山修司みたいだね…。

でもさ、無為って規定するのはその人なわけだろ、

流れを中断するには、堰が必要なんだ。

神なら、手じなみたいにパッと消して鳩を出すけど…。

じゃあその暴かれた世界に、生きる意味、誰とも接触せずに、

物を書く意味——まあ原理的にはありえないわけなんだけど、

考えてみたんだよ 僕は彼を眺めた…

こうして 恋を知らない男が自らの営みのために他を圧倒した

疲労、苦しみ、——そうだね、不幸とかを殺した

神が 運動するみたいにね……その軌跡っていうのかな

いや、痛みってどんどん消えていってしまうものなんだね

さらに それを語るか語らないかの その瞬間があるだけで、

きっと 跡形もなく消えてしまえるものなんだね——

十一

いまでもなお 永遠に外からの流れはやってくる

しかし私は知っている、うねうねと曲がるもの、

針金をつごうよくまげたあのくねくねを…。

外からはいつも内によって開かれている

すなわち、それは中断するという結論を出す以外に

流れは止まらないって言う！

車が通過する度に、水玉模様のてんとう虫がぐしゃりと踏み潰されているのを見る。

ありきたりなやさしさで、情慾の実体を、御名の本質を、また愛情の箴言を知ろうとして

つるぎ

シムボル

はならない。光炎菩薩太陽よ！ この長劔こそ無益な殺戮の象徴であり、巨きな自然という

むこ

名の無辜の民、愛玩動物の咽喉を抉り、また皮膚に死の風を吹込むものである。

、、、、、、、、

ペンは剣よりも強し。

補助装置をつかわない潜水は、古来より真珠や海綿をとるためにおこなわれてきた。

プロフェッサー

はっきり

大学教授は言う。かくて、明瞭と眼をあいて歩いている頁人の真っ白なあしのひとよ、殆

とんど消えてゆく、斯ういう種類の堪え難くも呪わしくまた類いまれなひとよ、いま、いっ

しょに人類史に踏み込もう、と。

「補助装置をつかわない潜水は、前四世紀以来、ダイバーに空気をおくり、水中にとどま

る時間を長くするために、さまざまな器具がためされてきた」

ダイビング・ベル

見究めよ、ギリシャのアレクサンドロス王の潜水鐘を！

見究めよ、アリストテレスの水中呼気装置の言及を！

蛞蝓のようなマウスが走り回って検索しているような高揚感、炭酸カルシウムは蝸牛では

くらげ

なまこ

ないシェル。水母もいない地上の深海には海鼠もいない、シーラカンスも。

タイタニック

アトランティス

海に沈みし豪華客船を、そしてまた失われた大陸を、ノアの方舟を。それらすべてわたし

ともだち

のとおいとおい同朋。彼等はunicornを、またdragonを、そしてけして名付けられることのない

エーテル

かった、光素のしみだした進化と退化の二重螺旋の滅亡びの種族たちを知っていた！

脆弱な生き物はこのようにして殺される。Water pressure、液体ではどの方向にも均等に

力がつたわり、水圧は下向きだけではなく、どの方向にもはたらきかけ、触れ合った時に、パスカルはパステルになり、瞬間、イソギンチャクのように見える。おびたしい宝石よ、ちりばめられた化石よ、それらすべて氷塊と熱砂に、また雷鳴と風声に、そしてこの地上という庭園に。adamとeveのため、地球照ぷりずむはれるや屈折率おるがんなれるや屈折率！

アースシャイン

しかし実用的な装備が開発されるのは、十八世紀。英吉利の天文学者エドモンド・ハリーが最初の実用的な潜水鐘を開発した。大きな風呂桶をふせたような木製の装置、天井に光をとり入れる硝子窓、空気たるから革製の管で、たるに水がはいると潜水鐘の上部におくりこまれる空気。やがて科学者は水深最高一〇〇メートルの海底でも時間制限なしに調査が可能になった。水中居住室、もしくは水中基地。内部気圧と外部水圧を同じ値に設定する、飽和潜水。潜水病にかかることもなく、基地周辺の作業が可能。ダイバーの呼吸源はヘリウムなどの軽い不活性ガスと酸素の混合ガス。ダイバーの血液中のヘリウムが飽和状態になると、一定時間の減圧が必要。

そして一九八八年、アメリカ海洋大気局（NOAA）が、全長約一三メートルの実験用水中居住室をカリブ海にしずめた。定員六名、付属の海底基地で一日に九時間の作業が可能になったアクエリアスとよばれた基地。そしてずいぶんとしばらくぶりの、浮上。

わたしたちは何処へ向かうというのだろう、色とりどりのカラーの傘を差して。個性は風船にぼかされるとしりながら、なぜ胸の内を潤ませる風鈴をならすのだろう。

きのう おととい

昨日、一昨日と、雨が降った。海苔巻きのように、筐底ふかく秘するように……

水が跳ねる度に、ズボンの裾が濡れないようにするのさえ、風向きを気にするのさえ、わたしにはもうnostalgicな教会や、神父や、鐘を聴くのと同義である。夜通しふりそそぐあめ

たちは、悲しみを背負い込んでいる。鳴り止まない動悸、呼吸器、杞憂にはおわずに。

それは天鵲絨のやみ、数キロにもおよぶtunnelだ。骨張った口をあけた橙、うらめしそう
ひとみ
に明眸くりぬかれた断末魔の悲鳴。ひびきわたるエンジンの咆哮、オイルの芳香、油膜のゆ
め。ここはまるでプラモデルの街のように塗装されている。金属的な外観のまちで、不協和
音と協和音のharmony。だから腕時計も持たず、携帯電話も持たず、日記もわたしはつけない。
ボイス・レコーダーも動かさない。

おもいで
だからカメラで撮らない、追憶だけが、いまでも濡れつづけているから……
めのまえ
少年時代にあじわった落雷の音、避雷針もない、矢鱈と眼前で無意味なグラフが形成され
た。数キロの坂道を、わたしは泣きながら走った。瞳に水滴が入る、粒が見える、球形。
それは硫黄酸化物や窒素酸化物がまじっている、檸檬のような、死の雨。

そしていまわたしは、躓きそうな、引っ掛かりそうな舗石、革靴が教えてくれるバスの停
車位置、密閉容器のような時刻表をみている。呼吸のためのエア・タンクや、レギュレータ
フィン
ー。浮力を調節するためのウエイト・ベルト、推進力をえるための足鰭や、水中ではっきり
マスク
とものをみるための水中眼鏡。位置確認のための水深計や残圧計、保温と保護のためのウェ
ット・スーツ。非常時にそなえたスベア・タンク。

うた
しかし水圧でひしゃげてしまったような、あざやかな雨の詩はelegy。

水浸しにならないよう、水溜まりにはまらないよう、傘を差しながら歩いているわたしと
街路樹。クリーニング屋、カメラ・ショップ、めがね屋。ガラス・ケースに沈溺んでいる豆
腐屋。布団屋、見るものがすべて苦しいくらいのペット・ショップ。雑貨屋、金物屋、まる
でvirtual realityの魔法にかかってしまう。

ヘッド・マウンテッド・ディスプレイ。開け放した傘はコンパスの針。虧けた円周率は、
しょうか
旋回する飛行機、生け垣をめぐっている紫陽花。狭隘な十字路ではいつもNやYやXの断片
がぬくもりをもっている。だから猫の小便の臭いが拡散し、また収斂し、曰く言い難い単車
通勤の合羽すがたを目撃する。

わざわざ知り合いを避け、心の底から描きたいものを探すため、駅の階段の揺らめきに合
わせる。眠りっ放しの蒼の世界で、噴水を取り囲む植込み、鼻孔に飛込む蝶のようなひらめ
き、つち 地のかをり。ひたい 濡れた頬額はドラマのワン・シーン。虹の気配のする脳細胞の片隅の何処
かに、インプットしてある膨大なデータ、莫大な方法論はミイラ、数えきれないほどのキリ
ストを抱いたマリア像。このscreenに投影るのは、おぼろげながら、探し求めていた、無意
識なる際涯の飛躍。止まない雨の中を熱帯魚が泳いでいるのが見える。蒼の粒子、細胞、括
約筋。それはブラック・ボードに記された名前。せまってくる混凝土の壁も、とけあうこと
のない採光も、つぼみをひらいてみせた暗褐色の夜空のうつくしさも。現在は切なさいまを誤魔
化す為にある。ジャックナイフ、ヘッド・ファースト潜航。さしたる曲折もなく、小奇麗
に、目の行き届いた海に身をあずける。

「エンジェル……」

わら
ニコリと微笑ったような気がした。

しかしそこには誰もいない。

そしてそこには君がいない。

頭を押さえ付けられた男がいた

指の関節、汗、後頭部の髪の毛を引き抜く力……

それがその男には映像でも見るように感じられた

そしてそのてのひらは 岐路であり

ただひとつの暗示をつたえる光であった

そう そして男は闇の中でふっと息遣いを感じた

ハンマーを持った男は 力いっぱい ひと思いに

振りおろそうと鬼の形相をする

閉め切られたこの家では 黒塗りのマスク

銀行強盗が顔をおおうような その男の頂点部に

ハンマーを持った男は 片足を棺桶のなかに入れるように

ひっそりと その表情を悪魔めいたものにかえる

その男にとって この瞬間のみの生々しいデス・マスク

そのころの中を ヒッチコック映画が支配する

うかびあがる筋肉と血管と

しずみゆくメドゥーサの髪

カラバッジョの見せた劇的な照明法は

いったい何を伝えようとしているのであろう

たしかに 漆黒の闇のなかにうかぶランプは

あやしくもあでやかに 人のこころの通路を照らす

その内面をおどろくほど 浮き彫りにしてみせる

雷雨の電光によってうかぶ 町の奇怪のように

この血なまぐさい一瞬は パントマイムで表現される

スロー・モーションのうちに 物語のなかへ曳きこむ

そう 真っ暗闇の洞窟の中に見事な動物がいて

人間がとうとうここまで追い掛けてきた

ちがう それは石器時代の狩猟のワンシーンだ

その再現に彩色せよと野生の本能がめざめる！

さあ農夫に鞭をふるうように

墓の中のそいつを殺さんと企むように

ああ容赦なく そいつを殺せ！

まぶしい朝が来るまでに

チャンスはたったの一度だけ

濃密ないのちの原液

ああ、シャワー

強く降らないうちに…

逃げよう

手さぐりで辿って

道は段々に広くなる

地の底へ降りて行く不安

ダンテ・アリギエリの心境

――餌をあさっている鳥みたいに

探してる――

たとえばシャワー

玉が沈んで海になった

そうさ！ 玉は魂のこと…

僕は、まだ神霊のことを解き明かしてない

――狂的な神経が みすまるのたま

このたまも 古人特有の感覚――

偉いなる自由に向かう大道に

偏見と無智の風がゆく！ 鞭となる

、、 、、、、
たま ふれない

奇異なる草木を徒らに連想せしむるのみ で

――その風は ミシン機械或いはタイプライター

靈魂に触ることなくして回転する――

でもシャワー

死者の床、信仰の推移に浸みこむ

どっと 愛の本能の錯覚、及び母の本能が鈍磨する

人は彼等によって生まれてきたのではない

我々は魂によって深く恍惚たらしむる歓喜を

情緒ある肉体に編み込んで生まれてきたのだ

――クローン人間は生まれない、科学は暴走しない

かくの如く異常なる心力の妄想よ――

信仰上の現実が、装身具の玉として身につける

そこに両親や、先祖の姿が一体化する

、、、、、、、、、、

スプリンクラーとして、快適に演奏する

――満されたいと望んでいる愛の声は自然の声だ、

玉が触れ合うように、魂が鼓動する――

そしてシャワーだ、あなたの涙だ

海を求める魂の渇きだ

自己を限りなく与ふる雨よ、

習俗の羈絆から離脱せよ！

シャワーは「夕立ち」になる「通り雨」になる

「集中豪雨」になる「驟雨」になる

――神よ、人は愚かな厚顔の暮らし、

生まれて、いたい、魂の音――

いまも、きこえる、か…

すきとおる冷やかな水が瓦礫のように

ぱらぱらと空から悲しく降ってくる時

ああ、魂もこのようにして在った！…

シャワーよ、僕は生まれて、いる、か…

――神よ、小さな傷に執拗に沁みる塩の別称よ！

玉となった、結晶物よ…ああアキレス腱よ――

こころ

キャラクター人形のついたカラフルなボールペンを若い手合が感ずるような楽しさ、愉快
よさを、横幅の広い筋骨の逞しい胸が、白衣が、シャッタータイミングで写される。背中
冷や汗わずかに俺は口を歪めながらしかし陽気なネオンサイン舞踏靴の底。交差点、信号、
「It can't be helped now.（今更仕方がない）」…微笑んでも、突然で言葉が出ない駅から
の道。井戸の暗い水底に爆音が響くようなステンレスでシルバーな気分。細君もあれば娘や
息子もいるという雰囲気おどりぐつの奴もいるだろうし、サラ金・街金・闇金からの借金で火だるま
というコミック雑誌みたいな奴もいりゃ、王道系のナルシシズムとフェロモンほら綺麗な蠟細
工見たようなホスト…

スポーツジャケットでそぞろ歩く高校生たちの姿。Tシャツ、デニム
の
ミニスカート。スラックスとそれに合わせた上着！今更もう戻れない思春期…！その他大勢と
一緒としてもガス発生器・発電機のCD・DVD・ゲームソフト・キャラクターフィギュアみた
いなジャラジャラダカダンダンとパチンコ屋や全国チェーンのレストランや弁当屋なんかを
見ながらまるで長い長い通路を歩いている死刑執行を宣告されて数年後もしかしたら十数年
後の彼みたいな、パターンで――

余裕がなく強張った顔面筋肉の僅かなおののき
に過ぎなく

なり、プレゼント誰に？でもすごくナイーヴな僕はガタンガタンとまだ電車の擬音する子供っ
ぱい所が残っているのだが花屋で薔薇の花束を購入あえてゴム手袋をして何の化粧も妖しげ
な雰囲気もなく、建物密集地域、すすけた巨大な長方形の岩みたいな、この建物群、ビル群

を横目におぼつかぬ足取りで暗い一角を目指すコーラのグラスの泡のような気分で。経歴・年齢・本名など数年経った今となつては無意味なシチュエーション、だって僕だって当時は腕時計をしていたのに今はしていない流行のアイテムにハイテンションの早口をしながらストローでアイスクリームを食べているようなスクランブル交差点。気に入らぬ者と見れば何かにつけて真綿に針のチクチクする、医者を演じてる俺。でも閉じてるんじゃなく開いてる左の胸ポケットから煙草を取り出してライター取り出せばルルルと携帯電話。数メートル歩いてから取る「Say, there! (もしもし)」と出れば華奢で幼く見えた、高校時代の親友の声すでに両親が経営した店を畳み、のんびりサラリーマンをしてるって言うけど…。

18:00 到

着。水に溶かした石鹼みたいな、ガラス張りの壁の向こうに不安げな顔をさらしながらゆうべへ迂回。ぐるりと回り込み、ゴミ捨て場に浮浪者が寝ていて氷をがりがりと齧るようなゼロの気分だが、まあ気にするな遠くには居酒屋やベニヤ板の工事現場また洒落たカフェなども見える半階を降りて、ドアを押しあけると、いらっしゃいませとひらひら手を振ってみせた胸を開いた女性店員、強烈な香水。でもこれもパフォーマンズ我がクラスの高嶺の花だった彼女は赤く艶やかな唇でこのねじれた鉄骨と汚水に対してあっけらかんと何の迷いもなく自分を作ってここにいる「Well, I'm beaten. (君には負けたよ)」…クスクスと無邪気な笑顔を見せながら久しぶりの再会を抱擁で飾る、みんな待ってるわよと言われて、途端俺は長い腕を上にも伸ばして準備体操する。啞然としながらも既にライトのCOLORFULさにすでに眼がくらみながらソファとテーブルへ落ちつき、背中を預けるハーブティーでも飲みながら心地よいその振動に任せて――

ああ階段で何者かに背中から突き落とされたみたいに――優しく
しと

やかな、孔雀の羽根、レインボカラアのかつら。もう一人は短く刈り込んだパイナップル頭。
。たぶんクールに何かコメントすべきなのだろう今時のテクとしてはキャラクターが重要だ
から「What a beautiful day!（こんにちは）」とネイティブな発音で悪足掻きかそれともこ
れもさるあるべきことかミッドナイトブルーな感じ。セメントや材木でも運びこんでいるよ
うな派手すぎるルームでミュールやビジネスシューズ、スカートやバッグの揺れるダンスル
ームでかねてから企画されていた同窓会アロマキャンドルが灯されたフロアキャンドルに大
音量のクラブミュージック思い思いに仮装した面々。コンビニのレジ袋が揺れるアフロ頭い
ささかちょっとやりすぎな感じ。ふざけた顔。ビジュアル系バンド風化粧しすぎて顔のわか
らないある種のパターン。なにかすごく狼狽えながら複雑すぎて荒唐無稽な推理を試みる在
りし日の彼や彼女たちいるロビー。こんなmelodious――頭上から降ってくる雨より悲しいオ
ートロックもうあの日の僕等はいない自由の身になったほんの数十秒の間。

どこにめぐるのであろう　あの日

求めた　新緑がまぶしく…

眼にちかちか痛く

校舎のカーテンか　ら　永久に。

…消えてしまった　乱れた髪

――心当たりのない鳥が

滑っていった　…目にとまるかとまらないかの

笑みをふくんだ視線――水車がまわっていた明眸

風…　きらきらしていた　スクリューの回転をし

まるで　ドライバーがネジを落としたような

おののきや　顫へ　で…

――心当たりのない鳥が

傷口を洗うと　ちょうど心臓の真上と思われる、

そんな　ところで、――血が　止まっていた…

聖なる誓い　ただ一突きにやられた

うすやみのなかに　…　血は、…

冷たい叩きの上へ振り落とされた

――心当たりのない鳥よ

いろんな花が咲き乱れ・・

雲はいよいよ低くこうべを垂れ　――土は芽をうみ

折り紙はあたらしい形を・・　やさしい顔して快活な

ああ　バネもネジもなかったのに・・

地下にくらい世界があるから――光や　水が

育む・・こんな風に　月日が経　て　ば

――心当たりのない鳥　も

おのずとうまれてくる・・

ぼうふら

すると子子のわいた水も　防火水槽も

靴底をしめらした　肉刺のつぶれてヌルヌルとする

そのうえに貼った絆創膏も・・たぶん　ちいさいけれど

赤い実を結ぶ　草いきれも　やけに息ぐるしい

――心当たりのない鳥

ふるい記憶だったな、と言いながら

もっと広げれば　もっと折り畳んでいけば・・

さして　干からびた様子もなく羽根は

閃光に曝された・・　でも今日、あの葉は散る。

あの葉は …… 短い間に 眠りながら

まだとほく 知らない場所へと 行く…

——心当たりのない鳥が

振じれ 砕け 飛び散ったあとでは…

触れなじむこともなき地——とうに…

外皮を脱して 魂へと還ったかも知れぬのに

…なくなったものの名前は 愛しいから——

まだ 苦しい 響きを伴うから…

——心当たりのない鳥

と 君がめくられた瞬間に…

カッターナイフが出てきても 彫刻刀でも

窓に唇を寄せ——消毒する薬液さえ 愚かな…

気持が悪いほど汚れている いばらに…

裂かれたのだと 美化 できないような

——心当たりのない鳥よ

紙飛行機は それだけの 重さで…

指先のたった一瞬の感覚で 全運命を なだめる

ちょうど 茶色の瞳した あの蟬みたいに

乗り切らねばならない　..それなりに楽しかった

おびたしいきいろい砂に　校舎の影をおとして

プールへと　ああ　夏の朽葉たまりながら

――心当たりのない鳥に

ああ　その隅の方にたまった　蝉や蝶　は

ふりつもった落葉めがけて　とんでゆこう..

枯葉の声がきこえたのか　陰謀と策動の巣窟――

震える手が掬い取り　..意志は無数のひげ根

かすかな脈動を　ともなって..

君は　透きとおるような　青い風になった

――心当たりのない鳥が

それは風景というまゆのなかへ..

とけいるような青に　――鋭い嘴が　肅々と

姿をあらはしたけれど　..急降下

しかし　泣かなかった　太陽があったから

板の合せ目を伝わって　そこに　記憶が

..この悲しさを　埋めようとしたから

――心当たりのない鳥が

灼けながらにして あまい記憶を信じ..

そのひと味ひと味が たやすく

笑みをうむ 一一剥がれおちてゆく一日は..

紙飛行機を飛ばしながら いまにも 墜落しそうな

身体のうちに ..、ほおの肉づき、顔のいろ、

空気抵抗をうけ まるでイカロスのあやうさで

一一心当たりのない鳥らしく

今度は透けるように 廻りはじめた..

記憶の螺旋 一一記憶を破る飛魚 あご

そしてがぶりと深くえぐり取った ..あたらしい場面を

なぞっていた一一まだ ためらっていた..

ものがなしい 月が燃え立っていた...

一一心当たりのない鳥が

どこかにめぐるのであろう あの日

求めた 新緑がまぶしく..

眼にちかちか痛く

校舎のカーテンか ら 永久に。

...消えてしまった 乱れた髪

一一心当たりのない鳥が

うつくしかった船、寄せては砕けての波は末も永きに、いまは雪の音を聴かせている。うら悲しげに、景色の最深部にうっすらと、像も影もわからずに、ただ、うっすらと積もっていく侘びしい雪。

子供の頃、港や磯での魚釣りをした。海水浴、またボトルシップ作りに精を出し、あひるのボートでイメージをふくらませ、大学ではボート競技のレガッタに……

船員職業を目指すために国立海員学校といった専門の教育機関や、船員教育の学科を持つ高等専門学校・大学をさがした。外国航路の船、内航貨物船・旅客船・長距離フェリーなどの国内航路。漁船の遠洋海域に操業する船、近海・沿岸で操業する船。また両親のすすめで、海上自衛隊のことも考えた。

その頃、丸山薫をよく読んだ。海への深い理解が私の心を何度も捉えた。

また、職種も航海士・機関士・通信士などの海技資格の職員。甲板員・機関員・司厨員・事務員など資格を、必要としない部員で乗る場合なども考えた。

たまにぼうっとしながら、夜の寝床で、地球の表面の約四分の三なんだな、つまり七十パーセントくらいが海で占められているんだな、太陽系の惑星でこの水溜まりが存在するのは地球だけなんだな、と思って胸が熱くなることがあった。大昔、海は垂れ流しの滝状のものと思われていた。その頃、海を渡る手段として丸太が利用され、くりぬき、また束ねて筏として海へと出ていった。古代エジプトでは、パピルスという、地方特有の植物でつくられた船もあったそう。コロンブスの大航海のこと、風力から蒸気船へと変わっていったこと、木造から鉄製へと変わっていったこと、幕末の日本におとずれたペリー艦隊のこと。やがて造船技術の進歩で鋼鉄製の大型船建造が可能となり、燃料も固形の石炭から液体燃料の石油

に変わり、動力装置もレシプロ機関から蒸気タービン・ディーゼル機関へ高馬力・高出力化が進むと大型で高速力の船がたくさん建造されるようになった。職業として船員を選択したのは、何故だったのだろうか？

うつくしかった船、寄せては砕けての波は末も永きに、いまは雪の音を聴かせている。うら悲しげに、景色の最深部にうっすらと、像も影もわからずに、ただ、うっすらと積もっていく侘びしい雪。

プランクトン

海底堆積物のあこがれ、浮遊生物、チョウチンアンコウ、そして無数の深海魚達を観察する潜水艦。そして沈没船へのあこがれ、一攫千金の気持ちなどを捨て、私は某社の外航船の四航士として原油タンカーに乗った。先輩達は尊敬できる人もいれば、できない人もいたが、いつか船長になることを夢見た。

しけ

風波と船酔いになやまされ、時には嘔吐し、それでもいつかは慣れてしまい、私は海を心の底から愛するようになった。陸上勤務や有給休暇などで、陸上ですごした期間を除いてもほとんどを私は海で過ごした。屏風からでてきたように優雅に飛翔ぶ？、イルカ、船に驚いて三日月にゆれるトビウオ、真晝の月、そしてかぞえきれないほど、おびただしい無数の星……そして日没の荘厳さ。ターナーの「吹雪」

サイレンの音が聴こえると、ふしぎに澄みきった口笛が起こった。それは牙を剥きだした感情です。それは堅氷を破って突進するものです。羅針盤の尖鋭角は、煤惚けた帆のひとつかみを指している。

稲刈り機のように足を踏みならすと、タップ・ダンスが起こった。ヴィーオリンが奏でられると、ブルース・ギター、アコースティック・ギターが併せて反応する。シンセサイザーが鳴り始めると、自働車のクラクションが鳴る。ことンことンと電車が通り過ぎると、馬が

警笛をまねて嘶いてみせる。リズムを取るように手を叩くと、二枚の金属製ユーフォーをうちならす相互打奏体鳴楽器しんばる、木製の胴部に鉄玉のチェーンをまいたラテンアメリカのカバサが反応して、ボクシングの終了を告げるゴングまでも鳴る。マラカという植物の実を乾燥させ、中の種子で音を出すようにした振奏体鳴楽器、まらかす木製や合成樹脂製のものも多く、封入物も石や金属のものがある。まらかす。ああ、マラカスが鳴ると、ピッアーノが蜘蛛の糸をかける。そうして、わたしは、しずかに、ないてい、たのだ――

船室では死を覚悟し。なつかしい緑蔭の夢を見。うつくしいことまで、ああ、くるしくさみしかったことまで、私はこの響きの中に委ねている。サイレンが聴こえると、稲刈り機のような足踏みを起こした。それがタップ・ダンスへとつづいていく、スパイラルのうずまきにのまれていき、いまこの船は影形なく消え行くのみだ。

いくつかの記憶が、私の脳裏に閃いているのがわかった。

船長になってから様々な国に碇をおろし、寸暇を惜しんでシリンダーヘッドの修理をした。どこをさわっても熱い、まるで、太陽に触れているような感覚だった。ゴキブリの騒動に巻き込まれたこと、看護師不在のため、怪我をした船員の治療をしたこと。仲間と一緒に食堂でさわいだこと、そのままカラオケ大会へ移行したこと。海にながれている空き缶のコーラが他国のものであると気付いたこと、船員同士の揉め事にサヴァンナの奥地でおこなわれる大雑把な裁判をし、こちらが悪い、こちらが正しいと意見を言って、より大事になってしまい船の活気がうしなわれてしまったこと。妻子を陸に残したまま死んでしまうこと。船の上のベンジョ・タイム。よからぬ感慨にふけたあまり、海へとジャアジャアやってしまったこと。そうして、わたしは、しずかに、ないてい、たのだ――

うつくしかった船、寄せては砕けての波は末も永きに、いまは雪の音を聴かせている。う

ら悲しげに、景色の最深部にうっすらと、像も影もわからずに、ただ、うっすらと積もって
いく侘びしい雪。

ラジオを点けると、哄笑イ声がきこえ、航海日記のある机の窓の向こうに、そっくりその
まま再現されている。何かがおかしいと思っても、静かに湧きあがってくる絶望の前では、
孤独のリズムを叩くしか、泣きながら、手で夢を奏でるしか、もうないのだと私は悟る。

エピソードに付きまとう感情を注意深く拾い集めながら、作品に一貫した一つの流れを与え
ている。情景的なうつくしさが、キー・ポイント。あえて細部にまで論及せず、ただ生活的
なものが反映された指向性マイクを頼りに、ブロークン・イングリッシュ！ でたらめな英
語をつづけている、素養のない者にとって、知識を持たない者にとってこれは判断すること
は難しい。しかもネィティブであればあるほど、われわれはどちらなのか判断・判別をつけ
られなくなる。その時、それは梁や、柱の一部である。すると、そこは宗教画のような荘厳
さを覗かせて、蓮の華、と形容するべき啓示的な自然のこもれびがあたる。だが、それは月
の光のように侘びしい、森にひっそりと匿われた奥床しさ。そのヴァージニティーは陰陽に
あてはまらない第三の原理として、アミニズムの気配をただよわせながら、非業な宿命の暴
風雨が彼の心の中をかけめぐる。むなしく、やるせなく、そして、どこまでも尽き果てるこ
とのない希望や夢に、なぜ自分はこういう立場にいるのか、こういう状況に追い込まれてし
まったのか、と嘆いている。丹念におりたたまれていた回想感覚に、きちんとした答えをも
たらすべきではない、いや、できうるならそういうフリーズ・ドライもあってもよいのでは
ないか、と思う。それは惨憺たる空の下でおこなわれた、かなしいひとつの虐殺である。か
なしいひとつの虐殺である。

小さな穴

日曜日の朝の食事の時、

「決して笑いませんよ」と妻が言った。

テレビを見ていると妻が突然、

何か悩み事はないか、と聞いたのだ。

夫は目先の利益を考えて会社で働き、

何不自由なく暮らしていた。

「子供はいる、妻もいる、

これ以上望んだら罰当たりだ」

「いえ、」と妻が言った。「お気になさらず」

なんだか不気味な光景だったが、

なまぬるい液体のプールみたいだった日常のことを思うと、

品物の紛失したものが戻ってきたみたいだった。

「じゃあ言うが、俺はおとなしくないか。

おとなしいだけじゃない、規則正し過ぎないか」

「どうしてそうお思いになれるんですか？」

「たまに自分の人生が気になるんだ」

偉人の年表が気になる、出世も気になる、

あるいは転職するべきかとも思う。

なにか新しいことをするべきかとも思う。

株でもするかとも思う。

「…天井に穴をあけて、眠っているあなたを想像してみて」

夫は、目を瞑って錐で穴をあけてから、ベッドの真上に、

小さな穴があって、そこから自分が自分を覗いているということを、

妻に言われたとおり、想像してみた。

「変な光景だな」

「あなたはその暗い場所にいるのよ、

そしてその内、あなたは

あなたを見つけるのよ」と妻は言った。

人工か天然か知らないが、

夜になると、小さな穴のことを考えた

――妻はあの後、

誰にでも充たされないものがあると言った。

口には出してくれなかったが、部屋から階段へ、

台所、洗濯、…買い物という生活のなかで、

気が狂いそうなことがあった、と初めて洩らした

…変なことを口走るようだけど、

その時のわたしにあなたが似ている気がして――

「確かに、そうかもしれない」

コーヒーを飲みながら、ある日の日曜日の朝、

妻に呟いていた。

「行く手から吹きつける風の中を、突っ切ってきた！

チーターのように疾駆して・・時に前足で襲いかかり、

首筋に牙を立てた・・会社とはそういうものだった。

がむしゃらに働いた。そして君と知りあって、交際して、

結婚した。幸せな時間が長く続くと思った。

でもそうじゃない、絶望的に心はいまも急ぎながら、

毎日の中で戦っている。ひょっとすると、背後に、

その獰猛な獣がいて、ライオンやトラがいて、

まるで鹿のように俺をおさえこんで、

羽交い締めになれるかも知れないと・・」

天上の穴は、いつまでたっても小さくなることがない、

そこからさむざむとした風が吹いてくる。

まるで鐘が鳴り、遮断機でも下りてくるような――

そんな一瞬、ぼろっとそいつ・・俺である俺は、

落ちてこないだろうか――

「あなた、そこには空があるのよ」と妻が言った。

「空が？」

「そう、空があるの、

民家の屋根や、庇、縁側、そして庭、

廊下、柱、そして各部屋・・

その穴から、

そういう家の鍵が落ちてくるの」

「詩人だね」と夫は笑った。

「いいえ、ある日、その穴から、

鍵が落ちてきたのよ。わたし、電球で照らしてみたり、

鍵の溝を見たりしながら、ぎざぎざ、とかね…

ぼんやり見つめながら、一応、部屋の鍵とか、

いろんなところに、差し込んでみたりしたのよ」

「うん…」

それは多分、そういうファンタジーのものではなく、

と言い掛けたが、妻は続けた。

「でもあきらめて、

わたし、その鍵を近所の公園の池に捨てたの。

棄てながら…ぼんやりと想像したの、

一体どうしてわたしはあの頃のように、

その夢を追いかけれなくなったのかって」

それを聞きながら、

夫は胸が痛くなった。その鍵は…その鍵は、

おそらく会社のロッカーの鍵だ。

でも妻の比喻、嘘や真であれその比喻を聞きながら、

これまで彼女が何を考えてきたのかを思った。

「幸せにするよ」

「そう言って、プロポーズしてくれたのよね？」

「でも仕事ばかりして、俺は立派な夫じゃなかった。

優しい言葉もあんまりかけなかった。」

でも何処の家庭でも、多かれ少なかれそうだった。

恐妻や、悪妻・離婚はたまた夫婦円満という場合もあったが、

仕事はいつまでも生活から離れず、

それが中心となった生活は妻の顔や、子供の顔を、

おもしろいほど忘れさせた。

「これからそんなつまらない話をしてもいいかな」

「もちろん」と妻は笑顔で言った。

生活の中で、ことほどさように、

暗くて退屈な話は夫婦らしい。

「少し前まで、暗い穴が空だと言った、

君の話を考えていたんだ。

そこから鍵が落ちてくる・・・ファンタジーの始まりだ、

僕は勿論夜中に君を叩き起こして、

一緒に公園の池に投げ捨てるんだ」

そしてその帰りに、――

「ジュースを買って、プルトップの指輪を、

君につけるんだ。なんて、

馬鹿馬鹿しくて安っぽい指輪だろう、

と君は思うかも知れない。――いや、それでいい、

ただ…あの穴から落ちてきたのは、

本当はそういうものだったんだ」

と 僕は言った――

「本当に天井に穴はあいていないか、と思った君は、

正しい…そこから鍵が落ちてきたと思う、君も――

だって僕は君が…そう打ち明けてくれるまで、

一度だって、君のことを考えなかった。

子供のため、妻のため、と思ったことはある。

でも本当に家族が望んでいたのは、

その僕という穴から、

違う人生を見付けたがっていたんだ、

と、気付いた」

「枕もとに、あなたは何故鍵を落としたの？」

「さあ、どうしてだろう」と僕は笑った。

病気でも、疲れていたというわけでもない、

妻がやっていないなら、僕ということになるが、

僕はどうしてもそのロッカーの鍵を置いたのかわからない、、

どうして夫婦の寝室に落ちていたのだろう。

洗濯ものにもまぎれず、どうしてもそこに…

でもたとえばそうだ、子供が、

まだちいさな子供が、洗面所に置いてあった鍵を、

寢室に隠したという話はどうだろう・・

そしてその小さな子供は、あの天上の穴から覗いたように、

両親があまり幸せではないことを見透かしたのではないか、

そして彼は聡明な探偵がそうであるように、

頑として誰にもこの話をしなかった――

さてその子供が目覚めてくる、お世辞にも、

そんなに頭のよさそうな奴には見えない、息子だが、

羞じらいに充ちたこういう秘密のなかでは

よくある思い違いや勘違いとして処理される。

それにしてもよくある幻覚か夢でない限り、

眩しい外光の、こんな朝のなかでは、

そんな小さな穴など誰にも見えないに違いない。

どうしてそうなったのか、暗闇の中に異様な色彩が浮かぶ。好きなアーティストの歌を何回も、音楽番組を録画したビデオを何回も巻き戻しながら聴く。厭世的なミクロの視点-デジタル数字が犬の放尿のように見える。

記憶の頁が脳内で痺れる-自分の汚れる *Speed!*

それは皿の中の火打ち石の欠片――

、 、 、 、 、 、 、 、 、 、

無音という名の油膜が、波の音をさせるとき、大都会にある池を想起させる。その時、

(いじめ、暴行、傷害、恐喝――生存競争・・)

――ではないのか、と僕は思った。やがて、

Hello -Hello-Hello・・魚の鱗でふさがれて、

白い石の欄干や大理石に焦がれる・・・

たとえば――それは壁に囲まれた部屋の中の枕と布団の関係のようなもの・・
鋳鉄のゲートと柵のようなもの・・小麦と鎌のようなもの・・・

ルフラン ルフラン

ゆえに僕は畳句を――輪廻と訳そうか・・と、その時に考えていた・・・。

あるいは“ル”なんて要らない・・まだるっこしい、フランの迷える光をくれ！

――技術者は、断末魔の悲鳴をあげながら、性や職業を変え、世論に認知され始めたDV
Dによって、曇り空の午後の中、次々とビデオテープをドラム缶の火の中に入れていった。
彼等は“影を落とし”という言い方をした。

周囲は冬-どっさり周囲の美しい雪景色を眺めて、眼玉の底だけでなく、胸の底にまで、ノ

ーマ・ジーンの処 女性。

サフラン

パチパチという音のする、闘技場では、橙黄色の花束――

それは不条理でナンセンスな花壇のスイス産チューリップのように見えた。

（典型例予算強靱化の公共事業的ばらまき先祖返り・・・）

・・・ぼくは壁に沿って歩いていた――顫える空白の向日性-でもさあ迷路の中じゃ、愛情をかけて育てることは難しくて、大抵鉢から落ちて野生化-雑草化する。もっと詳しく言えば、三階のベランダから落ちた僕は、トラックの上に落ちて、運転手がふっとそれに気付いて川に投げ込んで-ああ、海にたどり着く前に十代かそこらの子供が拾って、可哀想、と穴を掘って埋めるんだ。そういう偽善-でもまだ優しさをきちんと定義できていない、善意を装った、自分への回復、ストレスの発散の一典型。たとえば街の騒音から少し離れているそこでは、排気ガスがしないけど、むしろ僕は煙草を喫うことで社会の嘘に気付くといい、と諭す。

アフリカの飢餓とか、内戦だとか言っても、気管に煙が入れば涙くらい滲む――

バッテリーが切れてしまったノートパソコンのように、あるいは電気自動車のように・・・瓶の中の人格をかかえている君よ、群衆は虫に似て、夕暮れの靄の中で交尾する。

[ふたりの男が何か議論しています・・・安定的な社会保障-予算の集中投下の行方・・・でも、プラスよりも、マイナスがずっと多い会話を聞きながら、ルーブル美術館に入るランボーを何故か僕は思い描いていて、僕の右手に銃があったらこのふたり撃ち殺していただろう・・・]

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

ややもすると落としてしまいそうなのだ、美人女性が一定年齢を超えると、ボンレスハムになる不思議。ペンキの塗りのばらついている様。いやそれは思考回路によって組みかえられた永遠に乾かない眼球・・・青い瑤瑤が、まばゆい光の中に溶けた松火みたいに見える・・・

たいまつ

荒れ模様の空-雷光をうつす薄い膜のようなグレースケール・・船底についた丸い覗き窓のよ
うに・・視界が下りてゆくごとに空気は重くなる――

「かくして公共料金の支払いやA T M、プリンター、自由に入れるトイレがスーパーマー
ケットにあれば盥の中に鯉だって泳がせられる。」

Hello -Hello-Hello・・ぱっくりと開くだけじゃ飽き足らず、

縫合した、そこに、指を突っ込むのさ・・・

自分の部屋で――自分に向かって自分に語ることは多くは・・
懈怠の匂い-平和を保つためのマスタアベエションが得意・・・

繊細な神経は糸になり、やがて綻びとなるという法則・・

不可解げに頸を捻って、哀しげな、また疑うような眼で、ぱちゃん、―――割りたい、あ
の鉢のように、割りたい割りたい・・香水の瓶。ペソアやボルヘスの匂い・・

ソフトクリームのような甘そうな匂い-*Pheromone*・・

、、、、、、

蓋をあけたら、蛙の面に小便かも知れない-その香りを嗅ぐと、発情/発症して、人の記憶

が朧ろげになるかも知れない・・いつまでも空虚な眼で、兎のように血走った眼で――

、、、、、、、、

御馳走をいただく・・広告のポスターから煙草の煙が出てくるよ、この国・・・

[空飛ぶ車、タイムマシン――映像の中に取り残された演出が、窒息死する匂い・・]

青いおぼろな嵩で井戸のように見える蒼白い月の光に、吉岡実の詩さながら蛸の頭を思う

。モノクロの鼓膜からシュールリアリズムエレキギターを持った、蝸牛の遅遅たる運動を真

似る太極拳男。彼の口臭はマイクが拾う、がらがらの声。それは喇叭状-放射状に拡がって、

聴衆の眼前で蒸れてゆく不快感-水虫の監獄-熱中症さながらバタバタと倒れてゆく細菌兵器

。マインドコントロールされた人びとは、視神経を釣り糸で引っ張られるように感じなが

ら、コップの中の蟻、円筒状の、もしもしという迷路（へ、）

Hello -Hello-Hello・・・無重力の肉体で

口いっぱい墨の味が溢れる・・・

腐敗と墮落——それでもはや人間失格！・・・
ジョイスはいないし、ユゴーも、ロランも・・・ゲーテも、ポーも

——僕の鼻の穴にまで這入ってくる、プリンターのインク・・・うっ、と飲み屋の照明で、自分
が誰なのかわらぬまま意識が戻る前に放屁し、ホイップクリームで顔中がべたべたになる
・・・凝固する *Metaphor* ・・・

どうせ意気地もない愚うたら・・・宴会芸的処世術——でも、ネクタイドラムは鳴っているし
、本当は素っ裸で、脛毛も剃ってニューハーフダンスをするべき。

（笑いの道は厳しい——でもだから、プロっていつだって尊敬される・・・）

ああ・・・資本主義社会に住む無数のユダよ、その自尊心（は、）政治家然！

Hello -Hello-Hello・・・サララップのCMみたいに聞き慣れた歌、

エモーションな痛みを・・・早送りして・・・

不幸せと不相応——卑しく満足する人生は、・・・
ステッキを隠している、帽子をかむらない、チャップリン、

刺激に眼が眩んだ・・・僕の眼は退化した蝙蝠-でも義眼だと思えるから、ヴェランダに出て、
僕は空に向けて思いっきり無理な話を放擲する。しかしイメージは、洞穴のうから出てき
た原始生物の未熟さの中で、すぐ退散した。しかし強い煌めきのうちに、意識が明瞭とし、
心の中に塩分の感覚が戻って——僕は満たされる・・・

[聖堂の広場、雲、そして鳩——夢から、本当の現実へと醒めたい・・・]

僕はいた！ 嫌悪感をたぎらせながら、ベルリンの壁を見た・・韓国の知られざる不法地帯の実態、日本にあった夜這いの風習・・僕は溜まり続ける欲望に汗ばみながら、裏アダルトサイトや、性の誤解を増幅させる投稿サイトを見た・・神経の中の脅迫を感じた、衝撃を感じて、消化しきれない僕のフィルム-コンタクトレンズが段々壊れてゆく。・・空腹のとき、肉や刺身を食うと、それが直ちに、自分の血となり肉となるように――五月蠅かった、僕の声-冷たい雪そのものだった、僕の肉体・・

Hello -Hello-Hello・・脳裏に映る多重世界

窓枠にしがみついていた指先の力が抜ける・・・

あんな妙ちきりんな顔をしている、人の指に、
小人が潜んで、もしかしたら性の隠された暗号で作られた妄想・・・

（不況を終わらせるために消費税を上げろ！・・）

色んなことが僕にはわからない・・酸素と二酸化炭素、窒素・・ビニールシートの上にある画用紙に、絵筆で描き加えられる。樹と、ベンチと・・そして煉瓦の広場や、オーギュスト・ロダンさながらの銅像。あるいは、シンボリックな意味で、羊ヶ丘展望台のクラークーでも、その画用紙には一つだけ不思議なことがある。あたかも、何処かに脚本があるように架空の青空の中で、人や動物や、車やバイク-あるいは建物が涙でも流すようにサイレント・フィルムの特徴を活かしながら次々と入れ替わるのだ。やがて、ベンチの上に籠が置かれ-籠の中身が取り出され、一人の男を麺麴を食べる。そして葡萄酒を飲む。

（飲む・・・愚かしや、今宵の夢・・満面の笑顔で、予報はずれの急ぎ足の雨で――）

やがて場面が変わり、静かなる小さな星が巨大なミッドナイトブルーの胃袋の中に、呑み

込まれている。しかし、ふと気付く。街燈があるのに・・建物や、人に、まったく影がないのだ。まるで出来損いの合成写真のように、あきらかに不自然な首に付け替えている。

小さな町、小さな人――僕等に流れていた熱い血の昂ぶり・・兵役、防衛――革命と、そして世界のあちこちにある共産党への怒りの感情が心の底で渦巻いて・・でも、暴力の前で、いわば鎮静剤を打たれた大衆。武力に対する恐怖と憎悪を持ちながら、宗教への、神への何とも言えないパニック-現実の無言に対する固く握る拳・・

――でも唯々諾々として、命令に従い、スポイルされ続けていったら、そういう時に僕等は絶対に動けない。死を恐れるな-無意識の焦燥・・

その時の僕は二十一歳、他人に従がっていることはできないと誓ったあの日・・公園のベンチで僕は煙草をふかしていた。人生に対する適切な態度で、人を信用することを止め、誰とも話さずに僕はひとりでベンチに座りながら、何度も首を振っては、泣いていた。みぞれ降る冬の日――言葉にならないと知っていたって・・ことさらに覚ゆ・・血の気・・・

「自分は情念の絵の中に入り込んで・・いる――あ、流れ星・・！」

・・・されど　きらめきはすぐに落ちる――涙が、観念の世。・・・執着の城・・カフカの変身や、フランケンシュタイン博士の怪物や・・狼男、吸血鬼-それはリストラされた彼や、レイプされた彼女そのものではないか、と思った。情報が携帯電話から-パソコンからテレビから起き上がるたびに、僕は牛乳でびたびたになって、お麩みたいになったコンフレークを想像した。眼を開ければ・・・噴水のある中庭――

[冷氣は、裂け目。・・・いつも斜かいに・・百七十センチの僕の見ている空――]

Hello -Hello-Hello・・訳の分からない神経症的圧迫、

【啓示】（不安だけがそうであるみたいに…）

たった一人の戦いは」 屋根を貫く爆弾」
…血も涙も汗も」 神も仏も」 誇りも償いも見返りさえも」

外界より遮断された苦痛や不安は生の営みを断絶する…僕は――空っぽだった…欠伸が出ては涙を堪えている自分を知っている-うまく泣けなくなった…声を殺して、泣きながら僕は沢山の社会の過ちを見た。そして昨日の夕刊はもう必要なくなっていて-昨日のお笑い番組も、そして数年前の誰かと話していた会話も、携帯電話のやりとりも、いつのまにか必要なくなっていた。僕は空っぽだった――そして冬の時代の孤独に、何度も僕は凍えた…

*** 穴がある。穴がある。穴がある。 ***

僕は夜道を歩くのが好きだった。ローマの生贄の儀式よろしく、航空管制官の声でも聞こえてきそうな毎夜の公演-夜行列車…

[蹴落されると…兎のように穴の中で、跳ねまわる――死に続けるエネルギー]

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

ここに人びとは佇まない-冷たい突風で大宇宙がねじれたように、僕は灰色の服を着て、棺桶にでもこれから入るように…僕一人、絶えざる苦悩に駆り立てられている。

名も知らぬ花を摘もうとしている――だれもが静かに眠っている真夜中に、高熱の夢の中

シムーン コラクル

…熱風-小舟…。

[超高層ビルディングの夢、レッドゾーンのスピード…嘲笑せよ！――嘲笑せよ！ 深夜

映画が絶望の詩以外の何物でもないように思える！…]

蒼く深まる怒りを見た…！

（電気が流れるフィラメント、）

ドリュアス

僕はいた！ 撃ち合いだ。じゅんすいな殺し合い・・・尊敬すべき緑の静脈の木の精。そうだ

まぶた

きこり

、ここは森、暗い海を越えるために暗い目蓋を手に入れにやってきた、僕は樵夫。でも、胸

が腐る。声まで腐る。息も腐る。考えも腐る。・・・

、、、、、、、、

腐るという現象は・・・落雷によって倒れた樹の下に、虫たちの楽園を作るという意味だ。そ

してそれは忌避すべき境界の堆積。斑点にひそむ病原菌-象牙と燃え立つ炎・・・蛇の急接近・・・

そのようにして片目をえぐられる一瞬-巴丹杏の形状・・・意識は灰いろの階段――低くなだら

かに傾斜して、広く、遠くへ展開しているはずなのに、穴・・・

*** 穴がある。穴がある。穴がある。 ***

さてそれは何の穴・・・形而上の？・・・いや万事は気も狂わんばかりの幸福な不幸の穴。治安の

悪化に、資産価値の下落。そんなわけで毎日、床につく時、聖書の文句がひとりでに出て

くに

きたり、思わずお故郷の訛り言葉や、毛嫌いしている演歌や、童謡を口ずさんだりする、穴

。しかし・・・しかし、子供はそこで罰せられねばならない。

蒼く深まる怒りを見た・・・！

（ヴェールのように澄んだ空気！・・・）

Hello -Hello-Hello・・・薄いカーテン越しに死神が見える、

そして死神はゼリー状の、氷山の一角だ・・・

しかしそれを悟るにはまだ僕は若い・・・

しかし静かな樹や石の時間へと、苔や、水音の影へと・・・！

一藁や塵埃を、散らかした。・・・報いとして・・・自分という人間のもつ何ものかを験すために

、時流に背ける無頼となった。悪漢となった。それは機関車の煙突から町に降った煤煙のよ

いた-くら闇の垂れ幕にして溝条の谷へ突き落されたように暖かい日の影。心地よい芝生-目に見えない高潮にのる白い雲。

かちりかちり、と噛み合わない歯が鳴る――

弱点を持っている者に、罪をなすりつけようとする心、怯懦で、臆病な心…。

ガクガク、カタカタ…と大空に反響する…地の底の呻き声――僕は言葉を持たなかった、影の中から明るみに出ても…挨拶もしなかった。頭を下げるなど御免被ると心の中で、いつも！いつも！思っていた――浮力のない小石…。

でもごらん、過ちの中の僕…そしていま社会の中で生きている若い人よ、生活の泡といえるものが硬化し、君はザリガニだ。時に青白く紫の殻となり、落花生のように剥け始めるのだが――疲れ、水晶に映る回廊に疲れ、僕を運んだ、僕は、濡れた花の匂い-紫陽花ばかり嗅いでいた。アスファルトの濡れた匂い、まるで老人ホームから出てくる曲がった腰…

消える、教育のある人-戦争を凌ぐ静けさ。軽く首折れたような花束のなかで、僕は遂に手に入れることのできなかった優しさを見つけた。光がぼくを包んでる…月の光だっていいよう。淋しくたっていいよう。

(…眼を背けるくらいなら。)

霧をはらむ風のなかで、父母のよろこびを見た…ひたすらに音色をかなづる人をみた-ピアニスト、夜は…いつも、月の光。突っ慳貪に申しつけられる、神を恐れない民衆の無知が都市を築く。か細くて-か弱い正義が絶え間なく破滅へと向かい、外国人の仕草で、絵には口がない、と言っている。歴史と伝統を持って-常に使命と責任の鍵を手にする…監視塔で目を光らせている、この僕は、しかし自分の今現在いる場所が特定できない。

でも相応しくあってくれ、噴水の傍の花壇、一一さなり、美しきもの…ひらひらと土の割
れ目に吸い込まれていった…沈黙の時、愚かで無口な雨の仲間たち…。
レイン

[赤い舌を垂れ、青く切ない韻律のひびき一一湿気が、甲羅の中に蛇を沢山棲まわせる…]

水だ！ ああ、あの青臭い響き-塔に向かっているズボンの股。魂の底に泉のごとく湧きか
える、生命-本能…世間の批評家たちが本人の光の常軌を逸した考えを、正論と言わなければ
ならない理由…あなたには何も出来ないのに、欲しかった戦争-成功のためにたくさんの人間
を奴隷にする心理テクニックは許される。しかし途端一一この世界から切り離され、帰ろう
と思っても、決して帰りつくことは出来ない人の悲しさを見る。

その一瞬！…記憶喪失！になる…漂流物、くらげ！ 数字の消えた文字盤！一一静止した
蒼白な光。平和主義者-無抵抗主義者のだらけきった顔。相手のいない奴の顔。

気の遠くなるほど長いトンネルが横たわっている、演奏を前にしてざわめいている管弦楽
…着飾った人が見え始め、富裕層らしく、くっきりと、そして、満月。雲雀や夜啼鳥のよう

マアメイド
に美しいものを淡く想像してしまう踊り、波音が聞こえ、水を掻きわけて陸へのぼる人魚。
、、、、、、、、
ぴちゃぴちゃぴちゃ一一櫓や櫂の音。僕はまっしろな、エレベスト山脈のような月に、横
殴りの吹雪きを思う。子供時代に想像した抜いた海水-世界は平面で滝のように落ちていく海
さながらの絶望的な冷や汗-遭難者、繰返される踏破への憧れ。古典文学のように、人を安心
させてくれる…うすむらさきのかをり。だが、ふしぎな憐れみは禁物だ一一不遜。僕はひび
く靴音のする並木路で、輝きと、そして浄らかさに、洋燈のような生命の燃焼。
ランプ

「この白い息…一一」

僕は光をたっぷり吸いこんで、蒸発してゆく、そう、どんどん白くなる、月の光・・。

朝ドラの収録って苛酷で、スタジオに缶詰め、

朝九時スタートして深夜零時を超えることもよくあるんだって――

そしてそういう十五時間前後の収録が八か月間続く

歴代のヒロイン達の中には、

体調不良や睡眠時間が二時間だった人もいるって・・・

仕事はきつかった・・・もっとも楽しかったが、

と、定年を迎えたおじさんが一言言う・・・

ねえ、おじさん、

アローの不可能性定理って知ってます？

（しどろもどろさせるの、好きなわけじゃないけど・・・）

コンドルセのパラドックスの

意思決定ルールで起こりうることを数学的に証明したもの

まあつまり、A B Cの候補者がいて、

1 2 3という投票者がいる・・・これで、

公平にA B Cになるんだけど、二番目に好きなのは、

三番目には、となっていくと答えが変わるっていう法則

もちろん、それですべての答えが出るってわけじゃないので、

そこは僕も安心してゐるんだけど、

こういうのって、何だか子供みたいだなあ、と思うんですよね、

親の顔色を見て、口にそうとは言えないまま、

こうだなんて思う――さえない顔色…

子どもを自慢するおじさんの話を聞きながら…

ありとあらゆる自慢の影に隠れた、淋しさを感じ、

僕はいつか、目を伏せ――ていた…

白人女性にすごく憧れている男がいてさ、

幻想を壊すのはあれだったんだけど、

なんだか、彼の話の聞いていると白人＝美人なのに眉間に皺が寄って

何処でも格差はあるよって教えて、

そもそもそういうのって、黒人＝腹黒い、と言っていて、

人間としてどうなのかって思えたから、

その証拠として、色々思い当たるサイトを教えて…

まあ、彼を閉口させ――人間らしい公平さを取り戻させた

、、、、、、、、、、、、、、、、、、
女性は周囲を人工の池で囲まれている

ハリマンディル・サーヒブ…あの黄金寺院みたいに、

ほんの少し前の日本には幻想としてあった気がする

満足のいく答え――納得のいく答えではなかったけれど、

売れがわるければ品物は残る、みたいな発想や、

残っている-お嫁にいけないから価値が下がるという発想も

ひどいね・・・人の幸せを勝手に規定する社会のルール（が、）

男に七人の敵がいると――教え・・・

でも敵は、強くなるに従って、いつか僕の前から消え、

僕の敵は、本当に自分だけになった・・・

ねえ、安く売れば買うだろうっていうスーパーもあれば、

よい物を高く売るっていうブランドもあるよね・・・、

いや・・・食傷気味なのかも知れないけど、何だかね、

いまは色んなものが、まがい物で、そしてそれは値札-名札の

マジックにすぎず、本質はただ色んなものを、

重要な駒――たとえば購買者が知らない法則を利用して、

好き勝手に嘯いているだけなんじゃないかって・・・

そういえば、昨日、数年ぶりに服屋に入ったんだよ――

驚くよ、通勤電車でガタゴト揺られてそうな、

いかにも冴えないサラリーマン風のおじさんがさ、服を選んでもの、

男ってそんなことしちゃいけないという、威厳とかが吹き飛んで、

僕もカルチャーショック・・・いや、僕の閉鎖生活に

文化のレベルを！か・・・でも、なんかでかなあ、

明るく聞こえてくる流行の音楽にだって、

よい物とわるい物がある——いや、それ自体は悪くない、

ただ、商品をレジにした時、男や女が作られた笑顔を浮かべた

ロボットみたいに見えてきて、なんだかなあ、って・・・

常に見込みのない明るい話題を僕は僕の詩に感じながら、

多少の波風を立てても、その先どうするのかなんて言えない——

でも不安かって言うと、そうじゃない・・・ただ、ビジネスも、

出版の在り方も、賞制度も、そこにおける詩人たちも、

深刻さがわかっていないのに、深刻だって言っていて・・・

もっともらしい顔で無理だって言う人は誠実だ

でも、答えないっていう選択肢がある限り、

この最悪の状況は絶えず、繰返されることになるだろう——

そして、臆病な彼等の保守に潜んだ

生乾きの傷口を僕はえぐりながら、

執拗に、病的に——悲鳴をあげさせながら、僕の顔にあたる血は、

他人からたわ言を消させ、扱いを直させ、

しかし僕の状況はどんどん酷くなる…もう手遅れなんだ、駄目なんだ、

これはきっと癌なんだよ、そしてもう取り返しのつかない

病なんだよ…そしてエイズなんだよ、

ただセクスしたいだけの本能なんだよ、

お前等は獣なんだよ、動物なんだよ——なんて、ね…

ねえ、朝ドラの胡散臭すぎるほどの明るい笑顔を思い出しながら、

会社に行くと、その中には、もう仕事したくない、

週末で疲れたって顔をしてる人もいる…僕も無理して笑ったり、

真剣な顔をして仕事してたらすぐに忘れるけど…

たまに、世の中のすべてがことごとく自分を迫害するもののように思え、

時は金なりとはもっともな言だし——その時間に寿命はあるんだけど…

たまに人って死なないんじゃないか…

要求を拒絶できるのは君らが死なないからなんじゃないか、と思える

僕はいつ死んでもいいように毎日準備してる——明日死んでも、

後悔しないように、努力して…不幸な詩人の顔をせず、僕は僕の役目を引き受け、

人生と闘う——そしてそれは客観的にカッコよい言葉の瞬間だよ、

もちろん僕は、そんなイメージの嘘を知ってるから、

そうじゃないと心の底から言っているけど、誰かはそれを若さと言って…

なんて、思ってるんだけど...

でも結局自分でしか越えられない壁がある…から――

そしてそれを誰かがどうすることも出来ないから…

そして僕は雨の中を、ずぶ濡れになって、世界中を笑いながら、

チャップリンのようにくるくる傘を回して、馬鹿者どもめが、

こんなこと大したことない！…世界なんかこの程度のもの！って――

自分の中の現実を吹き飛ばしてたことを思い出した

あれは二十二歳の秋だった気がする…

きっと――雨はまだ降り続けている、孤独な顔をした君よ…

たくさんの傷が癒えるよ、雨は…いつか止む――

膨大な量の燈籠の管理や火災防止、後片付けは寺院にとって大きな負担だ。家屋火災-森林火災…煙草の不始末——そして海岸で見る若者たちの打ち上げ花火-騒音被害。

「…うん？」

（そうだ、僕等はくずれたおれた家を見ていた——）

けたたましい笑い声-暴威をほしいままにし…可燃物、酸素供給源、点火源。

——自分たちさえよけりゃいい、という考え方が短絡的だ、自分たちは働いた…そうだ、保守的な老人たちには、若者を小馬鹿にする権利がある。けれど、もとよりいろいろの原因があった。直接利害を感じずる人々の側で、不満に感ずる人びとの声がある。

（今にもポップコーンのように、我が儘に自由自在にフライパンの上で弾けようとしていくことなど。まな板の上の魚のように、風に心を奪われていることなど……。）

（そうだ、僕等は冷静なれ、沈着なれと言ひ聞かせてるばかりで、——）

恐怖の本能-大火の前で、狼狽を目にした。若さ…そうかも知れない、気がつくとも僕等は埋めがたいギャップを感じて、歳を取り、どんどん保守的になっていくのかも知れない。僕は電車の揺れの中だって眠れる-神経質じゃない。別にそんなのどうだっていいことじゃないか、でも、そうじゃない…我慢ができない-したくない。

その時点で、たったこれだけで、存在が全く別の顔を見せ始める。溝が産まれ、距離が生まれ、そして深い谷に、橋を架けねば渡られぬ場所に、遠く遙か、そう、何処までも胡散臭く。何処までがエゴで、米、食物の類を買い漁る大人！

小脇にかかえて走り去る…預金通帳ほか——保険が大切だ。生きてゆくための保証は必要

だ。でも権利って何を主張しているのか、時々僕には本当にわからなくなる。常識と言いな
がら、事件の摘発は関係者-また警察に。

（そうだ、白から、少し灰色に汚れ老朽していく脂汚れた壁の建物と同じように、時間が来
れば自分の老醜もやってくる。上辺だけ真っ白いハリボテ…）

目を大きく瞠る大衆達…こんにちは、地獄の蓋が開くぜ。目覚めてしまえ、その自我よ。
さあ始めようぜ魔法のランプをこすって、アラビアンナイトを始めよう。

（空は眩しいくらいに輝いている、白いページみたいに発光している雲の塊、入道雲を思
わせる、大きな雲の塊。）

（そうだ、僕等は、不意に何処かへ行きたい、逃げ出したい、飛び出してしまいたい衝動
を持った旅人だ…）

さあて始めようぜ、旅人、ここに一枚の紙切れがある。

魔術に引掛ってしまった自分を恥じるか-それとも人生の裏側を見るか。さても、どんな酔
狂から公表されるべきだと望んだのかは分からないのに、政治家が、突然口が軽くなってし
まう。隠蔽されていた-額に浮んだ青筋…焰を吐き出しても不可抗力だった、ああそれとも、
もう時効だろうと彼は言うの？

でも、不思議だ、それを書きたてるマスコミも変…報道の義務って何だ。情報って何だ。
社会不安を煽り、混乱のるつぼに陥れることか？…

再び日の目を見せる気になった理由に、政治的理由はないのか…嫌疑、顔を背けている人
はいい-知らないふりをしている人はいい。そうだ、情報が誠実ではないと知った瞬間、知る
だけでは何にもならないのだ。情報の格差は、そのバリューは？　でも、その瞬間、僕はあ

る嘘に気付く。人は嘘をつく生き物だ。そして人は-本音と建前の生き物――だ・・

、、、、、、

僕等はまるで、間違っただけを一足受け取ってしまう――。

極論だけれど、僕は津波で死のうが、地震で死のうが、そんなのには何の価値もない、と思う。住宅難、ホームレス、停電、渋滞を解消できないのに車は売られ続ける交通難・・

企業は車を売りたいくて、人は車を買ってレジャーへ出掛ける-でも、僕等は電車でも、バスでもいい、と思ってる・・けれど、購買者の気持ちは統計-マーケティングで処理される。あなたの年齢はと聞かれ、ある特定者だと断定され・・情報となる――。

（そうだ、・・咽喉笛に、何ものかの咬みついた歯の痕）

クロロフォルムのおいがするぜ、東大寺-大仏を見る。天平一五年、サビアン占いだと言われた数字だ。天然痘の猛威によって、仏教に帰依した聖武天皇-盧舎那大仏造立の勅願を發布し、国全体を守る寺として・・でも、いまじゃ、そんな気配どこにもなく、笑い声が聞こえそうな観光スポットだ。何が違う？――危機感が違う・・その時の常識と違う・・・

（たまに僕は聖武天皇と天武天皇がごっちゃになることがある・・ただ、前者はよい人で、後者はどちらかというと悪い人だ。）

（そうだ、・・僕等は妖艶なものに複雑な複雑すぎる頭痛を感じてる・・）

「もっと分かり易く言うと・・」

と僕は中原さんに喋っていた。

「イエスキリストと・・現実の弱い彼そのもの」

――拝啓 イエスキリスト様・・、僕はあなたを救世主だとは思わない。百歩譲って神から遣わされたのを信じて、物語りは創作だし、靈感を装っても、新興宗教としての立場だった

キリスト教だったってことを忘れちゃいけない…時代は変わっても、やってることは同じさ。

。洗練？-まさか、放火や漏電さ。

そして、あなたが偶像化された瞬間から、あなたの犠牲愛-すべての人々の罪を許したのも嘘だ。聖書という考え方もお門違いだ。本当の聖書は…何一つ書かれていない——書くべきことなど一つもない、何故ならすべてを表すために一つとして文字は使えないのだ、ということ

を僕はもう知っているからだ。伝達に聖書はない。

だから彼は神そのものを騙る有害なものになった、と思う-しかし本質は彼の目の向こう側に神がいて、それは光でも、声でもないはずだ。

では、彼のいう神とは何か…心の中に見えた幻想だ-王国は彼を守るための補強妄想だ。でも、差別化が必要だった。常識を逸脱するには、いつだって色んなカラクリが必要になる。

でも、僕は信じてる。彼が多くの人達の心を射止めることができた、優しい人-でも厳しい考え方の持ち主、ということだけは…。

ああでも、ある特定の人々には、彼が救世主だったのだろう。誰でも自分が特別であると思いたくない理由がある。責任-使命…誇大妄想へと繋がってゆくから。

ふっと、気になってリー・マヤに質問して見る。

「リー・マヤ…お前達にも神はいるのか？」

「いるよ。」とリー・マヤ。

「います。」とジョアンヌ。

「——どんな奴だ？」

「知らない…誰も見たことがないから」

＊

…おそらく、原始宗教のアミニズムなのだろう、と思う。ああ、身体中の血管に波が走る
-今度は初めよりも強く力が籠っていく。力とは火であり水だ。陰陽だ…呼吸だ。盲目の執着
である生存意識をもって、偽りを暴く。

たとえば、死者との交信を求めるアメリカ先住民の宗教的な踊り…宗教的な崇拜において
使われるイメージを僕は破壊する。社会の壁-思想の壁の背後にある環状星雲を望遠鏡で覗く
。ああ、距離-東雲を動きはじめる霞の上に漾っている、靈感。宗教的なエクスタシーの状態
。ワイン-人びとが狂い出すのがわかるような気がする…気がする――。

性的関係-その命令…パラドックスに充ちた神様をより卑しくする新興宗教。

ああ、それでも中へ聞えないんだね、濡れてるんだ-潮ふいちゃってるんだ。あはは…勃
起しちゃって、黒目がちな瞳-小動物の瞳を一杯にみひらいて、瞬きもしないマインドコント
ロール-本物の献体たち。

まるで両親と喧嘩して、北国へでも、駆落ちするような騒ぎ…でも彼等には応えがない。
だから心の中に-内省という集団無意識の力を使って、その真実を知ろうとする。でも神秘体
験ができない。マリファナがない。げっそりとしながら、修行をしても幻に見るのは女
の裸ばかり。ああ、悲しみは消えないばかりか、よりみじめで、卑しくなる。しかも前より
一層自分の胸へ、重苦しい空気を拵げ出す――まるでノイローゼ。半ば埋もれた濠。

暗冥なる死の淵に、何の意見も持っていない奴隷たち。知り合い-友人や友達の間を築い

た後にゴールインする怪しげな宗教。エロチックの源でもあるみたいに鞭を打つ、人の心。

でも信仰をなくし、人種、年齢-モラルを重要視する意見に時々賛成する。宗教の間で統一を促進することに関心を持つ人がいるように、その不調和の中で一致するものを求め、あらゆるものを作りかえることを僕は技術だと思うから…。

相次いで沈淪するもの-その澱は、極彩色…。

権利を殺さんとすれば、この国を去りたいと思う悲しみが君を襲う――。

淵源するところ、人皆、平和や平等-そして調和を求めているのに…茨の中に彷徨った夜の翅を押し広げて-孔雀…闇に咲いた枝垂れ桜。鶏の鳴き声を聞いたように思った、風の音が、
ときいろ
無気味に思えるほどに水紅色と薄紫、浅黄と紺青。小さい木のパネルに描かれた伝統的宗教油絵と…屋根付きの廊下がついている中庭から、隔離される別室…

憂鬱の底へ、沈んでしまう夜空…使命とは何か、責任とは何か――神は牛肉を食べないように命じ、豚肉は汚れたものと見なす。到る所、陽炎の屯-人間的に普遍的な事柄の精神的な熟視もないまま、肉を断つ-ベジタリアンになる不思議さ…遠く望んで美人のいる如く。

宗教と科学の闘い…ダーヴィンやメンデルも、モーセやキリストを名乗るべきだ。しかし、そこで停滞が生まれる。人びとはそれをひどく恐れて、保守的な態度が恐慌状態-パニックに打って出る牲を供えて祓う…でも草には露がきらめき花はみな力いっぱい咲いているのに、僕等は皮膚を破られて痛々しく貧血質の血を流した…畸形の眼しかない。
、、、
だから、信仰を異にするものとの結婚に反対する。それは究極の現実と神秘的な交わりであり、神と人間との尊敬をもとに生まれた深い羈絆であるはずなのに…。

理性のある言葉でさえ、彼等は否定する、証明は宗教書であり、真は彼等を煽動する側で

あり、身近に傍にいる人間だ。だが、心の奥底でそれを疑問視したことがない、宗教の最大の悪にして、人の業の一つでもある、現実直視を拒むこと…。

そういう誤った考え方-偏狭さではなく、友愛の感情がなければ臭いものに蓋をし、自分勝手な妄想を事実としているだけだ。音楽作品も芸術も神を騙るおぞましいものとなろう。

そうだ、たとえ現実的障害があろうとも、違う血を入れ、否定するしかないどんな論理をも受け止め、常に前に進む本能-そこにおける生物の高揚に、輪廻や宿命が絡まっていることを認識し、そこで肩を揺すぶり、その響き、震えさせなくてはいけない。人をどんどん難しく悩ませる、内側からの感情-葛藤…しかしそれ故に刹那ののち-より高次元へと誘う。

星からくる微かなあかりに、植物を眺める瞬間はどんな本の装幀よりも美しい—そうだ、孔雀よ、華やかな舞台よ、君は知らないか、慣習とは宗教なのである。何故なら人をスポイルする-精神的-生活的にも人から自由な感情を奪う。そして自然な考えを、また自然のものの中へと逃げ出すことができない籠の構造。でも僕は神社が好きだ、神道に明確な教義が存在しないのが好きだ。そして苦しい境地から逃れるために救いを求めて宗教の門戸をくぐるのではなく、真実や知恵を求めて発展的・建築的な考え方を身につける僕にとっての無宗教が好きだ。何処にも染まらないから、もっと正しいこと、自由なこと、そこにおける道徳を蔑ろにしたり、我が身の関係で誰かを傷つけることがない広い心が好きだ。

パチンコ教、将棋狂い…それだって宗教の関係だと読み説ける、パワーバランスだって、きっと宗教と同じだ。僕等は最初から宗教というイメージを固め過ぎている。

ねむりめ

眠眼の、延び欠伸などでもし、縦しいままに忽ち逝きて消える、人びと…。

人びとは日進月歩-朝令暮改。政治的宗教的に偏りのみられる教育-宗教上的人格権という

権利-そして精神的活動・・・だが、僕はいつも疑問なのだ。宗教書・・・その宗教が信奉する神や宗派の創始者に由来すると主張するのが。宗教哲学に必要なのは愛と真であって、心霊上の事実が捻じ曲げられている、特定の宗教・宗派に個人的に関わる人たちが。宗教意識が希薄であり、事実上の無宗教に近い人々を差別するのが。宗教に対する帰属意識は薄く、実際には宗教儀礼に参加しているにもかかわらず自分のことを無宗教と考える日本人そのものが。墓参り・・・僕は好きだぜ、タオルでピカピカに磨いて線香つけて、般若心経とか、祝詞を唱えるのが。目の前に見えるか見えないかもわからない人びとより、よっぽど信用できる。

愁い嘯く顔の色は真っ青で、目も血走り、伸びた髪が額に被ってる。勢が尽きて疲れ果てたものらしくもある。が、狭量を愍れみ、為さんとする善は多く偽善たるを免かれない。はだしで爪も黒く長い、獣のような印象――昨日までのことも、もう夢のような、存在感。でもいる-ただ見えない・・それが神様、祖先崇拝-神聖な儀礼は同じものだ。

人の心を固くするのではない、狐よ、百舌鳥よ——蜥蜴のような小石…よ…。

骨の折れる徹夜作業のあとに、ふっと神を想う時、自分の心の中にその答えがあるんじゃないか、と思うのに似てる。ヨガに禅もいい。たまには魔法もいい。永遠の宴に召されよう、オリュンポスの林檎で鳳仙花生まれる。

ところで、僕等はいま興福寺に来ている-古都奈良の文化財の一部として世界遺産に登録されている。藤原鎌足・五重塔・絶えずチクチク僕の心を刺す、人差し指が熱心に動いている。

でも、執拗な腹の虫を断然押えつけてしまうつもりで、たびたび起こる火災――詳しく調べたわけではないけど、そういう話だ。

静かな夏の日、北風を待っている…。

行かなかったんだけど、春日大社を見ていると、出雲大社の外宮のことを思い出す…もう基礎工事も済んで、新しい出雲です、という変な妄想も僕はする。もちろん、春日神社は立派な神社だ。樹の間から眺望されるなだらかな山裾、と僕は思う。

「京都は狐で、尻っ尾の長さ。大阪は――たとえるなら、カバの虫歯」

勝利へと向かって

人間を支えている

塀の向こう側に

とりで

この要塞がある

更けてゆく 俺の青い夜

…この粗い空気の底で 凄絶な声！

愛というメンタリティーの痕跡を何とか消すために

しばみ、分解し始めている――

まるでそうしていれば

くらげにでもなれるように

ああ 遊いでゆこうとしていた 俺はモーター

、、、、、、

研究と同時に しんから普及が必要だ

涙では被害者意識に堕ちる（火を吐くな！）

やがてお前も拳銃の引き金を引く

そこは時代錯誤！ 抹香くさいポルノそのもの

爆裂のきらめきのなかで虚無の被膜を溶化させるな

スピーカーのヴォリュームを上げてしまう

…空を汚すのは誰？

ああ かかずらうな 国境線

棄ててしまえ

神の名など

人間の愛など――

道にあふれた鏑、空漠たる遊戯

ひゅうひゅうと穴が開いていた

冷たい表情に枢という暗闇が横たわっていた

憂い迫るコウモリを主食としながら

腐ってゆく 兇暴なナルシスの樹よ

おお 哀切にみちた 俺に砂埃を

・・・オルゲールの風よ！

とさか

鶏冠のようにそそり立つ 消ぬべきものの影

魂の秋 静けさが秋 仰向けに寝転ぶとビー玉が

滑り始める 急傾斜に――冬

まだ 一瞬間の形状であったけれど

悲しいだけのあなたが

衛星放送のように 漂っているのは、ひと時

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、
さもないならばあなたが地獄へ落ちろ！

・・・あらゆる職業、あらゆる階級に悶絶した

正体不明の空白に知らぬ間に季節は流れ、

時間の経過がもう殆ど意味をなさなくなっていた！

ーほざくな 馬や 戦車ども

ーわめきやがるな ラッパども

ー靴ども タップダンス・コサックダンス

見ろ！ 自然は泣いている

赤い舌から割れる指が見える

砂漠の蛇は

物質と精神のバランスを考慮しない！

神よ――利益に、

人類にかかるすべての夢は

あるのだろうか？

――ああ 気味のわるい

気味の悪い町で・・記号、権力の横暴

・・・暗い谷間のタカ派ファシスト達！

そうして灯に滲んだ 霧

うつしだされた 運命のなみなみ

ひれふ

に われは跪付す

この極彩色のおどろおどろしい模様に

人間を支えている

塀の向こう側に

とりで

この要塞がある

たちあらわれてはきえてゆくと知りながら

はえ

幽玄の反映よ…蠅 よ！

過去・現在・未来という順序にうまくはいかない

すべて螺旋のようにただつながっている

…曖昧な 淋しい町よ

ああ 絨毯のように強く匂う星よ

わたしはすこし如何かしている

ああ！ 神の声がきこえる！…

そして素晴らしい

夜明けがきた

挺身せよ 文明の呪い

かく詩文のおぼつかない手つきで

かすかなる移り香を 獣めく残り香を

執念、躊躇…シルクロードに夜明けを

地球と太陽と、星と宇宙と！

ーールネッサンスの夕べを

幕が下りるまで 絶え間ない拍手を

…のびやかな歌よ

そよ風となれ

この朝を乗り切れるだろうか

めざめにみち搔き鳴らせば 時の出入口を彷徨よい

音の階段を昇り「音の波形」・・「周波数」

・・・「音の振幅」

弓を引っ張り 抜き身の刀

まぼろしとて区別のつかぬ

ああ 腑抜けのわたし自身

陽射しによって見え始めた

窮極の炭坑、その山には

いまま煤けた

われわれの思い出がある

この奥底に、この混乱に蒸された

無の謎はいとも容易く哲学を孕んだ

オオケストラは 銃声・・

時計の音がなくなっても熱情のめまいを

遙か遠くにある・・夢の城へと――

眼はもう閉じたまま開かぬ

こころの中で 冬の地のひび割るるを見た

そいつは何度も俺が闘ってきた宿敵、好敵手

ああ おまえの言うように

ここは誘惑にみちた 地獄だと思う

零コンマ数秒のオペラ

その一音一音を

一節毎を 甦らせる

調子っ外れの胸の動悸が みしりみしりと

跳ねさせ 駆け出させ 舞踏らせる

この 十の翼をうしなって

この 百の扉をてにいれて

女が口紅を塗るように

男が鬚を剃るように 詩人が

言葉の重さや軽さを扱って とうとう開け放した窓から

小庭へ…。迷いゆく路上の風をながめよ 水底に石

がある…。ピアノのカバーを優しくそっと掛け心よ心！

逃げ去ってしまう 心臓

愛情をなくす歪んだそのリズムまだ泥を落とせずに

いる…。まだ不信や不条理を濯げずに――

それでも本性はビルの一室を少しでも

高く！…高く！（しようとしていた、）――

い、と主張するように。遠回しに自分のことを馬鹿と呼び、誰にも愛されずに、ただ自分を傷つけている——とろとろと、融けてゆきそうな、余韻の中・・

つくづく淋しい風を見た、と思う。車の軋った痕に激しく日光が反射し、それが疲れた眼に見えるような…装っている無意味な存在の主張を隠れ蓑にして。ねそべっている石榴-唇は…波打ちぎわを――振返るようだ…。

彼女と過ごした夕暮れ、そこには消えることのない薄明かりがある、眼を細くして、恍々と
とりと考える、穴のあいた自分の胸を思いやる程に月の出るのが遅いので宵のうちの暗い時
間・薄明かりで点灯する僕の魂は永遠の夜明けを・・・求めている――。

でも恩知らずの人々の為に…僕は確実に――死んでゆく…俄かに色めいた改札口も、酔っ払いのいるプラットフォームさながらだ。厭味のある、ニヤケた顔。反抗的な瞳。僕は全員を殺して妥当だと大真面目に考えていた…し、何を今更――何お前人間ぶってやがる、てめえは何、常識をぶっこいてやがる。ありがとうって何だ、すみませんって何だ…心が擦れている時、熱帯性のじめじめした植物の土壌をよく考えた。

だから僕は彼女にわざと冷たくすることもあった。むしろ、何処かへ消えろ、と言わないだけで、幾度となく、そんなジェスチャーやポーズをとったはずだ。土足でずかずかに入り込んでくるなよ、いいから、てめえはてめえの人生だけ考えてろよ、ほっとけよ、邪魔だよ、鬱陶しいよ…傘をさす彼女が、傷ついていなかったら嘘だ。そして一瞬、馴れ馴れしさが消え失せ、軽い失望の影を心にかすめ――わけもなく、君は泣きたかったんじゃないか、と思う。でも黙って、拗ねて、まわれ右すりゃ泥深い沼の魚だ。言ったらいい、なあ、お前も俺のように好き勝手なことを言ったらいい。大人が信じられないんだ。社会も、そこにいる

人間も、どうしても好きになれないんだ。そして俺はそういうものと上手く付き合ってゆこうとする自分に吐き気がするんだ。だから僕は君が嫌なんだ、自分自身の限界を知ろうともせず、欲望を剥き出しにもせず、丸裸になろうともせず、ただ・・・充実感のもたらす甘い汁が
啜れるなら――

おかえりなさい。誰も言ってくれない。

吐き気を催すような絶望感・・・冷たい床に頼れてしまいたいくらいの尿意と、孤独と・疲労。
ガタガタと身体が震えるのは、泣き声を我慢しているからだ。惨めに肩を竦め、愛おしい者に、後悔の渦を形成している――信用、罵り、俺の中に潜んでいる暗い混沌の感情。
、、、
ただいま。だから言えないでいる言葉・・・。

でも嘘をつくのは嫌だ、自分はいつだってそういうものを信じていたし、できるものならば信じていたかった。だが世の中がそうさせない。まことしやかなシステムの企みというのは、その本心をあまりにも遠ざけてしまう。

でも、誰にも人の心なんて分からない。羞恥心を捨ててまで、つぶらな弾力のあるその瞳が夕暮れの幸せな感情なら、僕のあの凍てついた眼は嵐の前触れだったかも知れない。僕は、心を浮き立てるような笛や、喇叭の音を嫌った。自分の秘密でも言いふらされたような気持ちになるから、明るい曲は嫌いだった――でも、背中を向けて、じゃあ、と立去ってゆく彼女を見ながら、無性に手を伸ばしたい気持ちがあった。心の何処かでは誰かが僕を見透かしてくれるような気がして、何を子供っぽい、それでいてそういう人間がいないことを悲しんでいた。でも、知っていた・・・かぎりなく愛しているというのが嘘だと――人の心はなまけていて、そうだ、あの空にひそむたくさんの矛盾のように自ら感情を知ることを恐れていた

。だから時々彼女には感情がないんじゃないか、と思うことがあった。悔しいが、僕の地獄のような季節は彼女を不機嫌にし、そして僕の眉間の皺を寄せた。

なんたる女…人の気も知らずに一元気出せよ、と言う…。

けれど、心の何処かで良心の呵責を味わうのは、君がいつも僕のことを想ってくれていたことを知っていたからだ。すごい精神力だよね…甘えていた、我がままだった。でも、そういう時に、僕は自分が絶対にしない態度を身につけたんだ—わかるだろ、僕は少し正直すぎた。嫌なものを見過ぎた…そして少し…敏感すぎた。

、、、、

でもゆかり、細い月が出て、その夜は強い風が吹いて…ベンチの上で、僕はひとりで、どうしようもない社会について考えていたんだよ。夢を見ているだけでは言葉は離れてゆく、幸せも離れてゆく。お前は口を噤んでしまうけど、老人の懶い眦なじりなんて、博物館にしなきゃいけないのさ。空き缶のようにひしゃげちゃいけない、そうだろ、いちいち何かに傷付いちゃいけない。だから俺はもっと生きてるっていう…痛みが欲しい—。

雨に打たれながら、僕の心は縮み、誰も受け入れられないほどに拒絶し、人生に凍えていた。でもいまならわかる…ぱちぱちと瞬いて、ゆらゆらと高熱の中で揺られている鍵穴、僕の人生のDoor が何処にあったのかを…

地獄の蓋

過去をどうして知っていると言えるの？

わたしは靴を編んでいる

雪とみまごうほどのしろい手をして

わたしはさすらいの船をはしらす

いとおしむ青草が手を振っているわ

瞼がたるんでしまっただけさ

ねえ星影はどうして消え入りそうなの？

小屋をこしらえなかったからさ

ああ！ 蜜蜂がとんでいるわ

濡れた落ち葉をひろっているのさ

なんて花のかぐわしいかおりなのかしら

おもむろななげきのかなしみさね

ねえ蠟燭をはこびいれましょう

ガソリンはないけどいいのかい？

蟲の音にうすもやがひろがっていくようだわ

不断の別離にカーテンを閉めよう

もう波の音はきこえてはこないわ

きみが炉辺にいるからさ

ねえそっと愛しているとささやいて――

どんな留め金がいるというんだい？

日ごと夜ごとわたしたちは悲しい歌をつくった

ことごとくほの暗い砂にしずむように

それはだれかを照らすために作ったのではない

しいては夢の上に道をつくるため

窓の向こうには真珠のような燈台がめぐり

人っ子ひとりいない静かな夜に異彩をはなつ

わたしたちは鼠色の墨色の焼け跡のような空の下

つめたい風に雨がまじるのをきいていた

茂りの時がくれば枯れる時もくるだろうと思い

墓をみながら生きようという願望にふれていた

例外なく辺鄙な田舎はあやしき心臓の音がきこえた

挨拶する者とておらず

わたしとて仲良くするつもりなどこれぽっちもない

だが 情熱の燃えるところに終焉りはない

わたしは鍬をもち 花々に水をやり

雨が降ればわたしたちは読書に耽ったりした

たよりないわななきのような栄光ある白鳥が

朝しずかにやってくるとき

ここには新聞すらもないのだと微笑むことから始めた

永い年月のあきらめを経てきたからだ――

やさしい歌にわたしの血が騒ぐことはない

悟るがために龍のまもれる秘宝をうばう冒険譚にも

また裸で行進する新しい時代のムードも

なにより ふん それから というニュース速報も

わたしたちには蝕み減らされたものが

動く術なきものが多いのだと気づきはじめていた

はるばるやってきた緑のくらい風に乗って

あわれに乾いた生命の不毛を思い出す

ここには自然信仰がみちている

ゆえにすべてのものに魂というのが宿っていた

無感覚にぶよぶよ根を張った都会で

雨宿りするような追憶の声はきこえない

彼女はあいかわらずおしゃべりのままだし

九官鳥のものまねと南の島への憧憬はきえやしない

ねえ　きれいな嘘のつき方っていいものね……

だって　無気力にひびきおえるだけなもの

わたしたちはこぼれおちた宝石の砂浜をあるく

しがみついていた手はどんどん離れてゆく

瓦礫だらけの思い出とひと握りのよい記憶！

死にたいほどのよい天気

From:神崎竜也

Subject:○×△□@○×.△□.jp

Date: 20××年 ×月 ×日 ××:××:×× JST

To: 香山ゆかり <○×△□@○×.△□.jp>

ゆかり、学校終わったら、デートしよう。

戻ったら、とりあえず、ラーメン屋行こう。

海に行こう。

中原さん、ジョアンヌ、リー・マヤ、

全部マスターに預けて、デートに行こう。

もう、やめた。疲れた。くだらない。

真面目に考えて俺は損をした。

ゆかりの魂を高めようとか、お前と別れてもいいとか、

それなんか、違う気がしてきた。うん。

ゆかり、悩んでる時は、行動するんだ。

行動といっても、傍にいてだけでいいんだ。

そして俺はいつも間違っただけばかりする。

人生って長いんだし、悩むこともあるよ。

俺たち、まだ若いんだし、成長しなくちゃいけないけど、

そこで、もう一度、お互いの姿を見ることが大切だよ。

結局、ゆかりの悩みって、俺が目の前にいないことで、

不安になってるんじゃないかな、という気がする。

まあ、いいじゃないか、とことんまで、悩んでも。

神崎竜也のメール その2

From:神崎竜也

Subject:○×△□@○×.△□.jp

Date: 20××年 ×月 ×日 ××:××:×× JST

To: 香山ゆかり <○×△□@○×.△□.jp>

ゆかり、早くも日が暮れ、長い長い夕闇が近づいてきた。

僕はたまに、そんな時に流れ星を見る。

人は裏切る生き物だし、嘘をつく生き物だ。

たそがれのメランコリーに、かすかに息づくロマンチック。

・・・揺れる。

声の中で僕は死んでしまう。

雑音のなかで、バベルの塔の周囲を歩く人々を見下ろす。

それなのに、自分はなんてもろい船で、

・・・夜の航海を続けているんだろう、と思う。

椅子に腰を落ちつけて、真剣な目をしていると、

リー・マヤが言う。

「今日はまあまあ・・・楽しかった」

・・・可愛い。

誰かに利用されたり、信じては裏切られたり、

孤独にさらに追い打ちをかけるようなことがあったり――

人は弱い生き物だよ。そして生きてるだけで、罪深い過ちを、

何度も繰り返すようだ。

たとえば、木々に吊るされたハンモックのうえで、

ホームレスが眠ってるって想像してごらんよ？

人なんてその程度のものさ。

でも夕暮れの中で、さまざまな幻が交錯して、恋に落ちる、

すう、とした、眩暈、そうだ、死だ、通夜にでも行くみたいな

重い足取りで、昔の彼女に、君は天使だったとでも、

嘯きたい気分だ。

ああ君は違うよ、違うよと。

ゆかり、ミルクかスープみたいな、

窓ガラスにじっと顔を近づけて、夕陽に向かって肯いている、

中原さん…ああ、そしてゆかりが思うところの、性悪女が、

（冗談だよ、もちろん。）

何故か、ゆかりの悲しみ、みたいに見える不思議。

…揺れる。

希美衣さんと接していても、

ゆかりだったら、と思う、あの揺れる感情に、

ふてくされたように耳をぺたんと閉じる、

クリスティーの顔を想う、不思議。

（わかりにくいけど、冗談だよ、もちろん。）

地面を規則正しく打つ黄昏の雨の間。

ふしあわせな勝利者。

「すう…うう——くう…うう」

…ジョアンヌ。

他人-あなたという意識を通して、

可能性を拡大することが出来る瞬間、

ムービースターたちの高層マンションの影…だー。

幸せという夢が、幻想だと知った後でも、

人々の幻想は残る。

それが現代の神話といえるものだろう。

でも舞台を離れれば、人は誰でも、ただの人だ。

僕は僕だし、君は君だ。

ゆっくりと、前に進んで欲しいよ。

そしていつか、ちゃんと信じてほしいと思う。

よく思うよ、人は結局、動物でしかない。

哲学も政治も無用な、動物学を始めよう。

ワンワン、にゃあにゃあ、コンコン、げほお、げほお、

自然に帰れ！

やめよう。僕はたまに大きな間違いをする。

いま僕は、すごく肝心なことを言おうとしてる。

…それはつまり、テストには出ないような。

ゆかり、疑い深いのは、昔の僕だよ。

気がとがめて赤面したり、泣いたりするとしたら、

たぶん、それは感情が追いついていないだけなんだ。

・・・あの頃の僕みたいに。

でも、微笑は本当の感情を隠すものじゃない。

怒りを露わにするのは、人間としての悪じゃない。

そうだろーそうさ・・

・・・感情という液に漬け込まれてる染色の気分だ。

ねえ、彼女の長い黒髪が背中にかかっている、

蛇のように恐怖で、妖艶で・・けれど、黒を忌み嫌う感情で。

でも黒も色彩の一つにすぎないし、どちらかと言えば、

いまの状態は、白、かな、と思う。

そしてこんなことを言う、僕に、

ゆかりが、あなたってひどい人だ、最低だ、最悪だ、

ああそして僕の嫌いな、キモい、などと、言う。

そして僕は情緒を介さない女め、などと言い

「いいもん、ぼく、ちょっとクリスティーのところに行く」

などと、ゲンジツトーヒーし。

ああ、人間なんて、馬鹿でどうしようもない生き物だよ。

でも、馬鹿だから好きだよ。馬鹿じゃなかったら、

人なんて絶対に好きにならない。

魔法だって信じない。夜の妄想だってしない。

はやくロボットになりたい。心臓の代わりに、

時計を入れたい。はやく、タイムマシンを作って、

ありえないものを全部、訂正してしまいたい。

…でも、揺れているのって水の波紋。

そのうち、きっと、雨が心の波打ちぎわを縫って、

届かない空を映し出す。

she was the classic maiden in distress

クスクス…彼女を叱れるなんて、思ったことがなかったな。

電車の座席に凭れかかりながら、僕はこんな時、何か幸せなことがある時、僕はいつも彼女の俯向いた表情を思い出すのだ。夕暮れの中で、本当はすごく淋しいんだけど…でもその理由を、何故か僕は聞けなくて――こわ…くて、彼女をその夕暮れの檻の中へひとりきりにした。胸が噓みたいに震えて…鳥肌が立った。これが都会生活の傷だ、いわば、文明の孤独なんだよ、と思った。教会で聖母マリア像を見上げている、あのえもしれない恍惚の表情、子を見る優しい眼を僕は彼女から感じた。

女ってなんなんだろう、とその時、深く考えた――ストレスに悩む急速なテンポ。髪を解いたような髪形をした、あのショートヘアとミディアムの女の子。一度ボブにしてみせたこともあるんだぜ、知らないだろう…そうだ、僕はいつも君のことを知らない…。

でも、夕暮れになると、時々あの子が僕の前に現われて、僕の胸を掻き乱すんだ。強い目で僕を睨むこともある。そう――だ、あの瞬間、僕も同じ目をしてたんだよ。そして、語りきれない何かの気配を感じて、すうっと、胸の奥で、すてきな女の子-気まぐれな女の子のイメージを重ねていたんだよ。

ゆかり、あの頃の僕はね…泣きそうなくらい、君と別のことを考えていたんだよ。そして、そういうのが、どれくらい君の自尊心を傷つけたかってことも、いまの僕にはよくわかるんだ。彼女は僕なんかいなくてもいい-だって、彼女は美人だし、人当たりがいいし、たぶん、僕がこの世界で数少ない信じられることのひとつとして、彼女は、すごく素敵な性格をしている。男に夢を見させてくれる眼差し。男が、跪いて愛を乞うタイプの女性――

、、、

ゆかり、いまだって別にそんなに変わらない。多分、あれが君の本質なんだ。あれが、君

が初めて僕に見せた女性としての君だったんだ。長い間…気付かなかったけれど、僕はてっきり君があんな夕暮れを楽しんでいるのかと思っていただけ、そうじゃない、不幸だと、何でこんな所にわたしは一人にいるのか、と嘆いていた…んだ…。

「彼女は魅力的だ…」

僕は、ゆかりの本音に長い間、気付かなかったような男だから…違う女を好きになろうとしたり、またすぐ馬鹿だなと気付いて、理想を夢見たり——情熱に火を点して、悲しい人生でいつ死んでもよいような生き方を始めるんだ…人は一人で生きていかなければならないし、何を今更、と彼女だって言うと思う。そうだよ、なんでそんなことに僕等は、長い間、気付かずにいて、お互いがどれくらいちゃんと繋がっているかということに、気付くまで、違う道を歩かなければならなかった。秀一や、マスターもいたし、もちろんゆかりだって、いたぜ。希美衣さんもいたし…でも、長い間、渴きが…渴きがね、あったんだ——。

彼女が自分の道を進んでいくことを、僕はいつも…褒めてた、ねえゆかり、君にはわからないよ。僕は自分ひとりを守ることと精いっぱい、他人に対する愛情なんか持てないとずっと思っていたんだ。嫌な社会、嘘に満ちた人びと。どうしようもない学校、僕の敵はたくさんいたさ。そして僕が握りこぶしを固めなくちゃいけない相手は、時折は、君だったさ。

でもねえ、ゆかり…選んでもいいんだよ。いつだって、君は君の好きなように生きていいんだよ。淋しいとか、そんなこと——僕が言うと思うかい。僕は自分の人生に染まる、君を見るのが嫌なんだ。君は立派な大人だし、僕の憧れだし…そして何より、口より心の中の方がずっと君に伝わるようなありさまだし…大分前から、ここだけの話、君にいかれてるんだぜ。理性のある大人のふりは疲れる——よ…。

「耳元で、何度も囁きたかった、その気持ちは違うさ、」

・・・彼女は強情で、気が強い。でも、本当はすごく淋しがり屋で、自分の気持ちに嘘をつけない人なんだ。She is ...*She is* ...

色っぽくて、オシャレで、たまにおすましをして・・・でも優しくて、ちょっと考えるところがあってさ、——不思議だ、この瞬間がいつも本当の君に触れてる気がする。そしてそれはあの夕暮れだ、一目ぼれでもしたように、僕が目が離せない、君の夕暮れだ。

今どこで何をしてるの？

美味しいシチューを温めてるの

きみは元気であるかい？

さてあなたが思うほどかしら

新聞紙をよめるようになった？

漫画はあいかわらず読むわ

わるい男につかまってない？

知ってるでしょ男運がわるいのよ

ねえよりを戻したくない？

いま連絡不通になりました

きみはずいぶん甚いね

ご了承ください

ねえ何か変わったことあった？

かわらないことの方が多いわ

ちょっと結婚式あげたいとおもわない？

ごめんなさい今スパゲティーゆでてるの

きみは村上春樹の読み過ぎだよ

ほんとうに茹で上がりそうなのよ

って君いま風呂上がりなのかい？

いやな想像をしないでくれませんか

ふうむ いいポーズをとってくれたまえ

カメラマンと話す予定はありません

そういえばシチュージャなかったっけ

いっしょに食べるのよ！ いけない？

じつはインターホンおしたいんだけど

あなた何をしにきたのよ

贈りものをきみにわたしにさ

安かったらストーカーで訴えるわよ

しつこくつけ回す法も恋の手口

ねえ愛してるって？

チェーンをはずしてくれたらすぐに

口を糊して、いつもは気乗りしないこともあえて見るつもりで、バイクはクリーム-ミルク
抜きのむっとした、陰悪な――喪服。タイや付近に伸びている筒、さあ、この根を一本だけ
お上りなさい。これを召し上げればどんな文明も汚染出来ます・・

ちょいと後ろ足だけで立って――人もいない、犬も通らない・・うっかり笑ってしまう。黒
い影に、黒い色-黒いひげ。そしてねえ、真上の方に月があって・・道路の片側を照らして、古
い型のゼファーが浮かびあがる。そして僕は煙草に火をつけて、そうさ――何本も何本も火
をつけて、心の隅から隅まで暗く淋しくなるまで濃い影を引き摺る・・・。

ねえ、突っ立っていると、脅迫の言葉を感じるんだ。道が、覚悟のほかに黒色の皮-黒い蛇
みたいに見えて、赤い舌-街燈が踊る。でも奴だって、疲れ切ったと見えて、もうよそうじゃ
ないか、お互いに助け合いながら、無言のまま時間の空しさを語る――。

ぽかんと口を開けているように見える街燈は、下水道や、工場-機械音・・そして夜の幻想的
な光を僕の脳内に交錯させる。古い証文が蝙蝠に変わる・・必死に切り込む黒い斑点-生臭くて
、なまあたたかい黒い犬の息――巧みに引きはずしながら、風の宮とでも洒落こもうか。
ウインド・パレス

胸をはだけている女の像を想像する、でも、犯すことを諦めて、彼女を楽園へとやる。け
れど楽園は、トロイの木馬だ。気をつけろ、危急には代えられぬためこれ以上言えないが、
でも殺気立ってる。悔いに、心の底まで冒されかけていた・・無能が、また頭をもたげ出す。

「・・声をかけてもいいのかしら」と背後から、ゆかりの声。

首絞め台のように、つるべ縄――人間の手・・てのひらを曲げた人間の手・・。

「たちの悪い嘘…白黒テレビみたいなことを考えて——るんだ…」

「そこら中に地雷があるって？」

と、ゆかりが面白いことを言った。

「子供たちに言わなくちゃ…バツヤやコオロギの脚をとらないであげて…って——」

鉛を吐くような台詞…強張っていて、身体がひどく重くて、ねえ、身動きできない。きつと鬱なんだツキノワグマも。だってねえ、あの月、不機嫌な表情をしすぎてる。

「女に恋をしてもよくない…下手な同情をされる。なんべん、頭っからハリセンで叩いて、このクズ野郎って言いたかったかわからない——でも、へらへら笑ってる男がいる。卑しいと思う…ポケットから封書を取り出したのはいいいんだけど、肝心の中身入れ忘れてる」

「…今日はどうしたのかしら？」

お前を外へ連れ出す-飯を食う、それで海へ連れてゆく…下らない計画だ。

でも、意識することを怖れる、僕の弱さ、痩せた友達-吸殻に会って…さ——話したよ。数限りない小さな失望と怒り、まるで火のついた白粉-紅…鏡が割れて無数に重なり合って、踏むたび騒ぐ。悪いとかすまないとかが見える茨にも…草の鎌——。

「俺の顔を見ると、お前は何て思う」

「今日はやけにサディスティックじゃない？…」

僕は黙る。女はいつだって、男が黙れば、勝手に考える。

「…素敵だと思う——カッコよくて、男らしくて…わたしの一番好きな顔だ」

「でもたまに俺は——お前を傷つけたことを考える。他の男はそうじゃない、別れを告げられて女々しくなる。女々しさって何だ、その卑しさって何だ…男の自尊心は、女なんかに

俺の気持ちがわかるか、と言う。失せろ、豚——そう言って…みせる」

「——でも、あなたがそうしていると、わたしはいつも思う…あなたはいつも、心を開いて欲しがっているんじゃないかって。実は、誰かに分かって欲しくて、けど、それが上手く言えなくて、ひとりで堪えているんじゃないかって…」

「女は、お前みたいな奴のことを言う。男の気を悪くさせるような女なんて屑だ」

「——知ってるわ、だからわたし…あなたの心の奥底を怖がってる。あなたは気まぐれで人を好きになったりしない。だからわたしを好きになったと言ったら…あなたは必ず、その見返りを求める。だってあなたはそれ以上なくすべてを放り出して、わたしと向かい合うはずだから。だから…女は、どんな言葉も、涙も——惜しげもなく、自尊心を棄てて捧げる。それが愛の証明だから…男が、好きと言ったら…心を預けることだから」

「考えない女は屑だ-そして一生自分で甘えて、誰にとっても都合のいい女になる。そしてそんな奴が、恋人です、妻ですと顔をしていたら、男はきっと浮気する。そんな女知らない。そんな女…と、いつまでも一緒にいたくない」

「知ってます…本当の男は、女を道具のように扱わないから——優しくて、誠実で、自分のために、誰かを狂わせることなんてしないから…本当の男は、自尊心を心の奥底に抱えてる。秀一君にはそれはない——マスターにもそれがある。だから、わかる…あなたが何を考えているかわからない時が一番怖い」

「お前は才能のある女だ…俺を誰だと思ってる——そんなの、見たらわかる…お前が、恋を邪魔だと思ったら、いつでも引く。それで別れようが知ったこっちゃない。男は、面倒くさい顔をする奴と一秒だって一緒にいたくない。緊張がある-スリルがある…だから、男と女

はその奥底まで違う自分を知ることが出来る」

「知ってます」

僕は首を振って、表情を崩した。

「…怒ってるわけじゃ—ないんだ…ゆかりのことを傷つけたとしたら俺は謝る。希美衣さんや、中原さんのことなら…謝る。でも、お前が俺を信用しないのは絶対に駄目だ。俺は心をそんなに簡単に見せたりしない…誰にだって、気安く自分を扱わせたりしない。もし、そう見えることがあっても、それは俺じゃない」

「知ってます…本当のあなたは、一人でずっと考えている人だから…」

僕は、ゆっくりと目を瞑りながら言った。

「誰かにする優しさなんて表面上のことだ…お前だって知ってる、人は自分をよく見せたいと思う。注目されたいと思う。でも—優しさは、考えを言葉にする。そして言葉で何度も説得する。時間がかかっても、その優しさで相手を魅了する」

「…あなたの言葉が信じられないのは—わたしが駄目な女だからだ、と思う」

「—駄目じゃない。駄目な女を好きになった男はどうしたらいい？…お前は嘘でも、自信のある顔をしていなくちゃいけない。そして男はそれが嘘偽りなく出来るように、何度も、愛のある言葉を投げかける。リップサービスはしない」

「…本当の男は、真実しか語らない」

「—見えてくれ…俺はお前にどんな弱い所でも見せる。お前には、どんな自分でも見せる。だからお前が困るほど、俺は愛の言葉を口にする—お前は世界で一番、美しい。これ以上なく、愛し—い…何度も何度も、愛してると言う…」

「永遠に変わる…ことがない——愛情…」

「そうだ、お前はそれを、胸の片隅に置いている限り、俺を一生引き摺りまわす権利がある。そしてどんな愛の深みにでも、落ちる——ことが出来る…だから、ゆかり、下らない女になるな。気安く自分を売るな。他の奴がどう言おうが、そんなお前を見たら俺は幻滅する。お前が本当に困ってる時、疲れて——る時、それを打ち明けるのは俺だ。だから、俺だけを見ていたら…いい、俺はお前のためにどんな願い事でも叶えようとする…世界でも、宇宙でも、他の奴が笑おうが、俺はそれを持ってきてお前に捧げる。ゆかり、それでお前が笑うとしても——どうして、そうするかわかるか…」

「…教えて。」

、、、、、、

「愛しているから——何度も、耳元に囁く…よ——俺の代わりは絶対にいない。お前が不幸になるのを選ばない限り、俺は限りなくそれを信じてる。愛しているから…心の底から、愛しているから、もう…みっともない真似をするな」

「はい——。」

僕はよく性格が変わる――

もうあの女を追うのはよそう、と思うことがある・・

精神安定剤が必要だ、

アスピリンをくれ！・・

でも何と言うか、女性が馬鹿にしか見えなくて困る、

いや、さっきまであなた口説いてたじゃない、

猪突猛進に？――そんな、いい加減な・・と、言うけど、

女性なんか三日見たら飽きるじゃないか、しかも、

困りきってるお前の顔を見てたら萎えてきたぜ、

そもそも特定の女性に絞るって、

社会的にどうなのか、と思ったり――ね・・・

情報はビューボン-ずううう・・・とピッチングマシーンみたいに、

やって来る-僕等は金属バットを持って、ぶっ叩く！

気がつくとも何でもかんでも省略――ぶっ叩！

知識や教養のインテリ女、次はスポーツで汗を流す女、

筋肉質の女・・平凡な女、人気の職業の女――

若い女に、年寄りの女・・

でも女っていう生き物は自由な立場に置かれる限り、

いつだって一番魅力的な男を探して・・る、

ねえ、でも女よ、ついてるもんは全部一緒！

それで結局やること一緒！..

ブサイクと美人に違いがあるという人がいるけど、

馬鹿だな、全然ないよ！

たとえば自信がない男は妥協で結婚したいと思ってるし、

自信がある男は、より綺麗な女を目指す..

でも、蓼食う虫も好き好きだし

あるのは顔のシンメトリーと、スタイル、

そしてフェロモンと、脳内分泌..電気信号！

言っとくけど、その内に、

浮気出来ない薬が開発される——ぜ..

朝の食事に気をつけろ、ってなもんさ、

ああ浮気出来る平和な世界！

身体は重いし、肩は凝る。気分だってだるい、

なんちゅうかモヤモヤ...

女の生理みたいだが..僕は多分に、背後霊——

でも背後霊というのも大概イメージで、

人格の中にひそんでるバグみたいなものと解釈！

...ああ、背後霊、本当にいるなら、

あの人がいいよ、世界中は不幸な気分でいたそうなの、

あの人がいいよ——なすりつけ！..

そして僕は突然、そういうどんよりした気分にはイライラし、

便秘なんかもう嫌なのお！と叫び始める…ワオ、豁然たる

晴れ間を望む！…男って汗を流すんだよ、汗ダラダラなんだよ、

というか、なんか、急にカッコよくなってきたな、

フルマラソン全力疾走一キロあたりで脱落が理想…

そうすると、頭が冷え、僕にも冷静さがやって来て、

「そろそろ、いい子になるか」とか思う――

なんだか、さっきまで猿かゴリラにチンパンジーみたいだけど、

僕はそうだ…でもそうなってくると、急に僕は、

社会ってあれなのではないか、と鬼神降臨し、

僕は鞭を持ち、専制君主！

「そもそもお前って世界中なめてんじゃねえの！」

と、自分に言ったり――他人に対してめちゃくちゃ不機嫌になる、

こういう時は、誰も話しかけない…

誰かが、あなたはモテるだろうって言う、

そうかな、こんなに複雑すぎる男性がモテるかな、

ややこしい人がわかるほどの女なんて、ザラにいるかな、

――でも、こんな男性でも、いいのだ、という人がいる、

いいのだ、には、A B C Dの価値基準があって、

僕をすごく高く見る人もいれば、すごく低く見る人もいる、

でも多分女性は、僕のことをすごく高く見てる…

でも、頭よさそうだっていうのも嘘だし、

確かに自信はあるから低く見せるけど、それでも、

頭よさそうに見えるだけで、僕は砂場で、

子供たちと、一緒に遊びたいだけだよ！

でも、気まぐれな僕は、たまに思う…

つまり、僕等ってやっぱり自分の価値って、

わかってないんじゃないか、イメージって何、

ああ、何処から何処までが僕なの、と思う…

どうでもいいや、ただ二十代までだな、と思う——

女性諸君！…気をつけろ、勘違いし過ぎてるうちに、

齢をとり、男を馬鹿にしてるのも今のうち！

三十になれば人も敬遠するようになるし、

四十になれば——誰も相手にしなくなる…

美人より不細工がモテる、ああ、

もしかしたら明るい性格より暗い方が結婚に近いかも！…

けれど、結婚＝ゴールか、スタートか、——だよな、

純粋な天然の炭素から成る鉱物も加工され…つまり偽ってきたけど、

どんどんお前の醜さ、気持ち悪さがバレだすよね、

ああ、我がままだ、鬱陶しい——気がつくと、喧嘩して、

もう、別れよう、人生に恋人なんかいない！

ああ、でも、自虐って大切だよ、そりゃ、大切さ、

緊張感も大切だけど、僕なんか別に

社会人らしくないしさあ、はは…無人島にでも、

明日くらい行けないかなあーどうやって？

それはもちろん、バスジャックされて、犯人が要求した、

飛行機に乗せられ、僕は突然、

何から何までもが嫌になって、

パラシュート担いで、勝手にドア開けて、

助けを求めてる筈の人が僕を止めようとするの、

早まっちゃいけないー戻れ、と犯人も言う、けど、嫌さ、

僕は誰にも命令されるのが好きじゃない！

、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、

人生にさようならするの…すると、そこは無人島だ、

でも、そこにも猿だかゴリラみたいな女がいて、

なんだか知らないけど、――ぼく、強 姦されちゃう！

曼荼羅的な螺旋状階段な人生の体得者だからね、

まあ、そうなるってな感じ！

やめて…やめて、とアウアウとおっとせいしてたんだけど、

やめろって言ってんだろ、とぼくもう頭にきちゃってさ、

首絞めて、ぎゅうぎゅうやって、ぼく、殺しちゃう！――

そして急に、おらさの女を殺したな、とごつそうな村人が現れて、

槍持って追っかけてくる、もちろん、さっきまで、

僕は女に襲われてたから、素っ裸でね、

恥ずかしいやら、その布切れみたいな腰の巻物下さいとか思ったり、

いやいや、自分のズボンはきたいよお、とか、

理性取り戻したりしながら、

しょうがないから、僕もそこらへんに落ちてた…

まあ、話だからね、落ちてるのさ——槍持って応戦する、

すると、僕、なんだか知らないけど、勝っちゃう！

すると——おお、この男は村で一番強い男を倒してしまった、

こうなったらもう、この人を迎え入れるしかない、

という感じになって…僕も、なんだか、

新しい世界の王様みたいな感じになる——

でも、勘違いの王様だよね、馬鹿馬鹿しいや…

でも、文化レベルの低さに呆れてきて…そりゃ呆れるよ、

僕は、元の世界に戻りたくなる…

ああ、普通って大変だ——女性に昔言われた…

本当のあなたって誰？…

誰だろう、君はそれを探さなきゃいけないんじゃないかな、

君はそしてそれを一生の仕事として出来るだけの、

常に魅力的な女でいたらいいんじゃないかな？と…

ハッピーエンド・ユーモラス・ドラマ

うれしそうな笑顔が

いくつもの夜を越えて

笑っているのか

泣いているのか分からないような気がする。

（晴れやかな顔、

すきっ歯、

人生の中で一番ハッピーです。

人生の中で一番ハッピーです。　　）

.....

にこにこと笑った顔。

笑い顔。

Tシャツ。

ジーンズ。

（君はポケットの中に、

ペットボトルを入れていて、取り出す、

咽喉が渴いたな、君も飲むかい？

咽喉が渴いたな、君も飲むかい？　　）

.....

大きくてやさしい茶色の目をしていた、

かわいらしい笑顔の女の子のように、

痛みはまったくなく、

むしろ、前よりずっと体調がいいと思う・・

「センターフォワードのゴール。」

（おもちゃや風船・・）

「その椅子は、以前のように空席のように見えた。」

（どんな世界記録も、

どんなにスタジアムをいっぱいにした選手も、

このドキドキや、ワクワクを感じ続けてきた・・

感情論に流されやすい僕にも、

感情が綱の糸のようにもつれている僕にも、）

.....

人生の中で一番ハッピーです。

人生の中で一番ハッピーです。

.....

喜び、悲しみ、怒り、

諦め、驚き――

容易には辿り着くことの出来ない

愛の感情が、僕を励ます・・

（世界平和は少し難しいけど、

争いを失くすことは出来ないかも知れないけど、

誰かを愛することは、出来る、

きっと、誰かを愛することは、出来る・・)

.....

She!

she continued...*She!*.....

she repeated...*She!*.....

.....

「常に――そう、常に、

幸せだと言える時が来る。

そのための準備をしておいて・・

苦しいことも、嫌なことも、

あなたを高めるための試練だったと、

いまはたくさんの人を許してあげて・・・」

（孤独なティヴィー、

孤独な人の横顔、

あなたの目の前で繰り返される空疎な言葉、

あなたを必要としない世界――)

.....

美しい言葉が、求められないほど、

この世界の醜さに気付いた瞬間、

あなたは生きることを止める――

.....

人は奪い合う、心の底から、

人を信用できないことに、気付く、

何処へも行けないことを、知り、

あなたは動揺する、

（世界が終わる、あなたの世界が終わる、

世界は黒くなる、世界はあなたの視界だけになる、

世界は必要のないものになる、

世界はもう、存在する必要のないものになる、）

.....

感情の抑制や鈍麻、緊張、忍耐、

手放せないものが増える、

割り切れないものが増える、

自分が駄目になったと認める瞬間が増える、

.....

ベッドの上で、「こんなはずじゃなかったのに・・・」

と――泣いている君に、

優しい言葉をかけてくれる人はいない、

心を閉ざした人に――自分から変わろうとしない人に、

冷たいのが、この世界・・・

（でも、目を醒ましてくれ・・・

もう一度、ハートを震わせてくれ、

愛はまだ終わっていない、

愛はまだ終わっていない　　……）

……

（ピアノが鳴っている、

まだ、ピアノが鳴っている。　　）

……………

きのう橋を渡って まっすぐ歩いて行って 歩道のガードレールに

駅の階段をあがっ

+ + +

心はあの日のまま

少年 。

+ + +

記憶の中ではいつだって走っていた。空間がしだいに低くなり

はな弁が地面を白く染めていた。影が入ってきて、雲がハンカチ

を用意する。そしてぼくは拍手する。

+ + +

誰かが写っている写真

ネオンアートが見せた 電車の横顔 プラットフォーム

、、、そして 灯りのついたまるいトンネル

悲しい鐘が鳴り響き、世界は少しの間、胸を痛くする

人を裏切ることをしてないと言う人もいるけど、

わたしはあなたにとってそうでありたい、と言う人もいるけど、

それ自体が嘘だから、浅墓なのは――そこらへんで・・

（分かり合えない内から、身体を重ねてしまうと、

辛いのは、そういう理由だよ。）

あなたの心の中だけに、そっとその小さな灯をともしていてくれないか、

と僕は思う。他人を疑うのが嫌なのはみんなそうだよ、

でも、その嫉妬を、恋人の特権にはいけない・・

「*I had an agonizing feeling.*」

ちゃんと人生に対して前向きに生きている人の意見かい、

ねえ・・どう思う？――かく言う僕は、そうやっている限り、

幸せになれないだろう、と思うよ。

（悩んだり困惑したりして、相手がもう駄目だな、と知る瞬間、

好きな人に心を閉ざす・・んだ――別れは、いつも悲しいけど、ね・・・

でも、お互いが嘘をついているより・・ずっと――いいよ。）

盲目的に信じるのは狂信的だし、心に無理させてる、

その内に、・・泣くんだよ――でも見せても、見せてくれなくても、

そういう愛のあり方は、自らの嘘、相手の嘘に知らないふりを、

している仮面・・・人はそこまで強く――ない。

「*I had an agonizing feeling.*」

愛を失ったことの引き換えに、大人になれないとしたら、

さみしいだろうね、人生の無駄だ、といつか、

気付くかどうかはわからないけど、

それは人間の本質を馬鹿にした人がよくそう言うものさ。

（人生の奥にひそんでいる、人と人とを突き放すものを見なよ、

それを解決する方法は何かと考えてごらんよ…）

確かめ合うことは、けして、裏切りじゃない――

確かに僕は失望して…悲しい表情をとるけれど、たまに思う、

若い時分にいろいろと、人の裏を知ったのは、

よいことだったのかも知れないな、と…だって、僕が、

本当に淋しい人である、と気付く人は、稀だよ…

別々の生き方をしなければいけない人生を見て、ほほ笑んで…る、

（長い不幸が続くとして――も、僕は変わらない…

人がみんな、それぞれ違う淋しさを持って、いつも何か違うものを、

信じて…愛して、裏切られていることを…知ってるから――）

「*I had an agonizing feeling.*」

…愛してる――よ…その涙の向こう側にある、弱さ、

それが僕を大人にし、この世界に喜びの鐘を鳴らしたいと考えさせる…」

まるで誰もが、生きるのを止めたいと思えるような経験をし、

そこで、自らの嘘を知り…生きていくのを選ぶようだ――

そうだ、…選ぶようだ――呻くようなはっきりしない低い声で…

放送禁止用語を連発する世界、濃厚なキスシーンがピーター・グリーナウェイの『ZOO』さながらの裸体。『コックと泥棒、その妻と愛人』さながら部屋やシーンが変わるたびに赤、青、黄、緑とセットや衣装の色が丸ごと変わっていく趣向。

――そして僕は君をネオンライトとカクテルと麻薬のような世界へ誘いこむ・・

――準備はいいかい、さあ、*sensual music!*

自動販売機の前で、深夜放送の・・不適切なシーン――王座の人物は影のごとく薄れ、僕はキスしながら、読者サービスのためにはちきれそうなエドウィンのGパンが、（ワオ！）ゆかり・・いわば経済的自活力を持たない、十五歳の未成熟な少女に、産褥の苦痛-おお女性の神秘、母にして女である可能性を持ったレディーに性的な攻撃、逡巡！ それはまるで骨盤を矯正するような脳内の痺れ、アルコールの蒸留・・足を絡ませるように、露骨な愛撫による-やがてきたる、マグマにしてダムダム弾という男性的絶頂-ピークのために腰をなすりつけ、ぶつけ、もう服を脱いじゃえば、モロそれエロじゃない、というクオリティーの低い仮想桑田佳祐的発言。形のいい、くっきりとした胸の谷間に、落ちる汗-僕等の涎れた歌集『みだれ髪』。ああ、まだ見ぬ杏の誘惑と、抑えきれないメロンに男性的な胸板で攻めまくる。（ウッウッ・・あ、）デリケートな味や香りのしない、もっとも人間的な、本能的なものの世界の中で・・僕のおっ勃ったミサイル系ドリルねじ式壺が際疾いことになってる、*Labyrinth!*

――さあ見ろ、さまざまな自然に彩られながら、お前が、抜け出した理由・・

――それはまるで一匹の動物の興奮したような息遣いの・・

――ああ、息遣いの・・深く、激しく吸い込む息の、*tiku-taku*・・

萌芽-いまにも動物の官能の源であるフェロモンと、椰子の木揺れて-蛇と-原始生物が海に耽溺する悪徳へのダンス-断崖絶壁へのジャンプ。僕はもちろん烈しくて・・・不規則な心臓の孤独を忘れて、高鳴る分身・・・もはや、硬くなって鉄となりもはや希少金属の一部となりインポotent-解脱した老人すらも復活させてしまう幻の秘儀のように（アウン・・・はあはあ、アウン・・・んはあ、）僕のツボ-快楽にして惑わしの泉を刺激されて心が落ちつかずもはや断続的なシルエットの、麻薬・覚醒剤の使用――絶望的な混乱を経て、女性の中にある隠し通路を望む。たとえば一夫一婦制以前の社会の皺-心臓の鼓動が止まるほどの出血-赤い顔、レッド-カーマインの原始社会の情熱的肢体・・・このインド大陸に僕というコロンブスの船が-ああ真っ白な-ホワイト-清浄なる飛行機の不時着。もっとわたしを壊して・・・もっと、破壊する文化国の最下層のスリル-常識の欠如した偉大な伝統の紋章の図案-フォビヤにしてグロテスクでアクロバティックな僕は*Designer!*

射 精 一歩手前の早まる急速な女性への圧迫のように、ああ、君はもう僕の子供を生みたくないじゃないか-違う、わたしは十代、それにふしだらじゃない-いや違う、お前はメスだし、本当はただ、男に犯されたくてたまらない、どうしようもなくスケベな女・・・ああ、差別的にして煽情的な文句。運命を形づくる複雑な影響の生誕。確かに知的な女よ、フェミニストよ、神秘的な観念も素敵さ、女性の貞操観念-セクスアッピールのない女を棄てた女-ブサイクだけど、でも僕はそんな外面的な美より君の内面を覗きこみたい。社会的信用を得て自立した女は、絶対に必要だ。愛と平等-世界中に、キラキラした知性を鳴り響かせて欲しい――最高に僕が望む、一個人としての独立！・・・けどさ、狩猟を楽しみ、ああ、男らしいスポーツが血管中に澆刺たる生命をなし-高速道路から脱出した時のスローテンポの世界、後

ろから、ねえ、君は背中を向けさせて、這い蹲らせて-あるいは足を持ち上げて、もしくは犬や猫のように思える稚拙なプログラムで…フェチなんか死ぬ——誰その顔が好きなんて死ぬ。もっと古い演技の記念碑。ねえゆかり、…駄目だよ、いけないよ、そんな僕自身が欲しいというような眼で-物狂おしいほどの（ッアン！…っはあ…んはあ、）アホみたいに、病原菌の浴槽のなかで浸潤-欲情して-もうただ欲情して、文化に逆らう眩しい春、いわば、じりじりとした夏の陽射し——そこには鑄型があんだ、はっきり見つめるほど、奇妙な世界はいよいよ遠ざかって、シェイクスピアの美しい台詞も頭からぶっ飛んで…それでもう、女を支配したい-服従させたくてたまらない、暴力で、ねえ、この抑えきれないほど強い感情で君を縛りたい…ああ、僕の背中に…腰に-首筋に彼女の力加減を変える-手練手管。そんなの何処で覚えたんだい…知らない、神様が教えてくれた *connate qualities*!

ああ威厳なんてない、理性…聞いたこともない、何それ食えるの-女性の身体がじゅくじゅくして熟れたフルーツみたいに思える-理論的な幼稚性の光彩…たがいに絡み合っているだけで、ただもう、君とやりたいというそれだけで、結合への憧れ-ああ、禁欲的な女性の怒りを買い、女性の眼を、嫌な人-なんてひどい人と言わせてしまう、頭脳の中に潜む生殖のトリガー。でもさ…彼女の焦がれていた、唇から、彼女のじゅくじゅくして、指で搔きまわしたくなるようなものを想像しながら、性愛に堕ちてゆく僕は、段々と口腔の味-女性の生の味…僕も煙草やガムの味、たとえばジュースの味だってする意地悪な魔術をかけられて、不調和な幻像のまやかしに、女性たちを透視する。いいから、欲しいって言ってみな…お前が何を求めているかわかってるんだ、正直に、口にしてごらん——ポップが見せる、複雑怪奇な姿、いわば、うわべの姿からその内奥の相にまでいたる吝嗇。ああ、幻滅しないの…していいんだ

よ、恋にあこがれている女の子に現実を教え込んでしまうさみしさ——嘘よ、あなたは何を
言ってるの、と仮想のゆかり。女は男の全部を愛する-餃子やニンニクはちょっと嫌だけど、
あなたはキスがすごく上手だし、あなたの唾液も、ぐいぐいと送りこんでくる空気もわたし
を酔わせる——幻想の中で、英雄も気違いとなった！・・*to begin to creak!*

愛してる、大好きだ、と言いながら蹣跚く、死後約四十時間といった記憶の灰・・それはい
わば、極彩色-刺激を催させる色・・いわば、ただ、やりたいだけの生き物の憐れ。発情するオ
スとメス・・暗い目、欲望を肯定してドロドロに濁ってとろんとした眼（は、）-美から背き、
従来 of 体質である性から老ゆることを遅くさせるホルモンが流れ、優しさでは救えない、仮
面ではもう隠しきれない真実の声を暴く・・でも、肉体はそう、早く服を脱がせたい-胸をまさ
ぐり・・いやもう、僕の滾りたったエロすぎるものを見せて・・ねえ見て、こんなに大きくなっ
ちゃった、どうしたらいい、これどうしたらいいんだろう——破廉恥、きっと、ゆかりもビ
ックリしちゃう——男女関係の本能・・。

しゃがんで跪くと、消費エネルギーを補う最低量の食物が得られない、

六十億人のうちの純粋な乞食になりたい、

されば一枚の硬貨を拾える。

絞首されるわけもないが、ギロチンの気配、鼠、ブタ、蔑まれ、

さらには健康の意識および健康の事柄にたいする啓蒙が、流行の権力！

俺は拾える・・合併症を伴いながら、この空気の汚染！――

わたしの手、わたしの手は、――それに触れる、それに触れる、

価値なんてない、意味なんてない、皆目理由なんてわからないさ、

……………水の深さは。

……………頭 が お か し い

……………お か し い

シティー ゲー ト

(pm 19:00 今歩いて来た方から足音が聞こえて来た。

自分を追って来たようにも感じた。)

眠れないぜ！

眠れないぜ！――ぜ・・

、、、、

思い煩う。千人以上を殺す。

罾がある。そして奴は奴に仕込まれている。

奴って誰だ？ いかれた片目のマッドサイエンティストは答える、

リストラ

手を替え品を替え——政治×、既に呼吸困難な気配だ、

ケロイドの女が黒人に抱かれながら言う、犯罪、略奪、売春、

「悲しみは、涎れを垂らした子供より健気ね・・・」

（時代の奴隷、幽霊の国・・・）

エイズ

都市に巣くう悪——社会に蔓延するフラストレーション、

自殺者数増加/行方不明者数増加

ヘッドライトに顔を隠す奴、

夜中にサングラスをする奴、

事情はどうあれ、俺たちの自意識過剰ぶりは日ごとに酷くなる一方だ。

〔少数の人たちの利益のために多数の人たちを犠牲にして発展した文明のなれの果て〕

偽りの趣味、偽りの満足、 ——いまにも、心臓が停止しそうな

君の声、薄気味悪い価値観、常識を装う病人、驚くほどに率直さ、

……………水の深さは。

……………頭 が お か し い

…………お か し い

あたらしい波紋を生み。

あたらしい鱗を生み。

あたらしい生を…

(コノ、シュンカンニ、ボクラノ、セイギガ、オワル)

(セイギナンテ、ハジメカラ、ヒツヨウナカッタ)

「海の幸が届きにくい埃っぽい街の中にいて、

こうやって、コンクリートの中に閉じ込められてる…」

わたしの手、わたしの手は、 ——それに触れる、それに触れる、

価値なんてない、意味なんてない、皆目理由なんてわからない、

でも、ひもじさと遣る瀬無さを天秤に掛ける、アフリカの子供は餓える、

水は腐っていて、悪い病気になる——

(辛さと不都合さから解放するものとして祝福されたキリストの教えは、

民衆を墮落させ、新興宗教は我々をスポイルし尽くす！…)

でも、戦争は終わった——んだ！…平和が訪れた…って、今世紀最高の詩人は歌う、

ほら見ろよ、ベンチで母親が授乳をせずに、哺乳瓶でミルクを与えてる！

その傍らで犬や猫が殺処分され、その町じゃ、一週間で数千件の裁判が行われる、

そしてそれは彼等のお陰です、綺麗なビルのお陰です、国のお陰です、

[北朝鮮からのミサイルを恐れながら、中国の核兵器や、殺人兵器の噂を恐れながら、

細菌兵器——宇宙人の侵略・・]

見てくれ、噴水で眠ってるOL！ 冷たい炙り牛肉、殻に入った卵！

…………愚かと言うより、もう壊れるべき、僕等の世界。

「アイツも必要ない。人間の屑だ」

「アイツも、必要ない。屑だ。屑だ！」

「気のせいかも知れぬ。

だが、それをオーヴァーな反応だとは言い切れぬ。」

シティーゲート

(pm 21:00 善と悪の共有。男女の平等。

様々な報告書に溢れ、現実的解決策に乏しい決め手のなさ・・)

彼は先延ばしにする！

あなたは——黙って見守る・・

ようこそ、願望・・

ようこそ、バクテリア——

ようこそ、混乱の時代へ・・

(ツムジマガリノ、アメ。キョウレツナ、イソギアシ。)

(デモスグ、サカナニナル。ホネニナル。)

…………瞬時の躊躇いも、不安も——・・

マッシュルーム・ソースをくれ れ え …

悪い夢の余韻

.....蒸留過程で神の玩具.....

.....いわば悪霊の玩具.....

生き急いでいるのやら――

生活に身を窺すものやら、

身を粉にして働いているのやら、

ああ、心が重くなって、足がぴったりと止ってしまう。

大きな魚 水鳥の疲れ

.....アルコール依存症.....

.....精神疾患.....

全身を投げかけるように身体を寄せて来た影、

車のBody に痛々しい俺の名前がとどまる。

それはベッドで寝ていた俺とも、草叢で寝ていた俺とも同じだ、

一分一秒！ 不愉快な現実のタバコをくれたまえ！

一分一秒！ 昇っている太陽で俺を蠟のように溶かしてくれええええ！

Convulsive laughter 生活の病さ俺のね――

...くる病、壊血病、脚気...

.....中産階級の勝利と民主主義の興隆.....

君はまるで新しい結核

.....君は死ぬんだろうか？.....

.....死はどういう愛の痛み？.....

.....

.....

わたしの手、わたしの手は、　　――それに触れる、それに触れる、

価値なんてない、意味なんてない、皆目理由なんてわからないさ、

.....ああ、ライム果汁が飲みたい。

.....（オールを漕ぐ異端、君を導火線にし――）

...（寒冷な空気引き裂く、都市の新しい煙突の炎..）

一 うつけ詩人の批評

○花火のように飛び上った。そのしゃりしゃりとした氷の精華の向こうに、恍惚という名
きらめき
の天井に取り付ける電灯。観者が踊り子を上から見下ろすという構図には、日本の浮世絵の
シーリングライト
奇抜な構図構成に影響を受け、さながら擂鉢の底の好奇心の窓。おお、たとふるならば、氷
まぼろし
雪地帯に咲かんとする幻影の花に憧るる心持ち。おお、たとふるならば差し出された人工光
ロリーポップ
という名の棒付きあめ。豊満なる女を描きしヴォリューム・ドガとわれがなづけし女の印象
とは異なる、いささか少女趣味の、しかしその純潔、また清廉な印象のどこから絵具箱を無
断で持ち出したような噓せ返る、体内に脈々とながるる血汐のもゆる、おお、きらびやかな
しめり
羽根を隠し持っていたのか。それどころか、おお、かすかなあの唇の湿潤のエロティカルリ
ックな余韻の入江はどうだろう。なんたる梔子なオ　メコ！

二 うつけ詩人の保護者

○私は再三再四に及んで止めたまえと言ったのだが、なにしろ、君は詩人であって美術評論家ではない。また君は技量はあるにしても、余計なことに首を突っ込みすぎる嫌いがある。その挙げ句が、これである。私は秋の欲情のようなミステリーサークルは好かない。おお、しかし彼は途轍もなくいじらしい男であり、おお、さながら竹と性向さえしかねん萩原朔太郎に憧れる、下司ではない純粹寧猛な奥ゆかしい二面性の男であるが、君の勘違いは、まずこれがスケートではなく、バレエであるということにすら目をあてぬことに端を発する。またヴォリューム・ドガ、またエロティカルリックにいたっては造語癖の極まれり、

だ。これは何のことだねときくと、感情の発露の平行線からくる、強靱な脚の筋肉の暴虐なる殺戮なのだとのたまう。すこし私も頭にきていたので、ポカン、とぶん殴って正気にかえしておいた。

三 うつけ詩人の挿絵画家

○対象が瞬間的に見せる美に惹きつけられる時のファンは、さながら演劇の俳優に惚れるようなものだろう。画面奥のカーネーションたち、夜会服のパトロンや、脇役の踊り子たちも素晴らしく、またくっきりとした対比なのだろう。画家の性格や、製作態度というものは常に斯うした細かな部分に対してもひろがっている。たとえば、これは執念深い男が描出するところのはなやかな舞台ではなく、隠し絵のように、はなやかな世界の裏舞台もまた描出されている。伝統を愛したドガがみせた一瞬のかなしい百合。かるやかに舞う花の背後で、風がじっと吹き続けているということに、図案化された自然の一現象を見る。

四 うつけ詩人をよむ売れぬ画家

○俺は前から言ってたんだけどさ、ある種の肉体の運動性、たとえば稲穂がゆれるとか、腰を曲げるとか、乳房がゆれるとか、陰影とか、あるいはそういうものの躍動感ってのはさ、いわば粗削りで、実は不細工だって気がすんだよね。いびつなことを、とりとめのないことをさ、いきなり写真の中に収めて時を止めちゃおうっていうんだから、そこがいわば、絵のズルッこくて、しなやかで、ひらひらと身を躲わしちゃうところでさ、そこに画家の技巧だの、あたらしい表現方法だのってごじゃごじゃしたものを織り交ぜて、あたかも一つの完成品のようにしちゃうでしょ。逆なんだよね、完成してんのはさ、その運動性とか、たと

えば躍動感の方でさ、絵の方じゃないのよ。絵はやっぱりうねうねとした寄生虫感覚で、奇妙なユウユツがあってさ、丹念に描けば描くほど本質から離れていくってことだって気がするのね。いわば、絵って絶望からの脱出ってニュアンスが正しい気がするのね。なんでっかってえと、創作行為自体が抽象の受容で、従順な自己世界の構築だからなのね。つまり焦点を合わせた瞬間に、もう枯れ葉みたいな生活に嘘はつけないでしょ？

五 うつけ詩人に便乗し悪口をいう根暗男

○この詩作の意図は古典的画家の看板をもつドガが、みせた版画技法のモノタイプのことですね。わかります、つまりこの野獣の爪のフレッシュな昂ぶりの意図は、紙に下描きされているその上に、そのパステルで描きくわえられていることを暗示しているのですね。口の悪い人達はアマチュア丸出しの難解辟易する出来栄えのうつけと呼びますが、なあに、そんな糞の蠅集りは目先のことだけを見ていればよいでしょう。そもそも、この詩のニュアンスも劇場で最も高い栈敷席から捉えたものを暗示しているのでしょう。あえて浮世絵だとか、ジャポニズム研究だとかいった要素を活写しないのが実に粋ですなあ。あんなのはアカデミックの一手口なわけですよ。あんなのは働かずにいる貴族ですな、銅像のように腰が重い漬物石ですな。ははは、皆さんこの詩人に万雷の拍手を。光と影を。またドガはアングルを終世尊敬していたとか。アングルだけに、あんぐり、なんちってね。

六 うつけ詩人のまぶしがり症の奥さんの評価

○ええ、わたし、実は本屋で雑誌に掲載されてるのを、ぱらぱらぱらぱらって読んで、
とまと
かつ、と頬が火照りました。蕃茄みたいに熟れて、そのまま、ケチャップみたいに床をよご

して、塵取りで、あるいは掃除機で吸い込まれたい気持ちでした。あの人はきっと、その山

ピーピーピー

梶子な放送禁止用語がよっぽど好きなんでしょうね。ええ、家帰ったら、口はききません。

というか、ドガさんにも失礼でしょう。いくら、芸術といってもねえ……。

七 うつけ詩人の友だちの名言オタク

○わたしはドガの画面の継ぎ足しにの問題について、何処かで読んだのだが、それはモチーフが画面に収まらなくなってやむなく紙を足したというところの急場しのぎか、それともジャポニズム研究のいうところの継ぎ足しなのか。なににせよ彼は即興的に製作するのを嫌っていたともいう。ドガはなにしろ古典的な男だからね。古典的な男というのはなぜかしら種々さまざまな実験をするものさ、功名心とか、また責任感とかじゃなくてね、単純に納得のいくまでつくりたくてたまらなくなる。ほら昔の詩人が何ン度も詩を書き直すみたいなもんさ。歴史を毎年のように変更する教科書も古典的なものかもしれないなあ。リビジョニズム。ここでしめくくりの名言。古典とは斬新を狙うところのアトリエである。

八 うつけ詩人をよむ早熟なエキセントリック少年

○なるほどマングローブの森でいうところのマロングラッセなのだな。実にレット・イト・ビーでいうところのレトルト食品だ。これはいわば医療制度でいうところのインフォームド・コンセント鼻の穴にさしこまないで下さいなのだな。臓器移植OK。献血はごめんだぜ、リビングウィルもアイムおーらい。なんたる梶子なオ　メコ！

九 うつけ詩人と芸術評論家ダレモシランヨ

○ああ、あれね、知ったかぶりの底の浅い蠶狗みたいなモウレツな臭さだったね。実に
モノトーン
一本調子で、じっさいアイツなんか貧乏くささがにじみでて芸術かぶれの一典型的ひがみ根
性。ありゃあひどい出来栄えだったね、読んだ瞬間、モラリストとして芸術をなめるなこの
糞ガキがと思ったね。いや、別に嫉妬しちゃいないよ、あんなのは小学生だって書けるから
ね。大体あの絵だって、画家にはメランコリックな観客の批判もあったのさ。おい君、なん
だその口のきき方は、この業界で仕事をできなくしてやろうか。だいたい文学者ってのはど
うも何かしら芸術に好奇の眼差しをおくる。眼薬病だな、あれは。たんなる欲情ではない
か。たんなる自慰行為ではないか。画家の気持ちというのがわかつたらんね、評論家として
は評論的小宇宙の構築でなければ全部偽物さ、モンキービジネスというものさ君。追及の姿
勢というものが実にひねくれまがって、そう、言語空間における情緒的な、むっつりとし
た、不機嫌なムード音楽の生クリームといったところさ。おい君、なんだ、その馬鹿にしき
った眼つきは。頭が悪い奴はそれだ、すぐわかり易い言語でうんぬんとやりおる。おい待た
んか、待てと言ってるだろうが。なんて不愉快な奴だ。え、あの詩人？

「ふっふっふ…」と突然、バイクを止めた僕、高笑いする。

道路の位置も幾たびか改まり、バイパスだの、よく見ればこんな店あったっけ、だのが増えて
いるラーメン屋の前で、僕は後部座席にちゃんと座っているゆかりを困惑させた。

セメントのまだ生々しい建物のように、僕はある時代の男になる。

「どうしたの、って——あの、聞いてもいい？」

僕はポケットから、財布を取り出し、言った…言ったア！

「…見ろ、財布の中にこんなに、ぎっしりとお金が！ 諭吉が！」

アーティストの真似ごと-いやお前、アーティストなんだよ、でも、俺の夢はジャーナリス
トなんだよ、と思いつつ、財布の中は十五とは思えぬ、お金が！…学問のすゝめが！

「…それで？」

ゆかりは、何この馬鹿、という風に白けてる。

「——寿司食おう。我々はデートという名目で、ゆかりに合わせようとし、はたまた、中
学生らしいことをしようという幻想を見ていた…」

「ふむ。」とゆかり。

しかし、もう既ににやけている…両側に樹木の多い郊外の道路では、人通りが少なく、け
れど、駐車場には車がたくさん停車してる…細い乾いた溝に、いつか見た水滴が消えてなく
なってる…それは僕の血だった、新しい僕という生贄の血！

「けれど…もうやめよう。」

そこだけ何故かシリアスになる僕って変だったけど・・・ゆかりが従順な女になりつつあるのを見て、僕なりに、思うことがあった。

もちろん、僕等はお金を持ってようが持ってまいが、そんなことで自慢したりしない。人間の美德として-あるいは、僕の人生感覚として。そしてそういうのって、卑しい-動物的だし、金があれば何でも出来ると思ってる発想だ。そしてそういうのは社会の中で溢れてる。けれど、お金って、僕等にたくさんの馬鹿をさせてくれる-あるいは、そうすることにしか価値のない道具なら、これは仮面だ-仮面は常に、僕をおどけさせる・・・。

「・・・ウニ、いくら、サアモン！」

「最後なんかちょっと安いものが入った気がするけど・・・」

「金！　そして金！　くくく・・・金、金、金！」

、、、
穢れてる——そして多分ぼくすごい、楽しい顔になってる・・・魂を俗物の社会に、悪意に売り渡せない人間だと信じるからこそ、そこで僕は違う自分を見つけようと思う。

「マア・・・見下げ果てた馬鹿な人！　なんて頭空っぽの原始人！」

くすくす、と——しかし、ゆかりは笑い始めた・・・多分、彼女、僕が何をいわんとしているのか、そろそろ気付いてきたぜ、と思う。勘がいいのだ・・・。

既に、もうやっていること、演劇と一切変わらない。

「なんだと、この顔だけ綺麗な女め！・・・わしが、欲望にドロドロに濁っておるというのか。金を稼いで、綺麗な女と美味しい飯を食い、フェラーリを買う、ポルシェを買い、大豪邸を買う。船を買う、ポチとかふざけて名前をつける。プライベートジェットを買う、ポチの次は太郎と決まってるから、そこをひねって、花子と呼ぶ。オーダーメイドの服に、靴に・・・高

級腕時計！・・料亭貸切で女体盛り！ 屋形船で大臣と密談！・・」

あはは・・ちょっとやめて、くっくっく――あははは、とゆかりが笑い始めた。

言ってることあまりにゲス！・・でも、やっぱりネタに見えてしまう僕は、少しお上品すぎるのかも知れない。けど、そういう自分だって確かにいるんだよ（いるんだよ、）だからお前は、俺のことを、馬鹿だの、どうしようもない人だと言って、この人は自分がいないとダメなんだと思っていい・・いや、思うべき――なんだ・・・。

「わしは・・エロいのじゃ！」

「あなた、わし――なんて、主語使わないでしょ」

――無視した！

――もう一度言おう、無視した！

「・・・ぷるる、ぷるる――おっと、電話だ、失礼・・」

「いや、鳴ってないから、そんな携帯の音、鳴ってないから！」

「ハローエブリバディ！ ホー、ホーですか、ホー、ホーですか！」

「どういうキャラなのよ・・わからないのよ」

・・チラッと、ゆかりの顔を見る。ああ、僕は好きだな、本当にゆかりが笑っている顔。

「・・失礼したね、わしの愛人Dから！」

ゆかりは首をかしげ、段々と、呆れながら、この人、馬鹿ね、という顔になってきた。楽しい-そして、嬉しい・・自分を低く見せ、小さく見せるだけで、ゆかりをリラックスさせることが出来る。いや、誰だって低くて小さい、小人なんだよ・・。

馬鹿なんだよ、そしてそういう馬鹿なことで幸せを感じるのが、人なんだよ・・。

「…ところで、そこのお嬢さん、バッグ買ってあげようか！」

「バッグというと—スポーツバッグとかですか？」

「お嬢さん、バッグと言えば、墓石のことですよ！　うははア！…」

（いつまで、こんな馬鹿なことを、僕はやるんだろう？—）

もう、知らないわよ、という顔になってきた…ゆかり。でも、知らないくらいが、ちょうどいいんだ。君は健康だし、僕も健康だ。お笑い番組を見るし、たまにアニメや漫画を読んで、根暗のくせに何て本当は明るい人なんだ-こうなりたいていう力の創造力はなんて無敵なんだと思う。美術館-博物館もいいよね、でもドームで野球観戦して、ハンバーガー食うのもいいぜ。おいちょっとお前のポテトくれよ…あ、それ、トムって名前だったのに—昔、ゆかりがそんなことを言って、僕を笑わせてくれたのだ…。

（ひとつひとつ、噛みしめるからわかる…面白い変化がある、何か変化がある）

どんなに真面目に人生を生きようが、大人物になろうが、憧れになろうが、後に残るのは、孤独を知った後悔だけじゃないか。ありのままの自分に遠い、偽りの仮面を-ポーズを誰かに強要されて、発言さえ縛られて、心がどんどん膠で固まったみたいになる。

（*I dare you!-I dare you!—I dare you!*）

…そして、近頃の僕はあまりにも、ゆかりに対して馬鹿な所-本当はそんなに素晴らしい人間じゃないんだよ、本質的にはどうしようもない人間なんだよ、という所をあまりにも見せなさすぎた。確かに賢いかも知れない-二枚目かも知れない…努力家で、天才っぽくて嫌味なほど自信過剰な所もあるかも知れない。

確かに、事実としてそういう一面はある-認めないことには、他人に対してどういう自分を

打ち出していいかわからない。けれど、僕は三枚目なんだよ、歌を歌っていたって-ちっとも、自分らしくないと思いながら、仕事という職業意識でやっているにすぎないんだよ。女性にモテる-いろんな人に共感される-そのうえ、自分という者の話をかなり多くの人が真剣に聞いている。それも真実だ。でも、そういう自分が、本当の自分とは限らない…。

「――」

笑っている彼女を見ながら…嫌なくらい見窄らしい顔をして、ほんのちょっとの差のことで、引け目を持ったり、自分に対して全然違う態度をとったりするゆかりのことを思った。仮に、国家予算並の資産を持ってようが、どんなに人に尊敬され-僕が神様のようになったとしたって、ねえ、ゆかり…そんなの全然僕なんかじゃないん――だよ…。

そして…もしかしたら、お前の眼は節穴かも知れない。お前は美人だし、スタイルがいいし、性格だっていい。別に僕を好きにならなかつたら（いやいや、お前はきっと俺のことが好きなんだよ、）誰からでも-最低クラスの男子から告白だってされて、悪い人じゃないとか、この人は自分にふさわしくない、と男を値踏みするはずだ。

（言っとくけれど、僕はそんなカッコいい男なんかじゃない…）

――あの頃の物の見方、感じ方、考え方…何度も考える、覚悟を持って、僕は僕のやり方で本当の自分と付き合う。人生の長い道がある。動物的本能-スピリチュアル的精神に裏打ちされて、僕は無限の発展を求めて何処までも歩いてゆく。とにかく行けるだけ、前へ進む。でも、折り返すこともあるんだ…これ以上、前に進めないと知りながら、横道にそれたり、見たこともない道、たとえば三叉路、十字路…あまりにも長い一本道に途方に暮れることもある。でも立ち止まれば、そこがターニングポイントになる、限界をまだもう少し先に延ば

せる。誰かと歩くのもいいよね、色んな風景や物音を見つめているのもいい、犬や猫と遊ぶのもいい――恋人と手をつなぐのもいい、センチメンタルな軽い感慨に浸るのもいい。

（でも、本当の自分は君じゃないか、と思う-君が知ってる僕じゃないか、と思う…）

「さて、そろそろ拙者も、蕎麦など喰いに行くか…連れ合いよ…行くかね？」

「――行きますとも」

ゆかりは、しゃくるように笑いながら、

「…結局、お寿司なんて食べたくなかったんでしょ？」と言った。

「あたり。」

青年！

「*you are goddamn right!*」

さあ始まりだ、白い火のようにゆれて光を、

情感豊かに伝えよう…足場を失うほどに懷疑しながら、

それをコンデンスミルクに変えよう-透明な涙じゃなく、

しろい…蠟のようにしろい…涙に

（正しいことをせよ-正しいことをしなさい…）

…時間に殴られ、その時間という言葉に蹴られ、

ああ、次世代の子がいらした時には巣はもう空っぽで、

痣になるどころか心に深い傷まで負う（僕は、）

泣いていた——正しいクリスチャンの振る舞いのように、

僕等、不幸に対する折り合いの付け方…

これが人間的自由のふさわしい領域なのですか？

カキの殻を開けるのはどうしたらいい？
ブーツの型崩れを防ぐにはビール瓶…

一羽が鳴き終わったかと思うと、

もうすぐ次の一羽が待ちかまえて啼きだす（*He...*）

とてもかなしそうな目——*I believe you.*

「*you are goddamn right!*」

さあ、始まりだ…町の中心にあるように思える、

空洞の部分――空がとても青くて…美しい（のは、）

シャツの二番目のボタンが落ちそうだから…僕は彗星のロミオ、

「神様はそういわないかも知れないんだぜ、でも、それが事実だと、

彼等は呟くだろう。だったらそいつら全員愚民、屑、ゴミ！

話なんか聞く必要ない――俺の話だけ聞いて、前を真っ直ぐ凝視めてろ！」

何針も縫いそうな傷だらけ血だらけで悲壮感ただよう…俺だけど、

耐久性があるので長い目で見れば、お前をランクアップさせてくれるぜ！

寝台列車の予約は後方車両の方がよい…
落雷の停電でも懐中電灯をつけられる余裕が欲しい――

さあて、俺の攻撃で壊滅寸前の異常音は空冷ファンの最後の断末魔！

裁判所に提出した資料も罨にかかった書斎のクリアファイル！

かわいそうなトカゲはかなしそうに尻っ尾を振って…何処かで、

なくした尻っ尾のことを考えて夜一睡もできない…

……まるでスカンクという破壊兵器（に、）

この型の家はこんどの地震にびくともしなかった、

びくともしない…くつろいだ気分になれるから、ポケットに、

コインをじゃらじゃら入れておく、スリルを感じる、なんだ、

ポケットに穴があいていて、増えるどころか減ってゆく、

心がゴムの靴みたいにすりへってゆく…鉄の靴なら磨けるのに！

ああ――何処かに行ってしまうかも知れないコインが僕を取り巻く環境・・

（正しいことをせよ-正しいことをしなさい・・・）

この夏は十一年ぶりの暑さだという、

オックスフォードの卒業生という顔をした彼のいる、

今年も十七年蟬は地上にやって来るボストン大学・・

「だから言っている意味がわからない・・

何なのそれ比喻？ それとも何かの暗示」

（てめえで、考えろよ――いいから、てめえで考えろよ！）

さっきから僕は童謡のＣＤを探して――る・・

行政のコストが肥大化せぬように国民は燃焼系・・・

…………今日にも獅子は死んでゆく（我が子を残して、 ）

悲しそうな声に胸を動かされた君は断崖絶壁を歩く旅人！・・

全部が全部説明がつくわけじゃないと知る君は繊細な生き物！

実はほとんどなくしちまいそうな、大変な仕事で帰路が見えぬ、

いらだたされ、惑わされ――へりくだったふり！・・

アメリカ横断は無理だけど世界一周は出来そうな気分・・
アラスカはちょっと考えるけどイスタンブールには行くかな――

さあ意味不明の名誉をたたえておくれ・・いますぐに！

名誉をたたえて！・・そうでしょうとも、そうでしょうとも、と・・・

名誉をたたえて――まだ見ぬ胸をふくらませるイメージで・・

「*you are goddamn right!*」

——この人生に感謝を…

生きている自分の魂に、火をつけろ…つけろ…

．．．．．なくしちまうと、もう見つからなくなるから．．．．．

．．．見つかんなくて、困っても他の人は肯くだけだから．．．

……今日にも獅子は死んでゆく（*我が子を残して、*　）

「*you are goddamn right!*」

——今日だってわけわかんない…

そしてまたすぐにマトモなふり、でも混乱…また相談…

．．．．．どんな人生を、生きるのも君次第．．．．．

．．．でも欲しいものは必ず手に入れる主義なんだ．．．

「*you are goddamn right!*」

さあとりあえず、ヌンチャクを振り回してカンフスターになろう、

二階から飛び降りて…足を骨折して考えてみよう…

何言ってんの君正気かい-え、正気な人ってこの日本にいるんですか？

僕は笑う…だってまだカッコよく…人生を駆け抜けたいから

（正しいことをせよ-正しいことをしなさい…）

…僕は全力疾走、ありえない種類の汗をダラダラこぼして、

こんな愚か過ぎる世界をサンドバッグにする（するのさ、）

詩を書いている人だって——もっと自由な心を探したっていい、

僕は、ポエムで青春より永遠を見つけたい…青年！

メイリン

セバスチャンとトナカイの話をしていたら、

クリスティーとパンナコッタをそんなこった

アホやなあ、イエー！

ナイストゥミイチュウメイリン、

メイリンは中学校の英語の教科書の女の子のナマエです、

メイリン！

メイリン（は、）

野暮ったくないカンジです、

メイリンは言った、たぶん、英語（で、）

メイリンは、中国人だったろうか、

メイリンは、それともアメリカ人だろうか――

ぼくは、メイリンを勝手につくりはじめる、

年齢はたぶん、十四歳にしておくべきです、

ナイストゥミイチュウメイリン！

彼女は、チューゴクのレディーで、

レディゴオ！ どこか――どこかにさ・・

えーと、メイリン、君は、

カンファーをやるのかい？

えーと、メイリン、君に、ぼくから、

教えられることは、ポエムのことだよ、

チューゴクのシテキジョウキョウについて、

教えてくれるかい、メイリン？

かものはしさん。

いいえ、かもめです。

かもみーるふれいばーさん。

いいえ、かもめです。

かもがねぎをしょっているさん。

いいえ、かもねぎかもねぎ、かもめです。

かんとリーろーどさん。

いいえ、かもめです。

ねえ、かもめさん。

いいえ、ちがいます！と言ったりすれば、

それがすでに違うーでもねえ、メイリン、

ボク、は思う、

ボクは、ボクにとってのメイリンなんだ、

パンダを藪でみかけて、

「クマだあ、うわーい、クマだぞお」

「というか、逃げろよ、ロケットダッシュメイリン！」

…メイリン、あなたのいない、

パンダが白だか黒だかの一色で統一されてしまってる、

しろくま、くろくま、に、なられると、

やっぱりなんだかメイリンも

…ウメイリンとか、になってしまう今現在です。

メイリン、

笹の揺れる音は好きですか？

かものはしさん、

ワタシ、ハ、

英語、を、しゃべれます。

ナイストゥミイチュウメイリン！

（彼女が僕に送ったサインは、

たった一つ…そうだ、たった一つ、）

「中国は、

よい国でしょうか？」

「メイリン、

いいや、明琳…

彷徨うべきだよ、

日本にいても、中国にいても、

たとえそこが、

自分の思い描いている場所じゃなくても、

君のいる場所が、

君にとってのメイリンの世界なんだ」

メイリン…の（世界？）

そこは、ふしぎな国でした、

と、メイリンは、

原稿用紙に、中国で一行目をかきはじめる、

かものはしさんが、いました

かものはしさんは、

「かもねぎ、かもねぎ、」

と、しょうりゃく、に、ついて、

教えてくれました。

けいざいがゆたかになって、

生活レベルもあがって、

人は、幸せになれるはずと言った時代もあったのに、

かもみーるふれいばーさんは言いました、

「たぶん、

全員が不幸になるか、

それでもまだ、嘘を言い続けるか、

じゃないーかな…」

と言った時の、かもめさんは、

やっぱり、

しじんなのでした、まる、

でも、日本語はすごく苦手なので、

何を言っているのか、

あんまりよくわかりませんでした、

ごめんなさい、まる、

でもーナイストゥミイチュウメイリン、

メイリンは語る、

かものはし、

かもみーるふれいばー、

かもがねぎをしょっている

かもねぎかもねぎ、

うん、日本語の達人、

メイリン、日本にスカウトしたい、

そろそろ、移住しない？

――美しい花を　踏みにじる後悔　に・・

なごやかにいとしめやかに

永劫の声を囁く――

（人も無き　人も無き　晝の静けさ）

――他から加えられた一種の惰力を感じ！

――正しい場所は何処にある

（僕らが幸福と呼べるものは何？・・）

――太陽の光さえ暗く感じ　る・・

ああ、惨憺たる壁画の中から・・

余剰価値を数倍にする

神よ！・・わが神よ――

――わが耳には、カミュ、と聞こえた・・
次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた・・

「・・待つはただ、恩寵の雨――」

――つつましく病みたまう額のうえに、

空は手を伸ばせば届く距離に、あった・・

――黒髪は狭霧のごとくあり、魂は、幽愁の笛・・
うれい

遣る瀬なき冬の夜も、おお！・・寂しきひとりの部屋も、

――わが耳には、カミュ、と聞こえた・・
次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた・・

「・・いつまでも祈りてあれかし――」

[形動](内からあふれ出て)

[形動]花が咲き乱れる..

その声をえこそわかたね、

ああ今しばらくわかたね――

――わが耳には、カミュ、と聞こえた..
次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた..

エンドレス・リピート

人は何故、輪廻転生をせねばならないのだろう、

カルマ

人は何故、業と闘わねばならないのだろう..

僕等はリフレインの機械か？

――かも知れぬ、かも知れぬ..

ロボットか？ 剥製か？..

「あはれみたまへ、かかる夜もすがら、

むせびつつわれは聴けり。

眠れる人のうへに、

静かなる祈祷の雨はふりそそぐ。」

――かも知れぬ、かも知れぬ..

「..ああ、音も寂びたり――」

ランプ

ああ、立体交差傾斜路よ..

破滅はいつやって来る？ 掌中の珠が砕け散るように..

わが青き祈禱は窓をつたひ・・

大空の清き泉にあへぎゆく――

わが部屋に、心のうへに、

むせびつつ水はしたたる……

ああ、夜は更けゆく静けさに、

冴えて寂しき窓あかり・・

大きな液晶、省エネ機能、3D映像機能を搭載・・

ティヴィーの 洞穴――

或一定の空間に投げられた物体・・視座の交錯――

――わが耳には、カミュ、と聞こえた・・

次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた・・

過去と連なる道の遙か彼方に、自分が信じる価値や主張が、

何処かにある――私は私であり、時に臆病であり、時に卑怯だ・・

だが、過去とは非力でない、過去とは意志と意欲の顕現・・

たとえ、私自身が、私をどうすることも出来なくても――

このブラウン管の向こうの孤独は続く、

水底の石も心臓のようにやがては白くなる……

ああアトラスの瞳のように、

君はすごく重い物を背負っているせいで、感覚が遠い。

ランチ

午餐会…何もかもが遠いくせに、

生きているふりをする…こうして――立っているのも、

やっとの、崩れかかった白壁が、バベルの塔や、

ベルリンの壁、あるいは、炎上する世界貿易センタービルを、

彷彿させる頃…それでも、春、桜が咲き、夏、むこうの木立には

こまやかな若葉が、光っていた――

――わが耳には、カミュ、と聞こえた…
次第に、コミューン、と聞こえてきていた…

「…いつまでも祈りてあれかし――」

[形動](内からあふれ出て)

[形動]花が咲き乱れる…

そのえがたきこそほまれ

ああ今しばらくぶりのほまれ――

「…ああ、どんな夢を見よう――」

優婉な姿よ、…大悲のまなざしよ、

切実に求め続ける疲労は、僕の筋肉や、頭脳を借りて、微笑と言う、

色も形も、剥落してゆく、あらわな次元の海に溺れながら、

秘密なんか存在しないと無意識に嘯きながら、あまつさえ…

うつしよの汚れを葬り、よほど高尚なこと、高い閾さえ明瞭に、

僕は悲しくなる・・逆さまに吊り上げられた、鳥・・

小さな穴があげられて、死の瞬間から、増殖する、闇――

一定の門を潜り。内臓はえぐられ、おお、腹は、裂かれ・・

――わが耳には、カミュ、と聞こえた・・
次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた・・

僕は、欠点や弱点に、小鳥の血の臭いを嗅ぐ・・

短所とは、個性である、と憶う――社会という一斉合斉の猿どもが、

つねに待つ劣等感が、人を傷つけたと言うなら、僕は見よう、

みじめたらしい君の賤民根性を、その一点を導かねばならなかった、

君の歴史を、人生を・・ふたたび再現する心の空へとうつり消えてゆこう、

あるかなきかの片思いのように、他者を、偶然の独立を、

必然的な回帰を――ああ、小鳥たちの死と思おう・・・

――わが耳には、カミュ、と聞こえた・・
次第に、コミュニケーション、と聞こえてきていた・・

――美しい花を 踏みにじる後悔 に・・

外国人の女性モデルの水着とか下着を

ちょっと、鼻の下を伸ばしながら見ていたのだけれど、

まさか、あなたがと言う人はさすがに目が高い、

知っているかな？ 君は・・

――*Victoria's Secret*

海外セレブ御用達のブランド、

みんな全身で、私は美しい！

・・って、本能剥き出しで、

美を放射してる。最高さ――

（ごめんよ、エロい男になれたらいいんだけど、これも勉強なんだな、

セクシーなデザインに興味があって、ファッションショーも *You tube* で・・）

、、、、

もちろん、僕が本当に鼻の下を伸ばすかどうかは、

君の想像に任せるけど、僕のお気に入りの手口は

パジャマで、本当に素晴らしくノリノリな展開なんだよ。

胸元のボタン一個だけつけて、

既にパジャマとして機能していない状態で、

ファッション雑誌の表紙や広告キャンペーン風に、

あはん、という感じ、私を見て・・

もう挑発的、あるいは、煽情的、

つまり悩殺なのですね。はい。

これがーセックス・シンボルというほどの身体的魅力を持ちながら、

女性から憧れの眼差しを送られるスーパースターの姿なんだね・・

でも、もちろん、一年間で一二〇〇万ドルを稼いだとかいう神話は別として、

ナオミ・キャンベルよりクラウディア・シファーが好きであることは別として、

（おいおい、何、関係ないことを書いてるんだ！）

買った人が、そんなエロティックなポーズ、

あるいは目的を見失ったセクシーな恰好をするわけもないのに、

（もちろん、トップモデルを登場させるスタイルや、

セクシー路線であることは別として、）

購入者がそういうことをするために買うとは思われないのに、

もちろん、そういうことをする人もいると言う人もいるだろうが、

普通の感覚として、ごく少数だと思われるのに、

やっていることがファッション・ショーさながら！・・でも、

、、、、、、、、

（見せるということ・・）

ひじょうに僕は、感銘を受け、ある種の滑稽さも売る側の論理としては正しい、

とむしろ感じられた。あるいはこれが斬新だということに、

カルチャーショックを感じた、ひとりの日本人である。

（ブランドという概念-イメージの総体・・

個性が重要視される世界での王国的な価値）

でも一番面白かったのは、何と言ってもバッグで、

——もちろん、面白いなんて言ったら失礼にあたるけど、

ピンクの下着だか、百歩ゆずって水着だかを着ながら、

ピンクバッグを持っていて、

（ちなみに、ピンクは、女性的な象徴の色であり、

性的な意味合いを持つ。が、同時に興奮状態を落ち着かせる色としても、

知られている。またピンクは日本人にとっては、桜の色だ。

——という蘊蓄はともかく、ヴィクトリアズ・シークレットは、

ピンクを基調したものが多いのだ。もちろん、ピンク以外のものも、

たくさんあるけれど…）

ともあれ繰り返そう、ピンクのバッグをポーズ決めながら持っていて、

よくあるように、商品価値が女性に映ってしまい、

バッグが余剰物のように見え、それいらんんじゃないかな、

むしろなんかもう、取っ払っちゃえよ、という風に見える。

イメージ上の世界、箱庭の論理、

最後に希望だけ残ったパンドラの箱——買って下さいね、という感じで、

もう実際この写真でどれくらいの効果があるのか僕には訝しかった。

（けれど、ブランドってそういうものなんだなあ、わかるかい？…

僕が思う所、ファッションというモードを売っているのであって、

購買者の日常生活というリアリティーを求めているわけじゃない。

だから…差別的な意味合いではないけど、一般人が、その広告に関して、

違和感を覚えても、尖鋭化した、何を見せるかという幻想の前では、

一切の意味を持たない。幻想のシナリオの産物が商品なのだ。)

—— *Victoria's Secret*

海外セレブ御用達のブランド、

ああ、たとえば絵画なんかでいうところのシュールレアリスム、

あるいは写真で明らかに日常生活で目撃することのできない、

美景を撮ろうとする傾向に似て、

人はその希少価値で判断する、

そこにおいてリアリティーの所在など、

とりたてて重要なことではない。

世界で最も美しい女性にはまず、誰もがなれなくても、

(ジゼル・ブンチェンや、アンジェリーナ・ジョリーなら、

そう書かれるかも知れないけれど、)

「〇〇似の女性」にはなれる、こういう、イメージ投影の工程が、

日常生活で表現されるようになったのは、

僕は多分、希少価値が情報を流す側によってコントロールされていて、

それであれば人は特別になれる、と思いこまされているからなんだ、

しかし報道規制のように否定的な意味合いではなく、

むしろアクティブな発想で作られていくところが、ブランドであり、

これがむしろビジネスシーンになっている、

(でも、セルフイメージを変えていくのは大切なことだ、

常に変わり続けていくセルフイメージ！..でも、いくつか、

わかることがある、思いこみは危険だということ、

しかし信じることは現実になるということ、

自分の失敗を許さなければいけないということ――そして、

過去の失敗を忘れなければいけないということ…)

――さて、日常生活とは何なのだろう、

時代の流れと、日常生活のパターンと…

これまで残って来た伝統と、風物詩とを感じながら、

地名だの、年齢だの、酒飲んだだの、妻がどうだの夫がどうだのと、

やりたがる――大人たちを思いながら、

無内容なとりとめのない会話、

繰返されることに耐えることだけの毎日、

それならいっそ、幻想の方がいいんじゃないか、でもそれも、

思いこみなんじゃないか、と思ったり、でも思うのが間違いだと思えたり、

夢を見られなくなって辛いね、頑張れ、

という、何もやらない大人たち、とりたてて無能な大人たちのおかげで、

生きてるのがつらくなり、

誰も読みたくなる詩が生まれても、

そうですね。はい。

と、片付けられてゆくかも知れない…

何度も繰り返したけど、君の心に響いたかな？…

―― *Victoria's Secret*

海外セレブ御用達のブランド、

みんな全身で、私は美しい！

…って、本能剥き出しで、

美を放射してる。最高さ——

前向きに生きてるとしても裏がないわけじゃない、

きっと、そんなにカッコいいわけじゃない、

けれど、スプーンで食べ物を口に運ぼうじゃないか、

自転車の乗り方を覚えて、鉛筆でひらがなを覚えたように、

何度も何度も、大切な嘘を、

心に響かせて、自分の名前を書きたいね…

どう思う？——ヴィクトリアズ・シークレット？…

性愛の対象とする男性消費者を不都合な存在である、と切り捨てるような、

男性キャラクターを全部取っ払ったようなこの会社、

（もちろん、僕の勝手な印象だけど、）

でも、女性の時代を作っているのは確かにこのイメージであり、

これはマスコミメディアが好んでいる論理の一つだ、

しかし、男性を持ち上げるための要素なんか何一つもない、

（そう、感じてしまうのも、僕の勝手な心象だけど、）

近頃男のどうしようもなさ、僕は胸が痛いんだよ、

ねえわかるかい、ああ…ヴィクトリアズ・シークレット？——

その日

白という文字が

日くつきに思え

ぼくの口は

問うことを

田と畑だと理解した

サラダの味 #ave-24*

わたしの靴はサラダしてる

たまにカボチャのにおいがする

そんな アポガド！

いけないいけない、つい野菜の名前が

大根してしまう

言うつもりはないのだ ピーマン！

わたしの靴はサラダしている。してる

ボウルみたいに

ドレッシングでまぜられる

スミッソン「螺旋状の突堤」みたいに、

シェーンベルクの「月に憑かれたピエロ」みたいに

けれどもそのサラダの味

あじ

が、どうしても忘

わす、

れられな い

口ひげとチェス

——ちゅうかりようりてんにいる　ちゅうごくじんはいう——

イマセンヨ

イマセンヨ

ココ　イマセンヨ

（そんなことに気付いた）

目には見えてはいませんが耳には聞こえているのです。

い　るのです——

ルル　なのです——ララ・・

[でも、そんなことをまたすぐ忘れようとしていた]

.....

.....

夢の中へ——。

・・・まるでスタンド・バイ・ミー！

冒険をしようぜ、家を出ようぜ・・

ひとつのありきたりな目覚めの中に

頭の中で燻っている　ある人の白い息がある

しかしそれは　黒い汗だ・・

僕はかろうじて櫛で梳かすことのできる直毛から

濃紫色をした楕円形の葡萄を はじけさせる――

と…ポワロが浮かぶ 灰色の脳細胞

でも、僕なら 白と黒の脳細胞がいい

半分ずつ、分け合うんだ…

ビリリリーン！…

ビリリリーン！……

しわひとつない 無垢の 汚れなき侵入と

不平らしい顔もせぬ審判の秩序をこうていする態度

いつでも変わらず 数字を予想することのできる頭脳と

かれの順番が来るたびにひそかに生み出されねばならない

手の秘蹟がある。

ありきたりな目覚め に

ふかく、ふかく匂ふ木犀――

――木星…

（たとえば、それを

ルーレット盤の回転を止める

石鯨の匂いとでも呼んでみようか？… ）

物音の絶えた冬の夜ふけに

微かな風すらもたえない・・

「ここにあるのは、ひしゃげたコインロッカーに

・・・叩きこまれた、詩篇だけだ――」

かれの心のシャッターを肘でつつけば

閉ざされた記憶のモールディング！

ヨーロッパ風の暗闇から、これまで甘い歌を

ささやきかけたことのある、シャンデリア！

おやすみの・・・ひ・・・・・・ひ、が・・・・・・

あわ、に・・・なろうとしている・・・・・・

ドイツ・バロック特有の過去ゆえに

ひたすら恐れたもの・・・・・・

引っ掻くような共鳴音を響かせろギロチン！

.....僕の言葉は...あまりにも闇雲で.....

...踊り場のステンドグラス...みたいだ.....

.....整合性のない...空の天井にぶち当たる...

.....今宵...重力蝶がしたたる.....

（何を？）と言えば

――知っているくせに・・

――知っているだろう・・

――何もかも　さ……

引っ張り込むような、

ひそかな曲線、建物の無意味な余剰、

たとえばゲームの背後の神の視座。

まだ眠らずに坐っている、

まだ、腹の上に、

歴史の音響――

柱から、窗枠から、

――そっと枯草の間から、

吸殻が見つかるように……

かるやかな神々などを、おのおのの手が暴いた。

「すり抜けるだけだ」

スチール製の椅子。

ほんの二、三分の世間話。

またねじを巻く。

（こんばんは・・）

それはきわめて巧妙な意味で、

壁面の中に刻まれた口ココ調の装飾。

（こんばんは・・・）

凝視する――どこかで笑い声が聞こえる。

「おい、出て来いよ・・・」

パチパチ、

と、焚き火の音――

（ああ、酔った靴のタップダンスが聴こえてくる。）

かれのささやきを、バケツとブラシは聞いた。

たとえそれが紙の上でも、

ひそかに純化された形態を目指して、

ああ、翼のないものたちが、遠くの日なたに干されてる、

地を這う者よ、暗がりに貢ぎ物をせよ――

ありきたりな目覚め に

ふかく、ふかく匂ふ木犀――

――木星・・・

（こんなに朝早くだと

海の音がきこえます・・・

ふ

呼吸なんて忘れそうだ―― ）

いま、バケツのなかにブランデーがとくとくと入れられ、

ブラシは、一本のキューになろうとしている。

そして、したたかに頭を打ち付けろ！

口ひげとチェス――

（この、）意味がよくわからない、

一体ぜんたい何だかよくわからない謎だらけのミステリイ、

でもこの切符が、口ひげとチェス、

何処まで道は続くのだろうか？

それは、運転手にしかわからない…

通り過ぎる車のライト…

ひさしぶりに ずっと遠いところにいる

人のような感じがして、

人のような 気がして――

ながく胸をわずらっている僕は下品だ…

長靴に蹂躪されたうつくしい夕暮れ

重い、重い

罪はピザの斜塔！

手を這わせた太腿に

戸籍は

太陽に棲む鴉で、近 親相姦しちまえばいい

虧けた月が

ぼくを盲目にさせる

排泄するニトログリセリン

啓示の瞬間。ぼくはVivid

ストリップショウ・マラソンをしたい

デザインするのは「時代」

そしてそこに息づく男根や、女陰のことだと思う

さあ、かつて裂け目だったものよ

頂きより霧を俯瞰ろして

洪水しちゃえ、のうないのしょうべんで

簡単明瞭な祈禱は

信者を増加させるので一年かかっても終わらない儀式

さあ、ぼくの変態狂たち、

カラーンとした夏に遊ぼう

（ハー、コーリャコリャ・・・。）

イエス・カモメは両腕をひろげて唾を吐く

もちろんそれはアンタの顔にかかるだろう、

めちゃくちゃなのだ、この人

まったくもってくだらねえ奴なのだ

——でも、世界は美しい、

韻律はスフィンクスに、あたらしい謎を提供する

ぼくは純粹に妊娠してる！

彼岸花

彼岸花が図鑑に載っているのを知ったのはいつの日のことだったろう

（と信じられているそのもつれあやとり）

ヒガンバナ（彼岸花、学名：Lycoris radiata）は、ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年

草。クロンキスト体系ではユリ科。リコリス、曼珠沙華（マンジュシャゲ、またはマンジュ

シャカ サンスクリット語 manjusaka の音写）とも呼ばれる。学名の種小名 radiata は「放

射状」の味[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%8A)

[http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90](http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%8A)

自他――いまになって、あちらとこちらの結びのまま」）

（「aya to ri しろい背骨がある

ぼくのふるさとの山が歌う ぼくのふるさとの川が歌う

もしもし市長さん 議員のおかた、

はだかでもろめくそのかっこうは

…ざくろの甘酸っぱいかおり。視界がレモン化する

ざくりと裂かれ――表情もかえずに、炎がのびてゆく

ざりがにをとった池、――海へ、蛸が墨を滲ませる

墓まではふくざつに折れていたの

で

見知らぬ町から

町へ、

と

きおり

何処で何を追っているのかわからな

い

燃えて燻って横向きの身を触覚いや「ツノ」とツノをこするみたいに

光をみんな失

った

針金

○紙の破れ 毛のかたまり かた 蟻

コーナー、スピン。ビルゲイツ・ゲイト

プリミティブなジェネレーションは、突然変異を翻し、幻影を揺曳する。軟体動物、怪獣

の肉。でもそれらはでんでんでむし。電気を放出。基地的電力を放逐。「たたかひ」――

そうだ、「天地」の、「Twitter」の彼岸花はぼくの眼球ーアップ！アップ！ 大脳にあたる

――いつかはみのる。よしおかみのる（矢がわからない、射手がわからない）

李通斑捨手井津句 リップスティック その名のとおりカオスである

蘭樹里胃 ランジュリー その名のとおり消しゴムである

額縁から 筆筒から 押入れから ステレオタイプなへそくり

見付けるような ホームベースぎりぎりの渋い内角低めへのシンカー

ストライク！　＜ボール！＞

物音をたてないことにして演歌をうたおうと思っ

た

どれだけの涙を　たくわえねばいけないのかアジアの精霊

雨の日には

雨が

彼

岸花

とうめいな銀杏みたいに生きようとする影

が

ステンレス

時代

自然の景物や気候や草花を「雪の日には雪！」

すかりすかり/ぢゃあないかな、きみね

○傷口という短歌の名前をつける

メガホンを使わず眼の前をただ中学生が行き過ぎれば「アルファでありオメガ」と

夜の静寂がのしかかって来れば――「密林も消ゆ」・・・されど木霊す「理性を抑ゆ」……

「ご飯を食べてから、レンタルショップへ行くぞ」

「友達から、台湾のCDを借りるぞ」

「奴は言った。それらの日本語学校をご紹介しますよう」

「いただきます”か」

無邪気に笑っている

[話し手→問い掛け→聞き手→要求]

その裂け目の底から湧いて出る

放課後。怒りの谷。考える人。マグマ。

神のみぞが知る。誰でもない者が知っている。…

【重要な】

古い朝鮮のおとぎばなしが転がっているメルヒェン惑乱

して

慶州のハイドレンジア

ブルー

の空の空の空

になって

牛や豚が売れるように人間も「売買手

続き」

国だって地球だって「おもち

やさ」

>>> ややや、ノーヘルでバイク乗ってるようなもの

>>> 自転車を買ってサドルだけ盗まれるようなもの

———突然変異で巨大化したのは ……大気汚染？ ……核兵器？

○傷口という俳句の名前をつける

鬱となりてバターとなりたき地殻応力天気図

しゃべらぬとは言え、時間はヒートポンプ

「、すこしきびしい」

「インター）ベビー）フェイス」

「、すこしきびしい」

「～のわりには」

しかしここまでロールアップされてしまったら

元の姿には戻れない → 本の葉に使われ →

端に埃がつき → こいつに相応しいちぢんだ姿は。

補 正 す る 脳 と 、

錯 覚 す る 脳 と 、

>>> ふぉーしーずん おなじすがたの ひがんばん

>>> 春 夏 秋 冬

>>> 嫌 い さ ソ フ ト ・スティケイト

あるのだね、迂回

路が

いくつかの焼けただれたも

のが

あの薄暗さ不気味

さが

杭のようなも

のが

場末の映画館のフィ

ルム

時計の振子のようなネオンがあった

ね

散乱する折り鶴の瞬時に消滅す

る

赤と黄

だんだらま

だら、

もろもろの思い出を語る ぼ

ろたち

ふくよかなきれぎれにう

ずめ

バサバサ ビュービューと吹

いて

錯覚する脳と、

補正する脳と、

>>> 大嫌いさ

>>> 夏なんて……

しかしここまでロールアップされてしまったら

それはもうきつと肝っ玉が縮みあがって

“素”になる “心霊写真”になる

お腹がぺこーんとへこんで お腹が空いた

ちょっと悲しいBLUEな話をひとつ

ますます、わきが、かるやかになる。滴るような

じゅくじゅくじゅくじゅく なやみ 苦患

人はこう言う。プテラノドンのようなかわきのわきが

誰もそれが彼岸花ということなのだと気付かない突飛さ。奇抜さで

じゃあカレー……ちがうな、ハヤシライスじゃなかったハッシュドビーフで

という！互換性で！…

ほとんど驚きも感じさせない話し言葉のように愛用される秘訣で。

どうしたことなのだか、とうがらしのやねしかわからない。AならA！

BならB！ でも実はそういう人は足が短くてけちなんです

という、きりのない霧で

わきがなんです/根拠はないけど、だいたい『限定』したいっていうか

さてどういう接続で瓦のことなのか。それとも河原ですか？

（それはたぶん、プテラノドンの翼というユーモアがわからない人にささげられ

谷町って急に浮かんだけど、どうです、そのことですか

わきが／すてきなアドレセンス期を思い起こす

「おお！ 腋臭」

もっと別次元のパフォーマンスが求められている

サイコネキシスのボウリング …たとえば

たとえ ば そんな感じ の 花ことば

環境団体に文句つけられるようなすげーヤツ

パープリンと歴史感情根刮ぎやるような

>>> ピンポン玉みたいな ？

yes. あどばるうんみたいに僕等はぷかぷかとんでいこう

眼に浮んで消えない熱/風速100メートルでいこう。元気ないぞ、

ぴょんぴょん！ パアッ！！

>>> ピンポン玉みたいに ！

禅をする精神集中する円い窓の一点を見つめるみたいに

トンボの目しよう。テレビの暗い設定にしよう。暗室へいこう

>>> ぴんぽんだま・あびいる

思い出ってヤツは航空便や貨物船のようなものですかねえ

>>> ぴんぽんだま・つけものいし

ぴんぽーん インパクト強くてけっこうツボです！

>>> ぴんぽんだま・ぴ ん ぽ ん だ ま

アッポーンダマ「たまやああああああ」

夏/もっと彼岸花が好きになる。なるって言ってんだろ、たわけ！

それはもうきつとこいつ売文家だっというようなお手法で

になる。 になる。 になる。

彼岸花の図鑑にはいつも幽霊が佇んでいるんです。カラーテレビ

/時代劇みたいだ

ぼくの腰はアバンチュール♪

きもち

流行らせたいね、ぼくの歌詞さ。

それもおそらく 尻こだまを抜かれた すぽン すぽぽン ゆうれい

「栓を抜かなかったらどうなの？ 音が小さくなるの？

臨場感は増すの？ えきさいていん・な・さらうんど・・・」

>>> ぴんぽんだま・ぴ ん ぽ ん だ ま

膀胱が膨らんで

ゆくよ

フワフワー もっとふわふわなフ

ラア

Flower

もしかしたら高速道路

のように

彼岸花の上には渋滞

があって

渋面を

つくって！

（もう既に腰が痛いんだが や

れやれ

蛇

みたいだ

セーターの重ね着み

たいだ

ブーンだ！ 脱

皮したい

扇風機の

骨折だ

早漏する脳と、

遅漏する脳と、

>>> でも高速道路は渋滞してるしー

>>> こんな注意書きが付け加えられているしー

>>> 鱗どころか水垢までついてきそうな細かい文字だしー

{ぼくの血を吸わないで、ぼくの血を吸わないで、、ぼくの血を吸わないで、、、

ぼくの血を吸わないで、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、、

ぼくの血を吸わないで、、、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、、、、、}

ぼくらは吸血鬼になったのかも知れない。

原稿用紙が今すぐ殺せと教えしや！ 接続できない（の）裸婦像

沈黙への依拠まあ静かな、静かなタウン。タウン。ごーすとたうん

その家々には食器棚にしたいがしまっているんですね

その川辺にはすてきなかおりのアヘンさんがおどっているんですね

大学の裏にはダムがあって滝があってガ●ダムがあって

小学校へ行くとみんな拳銃！ガンを所持していて..

修道士たちがオ●ンコと叫んでいて、でなければセ●クス。――

町へ出れば北●のケ●シロウの敵みたいに巨大化していてやっぱり

ガ●ダム。気がつくとも六町目から煙があがっていて

でも変化の表現/不変化について考えていると

遺産を相続するような気持ちで戯画化する

なかなか掃除機の手を付け替えるような発想が出てこないけど

反社会行動の是認するような 起死回生の爆破

おめでたい技のオンパレード

ネタ！ ……わかってる、わかってる、

それはもう彼岸花じゃないってこと。…

>>> ピンポン玉みたいな ？

yes. そんでもって そ ん で も っ て …デ ス ペ ラ ー ド

朕！ 誰だそりゃあ。殿！気取ってんじゃねえよ、この三文詩人

面白けりゃそれでいい、分かり易けりゃそれでいい

もっと笑えよ漫才！ もっとハリセンでお前たちモグラを死ぬまで叩かせろ

>>> ピンポン玉みたいに ！

軽いこと。軽いこと。ふわわ～わ～ん 一刻も早く飛ばしたいんでしょう ？

やりたいんでしょう/殴り飛ばしたいんでしょう

脅迫して素敵な国ね！ 性犯罪たえない生傷たえないスペシャル・ブレンダーね

>>> ぴんぽんだま・あびいる

たまにはス●ンと蓮根。あ、胡瓜もください！

犯されたくない！ なに気取ってるの、このヘンタイオタク野郎

うあうあうあ！ ふあーっとしたらもう要注意 危険信号ゼットンなみ

>>> ぴんぽんだま・つけものいし

ぴんぽーん 最初に凶鑑に入る時によくよく注意してくださいね

>>> ぴんぽんだま・ぴ ん ぽ ん だ ま

アッポーンダマ「たまやああああああ」

ザッパーン（潜水が始まる（用水路が始まる

お仕着せの世話になって長い、「人間」を奪ってはや幾数年

旅人になって素っ裸になって飛びだしたぼくの母語は

火がん花。悲観花。――このような調子ポンコツコンピューターで

「つぎはぎ」の「イカクサイ語」になってしまって..

{ぼくの血を吸わないで、ぼくの血を吸わないで、、ぼくの血を吸わないで、、、

ぼくの血を吸わないで、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、、

ぼくの血を吸わないで、、、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、、、、}

前触れ／

ためらい

女性と男性をあわせる書法みた

いに

みだらなうつろい、起きるなりシャワーをあ

びて

始末におえないぼくの股間はあいかわ

らず

すてきなスラ

ツシュで

ソードで

そせいらんぞうされ、はん

らんし

じつはもうオッサンみたいなやつが取り残

され

聖歌を壁に塗り込めている

みたい

悶絶しそう

な羊です

ごめんあ

そばせ

クールになりき

れなくて

ごめんあそ

ばせ・・・！

もうとっくにバレているんですよ・・・、あなた頭いいんでしょう？

いえいえ、馬鹿です、文章みたらわかるでしょう？ 阿呆なんです…

文学性の欠片もなく、知性教養も全部ハツタリ。あら、ご存知ない？

ぼくという図鑑の中には頭からワタ出ていますからねえ、脱脂綿トク大の

…彼岸花にそこからかわりますよ、Change!

のことだから/のことだし/テレパシーでの会話

のこぎり。焦げ臭い摩擦のにおい、タイヤの焦げたにおい、

そしてクラゲ、、、人魚になりそこないホステス、、、

>>> ピンポン玉みたいな ?

yes. そんでもって そ ん で も っ て …

未知の世界を強い意志で主張！ 社会通念や常識、歴史感情、

複雑で複合した根拠や理由。要らないだって奴らもぼくもみんなバカだから

面白けりゃそれでいい！ 脱力系とか銘打たれてもいい

>>> ピンポン玉みたいに !

軽いこと。軽いこと。ふわわ〜わ〜ん 一刻も早く飛ばしたいんでしょう ?

不法入国したんですか？ 推薦エイリアンの巻

続きはねえけど、含みをもたせるのがマンガ的手法ってやつでしょ？

>>> ぴんぽんだま・あぴいる

ぶあぶあ詩なんでしょ？

ああ ことわざの一つです 一つ ! ひとつ で す

うあうあ詩！ 生意気に自己主張する若い音楽家

>>> ぴんぽんだま・つけものいし

ぴんぽーん だって図鑑なんて頭めちゃよさそーなもの

マニアックなみさげはてたもの。電子のひと言の要素も・・・！

はいいいなさそーなもの。あなた、受け入れたわけでしょ ？

>>> ぴんぽんだま・ぴ ん ぽ ん だ ま

{ぼくの血を吸わないで、ぼくの血を吸わないで、、ぼくの血を吸わないで、、

ぼくの血を吸わないで、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、

ぼくの血を吸わないで、、、、、、ぼくの血を吸わないで、、、、、、 }

ねえ、いまも詩って必要とされてる ？

ゴールデン・ゲート・パークで知り合った鳥・・

一〇〇〇エーカーの土地に、庭園や、植物園や、コンサート・・

気憤い、何処かの場所を鳥が見たような空中からの視点で・・

透視図法で、画像と直角に交わる仮定の一点。対象を眺める位置。

、、、、、、、、、、、、、、、、、、
知らぬ間に背中を剥ぎ取られている、

背骨のあたり――家などが反対向きに接し、

たっぴりと日常に繋ぎとめられている（背中に眼はない・・）

痙攣する咽喉さ、・・臼から見る類似的冷笑の断面さ！

月の地球に対する引力圏半径は六万六五〇〇キロ。

ハードディスクの読み出し部分-強磁性と非磁性の薄膜を重ねた多層膜、

（この、）巨大な引力と、宙ぶらりんの空中に・・、

黴臭い革表紙の陰に――黒ずむ。暗くかすかな走り梅雨・・

それまで少し感じてきた器官と機械を行き来する、季節が、

この不思議な網膜　　[窓はここにあった・・]

あなたは　扉であってほしい

たった　一つの合鍵！で・・。

（人は三角定規の空白を覗きこんでいる・・）

あなたの名前は何ですか…ああ、心が悶える、その名前、

人の名前、文字の名前——女の名前…

名前を軽々しく口走る男たちが僕には羨ましい…それは天使の名、

呼べば愛の女神の微笑みが浮かび、募る想いがひそやかに、

途切れることになるかも知れないのに——

いつわりの名でいいから、あなたの名前を教えてください…

「わたしをみつめる あなたのとお

かさなり 」——Scanner——

名前？…あなたのため息が翼となり、もう既にわたしの魂を見つけたというのに、

名前など呪文の類、惚れたはれたの気安い通り名ではありませんか。

けれど、不安定な関係を告白する、…あなたの、ぎこちない、その言葉が、

わたしの胸を射止めます。キューピッドの矢、さもなければ…

毒蛇にかまれたと思えるほどに…忍び笑いなさるあなた、蒼ざめているあなた、

あなたは悪魔ではありませんか…あなたの眼がもうわたしに触れている。

「名を名乗れ」（事物の呼び名にも人の呼び名にも…）

「名前を呼ばれたら返事をしろ」（当事者とされている者の名よ…）

“沈められたもの”が表面から、…浮かび上がる。

(固体表面は不純物の混入や格子欠陥によって再結合が起きやすい…)

血の色？ 潰される。一本の鎖、――皮膚

低い叫びは、きっと、音譜にはならないから

(鎖を敵の武器に絡みつかせ、引き寄せて鎌で切りつける。)

…でも新しい呪文は閃光のように、完璧な天体を求める

脚が赤い舌先みたいさ、――火打ち石みたいさ！

触れていると？…では、僕はあなたの傍にある暗闇の所まで行きましょう。

なのに――なんて明るい…まるで、あなたの周囲から光がこぼれているようだ。

薄暗いジメジメした所に、どうやら僕はいた。美しい天に輝く星や月のように、

僕がそこまで行っていいと？…ああ、そこまで行けば、

あなたの肩に、その美しい手の甲に、キスを一つせねばなりませんまい。

――盲目で、無口な僕には、あなたの眩しすぎる光の前で…

もうこれ以上、おしゃべりが出来そうにもない、でもだから心臓が止まらない、

けれど、あなたの傍に行きたい…臆病さが取り柄の男には、

あなたの傍にいることなどできない…

恐ろしいことだ

(かたく にぎりあった あのときから

めまぐるしく走る街の壁… 電光の内腿)

前進を阻むもの。進展の妨げとなるもの…

その声を聞いていると、僕は無性に、自分が恥を多く持った、
卑しい男であると思えます。小鳥たちが羨ましい、あなたの友人..
いいえ、あなたの肩にそっと手を置かれる、
お父上や、恋人が羨ましい...僕は、あなたの前では、裸同然の罪びとです。
まるでフルート..いいえ、あなたの声はオカリナのように、僕には、
梟を想像させます。夜啼鳥..いいえ、あなたはいつも、
僕の心の中で静かに囁きます。恋？ いいえ、あなたは時計です。
たとえば真夜中の柱時計..僕は突然、
無性に泣きたい気持ちに駆られ、跪き、思わず神に祈らぬ僕でさえ、
神に祈り——この孤独を、絶望を取り去って欲しいと願って..しまう——
僕はあの名も知らぬ女を愛してしまったのだ、
女神を愛するとは不届きで、破廉恥な。ああ、それなのに、
..あなたに近づくたびに、薫る、この香水——
なんてよい香りだろう、失神したら..僕はどうしよう、大きな口を開けて、
涎を垂らしたらどうしよう。憧れている女性に、何と無様でみっともない、
ああ男であると知られたら——どうしよう...

記憶は荒い息づかいでわたしの純潔を奪う

わたしは犯される——きっと、わたしは犯される..

かすかに窓が震えるような海の韻..言葉のひびき！

（また、）物の出す音！ 強音の音節と弱音の音節を

格子模様のように組み合わせて――重ね合わせて・・

無遠慮に侵入する・・・不意の交錯！

「 わたしをみつめる あなたのかお

かさなり 」――Scanner――

（ 薔薇を持つマリー・アントワネット

「触れられて・・・？」

触ろうとすれば 槍の穂先

触ろうとすれば 象牙の塔・・・

何かが身体にふれて、そのものの存在が感覚的にわかる・・

ひんやりとしたものが顔に、この安い肌に触れる――

だから触れない 沈黙する

だから触れない・・

なんの痛痒があろう 水の影 風見鶏

千年も経ったら粘液状で つかみどころのないものが静かに

（この地上にあり）-《大量の土砂を入れて地上げする》

その時、ペルーの南部ナスカ地方の砂漠に刻まれた巨大な図形を憶った、

さる・コンドル・魚。次はどんな違う自分になろう――

ああ、あの美しい男は何と自分を知らないのだろう・・

あなたが大きな口を開けたら、女性たちが、思わず覗きこんでキスしてしまうのに。

そしてあなたが涎れでも垂らしたら、女性たちは――誘われた、と言って・・

あなたの一晩のお供になってしまうのに・・・罪な人、わたしの口を軽くして、

蓮っ葉な女にしてしまう。わたしには恋人などいない――のに・・まして、

もう誰とでも結婚できる女・・お父様になど、わたしの肩には触らせません。

肩に触れば、それは男のものになった証・・あなたの掌が、この肩に触ったら、

わたしは、きっと燃えてしまう・・なんて細い肩――骸骨のよう・・

女はいつでも、臆病なもの。誰の声も・・聞きません、慕う人の声以外――

ああ、あなたの声が、もし耳元に聞こえたらどんなによいでしょう・・

きっと、わたしこそ、失神してしまう――でも、そうならないように、

わたしはスカートの裾を握って、いつでも、あなたの前から去る理性だけを残して、

いま、あなたの目の前にいるのに――もういっそ、ひと思いに、

あなたに唇を奪われ、もうただ、永遠に眠りたいのに・・・。

・・・でなければ――そう！でなければ・・鼓動が削り取られていくむなしさを

表現できない！分かり合えない・・。

胸の奥には空に昇った階段があるよ！ 鉛のベッドが

いつからか化石化した木〔翹音を真似・・〕

稲妻のように進む・・進む-よ――

（埋没している間に石化して固くなった・・本当は、

消滅するはずの古いものだった-フウインボク-リンボク..

恐竜やアンモナイト——石炭・石油・天然ガス——)

あなたこそ、自分を知らない..そんな死の苦しみなど、キスにはありません。

キスをするなら、まず、僕は頬から。そして次におでこ。次に瞳。

そしてあなたの——耳に、自分の気持ちを打ち明けたい..ああ、あなたを慕う、

たくさんの男たちに殺されてしまうかも知れない。僕は、まず、

あなたに手の甲にキスをして——そしてあなたの瞳を覗きこむんです..

すると、あなたは、もしかしたら同情されて、

どうしてそんなにオドオドしているの、と思わず、

言うかも知れません...違うのです、あなたの顔を見る勇気があるなら、

もういっそ、あなたの代わりに唇を求めて、僕が、その枢の主となりましょう。

どうせ、僕の人生は墓場です..あなたに恋をした瞬間から、僕は罪びとなのです。

あなたの肩に触れたなら..僕はあなたの壊れやすそうなその身体に、

蛇のような腕——そして男が女にそうする、力強い呼吸で、

あなたを自分のものにしてしまうでしょう..僕は心の罪を持ちながら、

あなたの目の前で、一度だけお辞儀をし、そしてこの場から、

迅く去ってしまいたい、ああ、僕のことなど、もう忘れてしまえばいい——。

、、、、、、、、

眼球という窓から-角膜・脈絡膜・網膜——

あなたの瞳にあずけられた その重さを確めながら

もう、世界はすっかり変わってしまった（と言う、）

ばらばらになってしまったと言う、夜は慈悲の色に染まり

壊れたイメージの山。ぷしゅっと亀裂でもはいれば

・・・途端に、煙でも出てきそうな街で探しているもの

忘れる？・・・何故忘れられましょう、あなたを見た瞬間から、わたしの人生は、

あなた、ただひとりきりに左右されるものなのに。わたしは、

あなたの胸を見た時から――わたしはきっと、この胸が好きになる・・・と、

心ひそかに思っていたのです。来て下さい、そして、抱き締めて下さい・・・

恋の魔法が解けぬうちに・・・あなたが、消え去らないように――。

「もう攀じ登れない」ラプンツェルの塔・・・

あの髪は夜――蜜のような重たい涙を流す夜

貝の構造のような 脱皮の途中

干からびていた 脱皮・・・

――折れそうな、わたしの腕の中で

――折れやすい、わたしの腕の中で

（ 愛していると囁いて、

おお・・・何と素直で正直な言葉――ああ、怖ろしい、僕はもう嘘はつけない、

いま行きます…神でさえこの女の前では、運命の悪戯など起こせぬでしょう。

何故なら、僕はもう、あなたにただ、抱かletたいだけの男だから。

そして、僕は耳元で、世界中の不幸があなたにはつゆほども関係のないことだと、

僕は教えねばなりません——ああ、灯りを消して下さい…

僕がもっと正直になれるように——もっと、あなたの身体に触れられるように…

ああ——なんと、柔らかい…あなたの髪、頬、そして耳…

これはもはや一日ではすみますまい…神の造形した永遠の形としか、

僕には思えない…女とは、したたかで、男を馬鹿にしているものだとばかり、

思っていたが——この女の素直さはどうだろう、そしてこの女の、

胸にこすりつける、頬ずりの感触はどうだろう…

部屋は　いま　わたしを呑んで

遠くから　いま　わたしを　みつめて

（眼球が無意識に律動的に動いて…悟る、この焰は、

この時間は、あなたに捧げられる——）

すべては起こりうる　ナイフで胸を刺すようなことも

すべては起こりうる　心は一本の弦を截るに等しい

電磁波、音の大きさ小ささ、高さ低さ

、は未知というものをくぐりながら

あった——天使の肋骨…ぐーんと傾いて

ひかりも闇もない、季節の流れ、歳月の流れ

人類が洪水で飲み込まれ

、いま、わたしが吐く、

たとえそれが口先の鍍金であろうとも、

もし、汲々として一生を終えても…清水は潺湲と

くらき岩――苔の上に滴り ああ洞窟がくずれた地底湖に

陽をうけてなお無限際の蒼き夜空となる…

ゴールデン・ゲート・パークで！ふかい見知らぬ森で

ゆるやかなスロープで…。

…狂気です――そこでわたしはあなたの内側にまでもぐりこみ

あなたにひそむ夜の茂みをヒツソリと濡らしたのです…。

――折れそうな、わたしの腕の中で

――折れやすい、わたしの腕の中で

（ あれは なんのにおい？

男の人は、もっと、嫌らしくて、下品な人だとばかり思っていたけれど…

何故だろう、このあたたかで、力強い胸に抱かれている――と、

わたしは女であることの喜びを感じる…なんて罪な人、

この胸の感触を知ってしまったら、もう、あなたのいない夜など…

想像できません――そしてなんて、わたしを優しく落着かせてくれる匂い、

海のようにはてしない、この安らかな気持ち・・ああ、男などに、

抱かれるものかと思っていた夜もあったけれど――この素敵な胸の音、

ときめきは・・あまりにも甘くわたしを酔わせる。女とは何？・・と聞かれたら、

それはあなたの前にいる人、と嘯きたい。あなたを騙したい。

もう、あなたを何処へもやりたく――ない・・。

夜のくらさのなかで

「ごらん」 真珠を！金星からの光を！と・・。

輝いているものの周辺に見える、淡い光のかさ――

ごらん、深く冷たい〔予感・・〕 それが花をかかえ、髪を濡らし、

（それを、）吸収したり反射したりする・・

欲望の循環、――すきとおった繭に思える頃・・

部屋は いま わたしを吞んで

遠くから いま わたしを みつめて

（ 薔薇を持つマリー・アントワネット

いまや負の聖性に染まり、緑色の月に似た横顔

ああ、神よ、この女の罪をお許し下さい。この人は、僕が騙したのです、

そして僕が・・罪を犯しやすいあまりに、この人はその優しさから、

僕に恋をしてしまったのです——ああ、でも夜風にあたりすぎるのはいけない、

..夏の風は蕾のように、あなたを開かせて、別の男を...好きになるかも知れない、

だから、女よ..灯りをつけてほしい——僕はここにいる、僕はお前のものだ、

心変わりしないよう、そして、もうこれ以外の恋をしないために、

僕は何度でもお前に口づける..愛しい人——可愛い人よ。

触ろうとすれば 槍の穂先

触ろうとすれば 象牙の塔...

だから触れない 沈黙する

だから触れないよ.. 触れないまま

この夜が（過ぎる）..さまよえる僕等の時間——

ぼくらは毛深い。...欲深い。そしてづうんとするほど業深い

ケーキの箱の中を思う...そう檻の鉄棒の一本をとるように、

どんな機械の小さなネジひとつでもいいから——

見よ！ わたしは 戸口に立って、たたいている。

たたいている。 いとやわらかな血の歌

——突然に..、人生を語りかけ——おまえは忘れた

、たえまなく寄せてきているのに、

——まだ、あの空の向こうを見ないで

——まだ、あの空の向こうを見ないで

(シャボン玉の泡、ぷわり、ぷわり…。

わたしはきっと、世界中の女たちを敵に回してしまう…それが、分かりながら、

もうわたしはこの腕の感触を、胸の感触を…そして今しがた、あなたが、

キスしたおでこや、頬のことを、永遠に忘れません——愛して…います…

あなた、お名前を教えて…もう二度と、忘れないように、

何度もわたしは呟きます——愛して…います…

ヴェールの上から顔を触り、顔かたちを感じて

永遠の命の流れに把手を…、ドアの

深い憂鬱を感じて

罪の意識に打たれ、恐れているのがはっきりと出ていた

でも——、聞きなれない会話に 空の鳥

…は、あの車輪のように、永遠にめぐってゆく

壊れるまでしていた、獣の香り、裸のにほひ

「 わたしをみつめる あなたのかお

かさなり 」——Scanner

——まだ、あの空の向こうを見ないで

——まだ、あの空の向こうを見ないで

(切ないまでに、深く、想いを寄せる・・。

ねえ、朝の光が

好きなの

。。。沈黙は

くらげ。。。

朝、かげみたい

ーすこしぼやけてたと思う

ー本当に？

ーうん、・・・朝はするめみたいなんだ

ー乾燥してる？

ーすこし。しおのにほひがする

ーでも、好き・・・？

ーだって、朝になれば

（ 誰もがぼくを見つけてくれるだろ・・・）

何をやっても駄目な僕こと

山田一郎が柔道部に入った

チビで非力でどん臭く、

昨日、同級生の大谷にぼこられた

うう…痛い——うううっ、」

「おらあ死ねな。おらあ死ねやあ

授業をサボったり、仮に出ている居眠りをする、

隠れてビールを飲む、煙草を喫う。

人前で平気でおならをする、げっぷをする、

——大谷。

自我系の暗黒めぐるメビウスの輪…」

「地平線の風の尖塔…

コピー マテリアル

複写-素材…

体現することで人の心をふるわし、揺り動かす力。

殴られた理由は、購買部でパンを買えなかった時に、

パンを買っていた自分を目撃して、おいちょっと来いや、

とかいう、あきらかに分かり易い因縁のつけ方だった

「自分もあんな風に強くなりたい…変わりたい――

でも自分は大谷になりたいわけじゃない――」

大谷にぼこられた校舎の裏で、

喧嘩好きだが正義漢は強い…

柔道部の先輩である関根が青い鳥を追っている折りに発見され、

何寝てるんだ-寝てる奴を見てると関節技決めたくなる…

と、キメられたあと、ジュースをおごってもらう

コカコーラの親戚だと思うのだが、ゴカーゴウラス

という変な名前をしていたコーラをおごってもらう

（クリソツだった…パクリだった…

こんなことをしていて大丈夫なのかと心配だった――）

実家の道場の借金があるんだ、」

「でも、オリンピックに出て、たくさん生徒を集めるんだ…

左側に伸びる前髪が特徴。無気力な性格。

年齢二十代後半。顧問の先生より一つ後輩の

ボンキュッボンの野尻に、

ひそかに想いを寄せている、関根。

…関根はネズミが大の苦手。

道場の門下生にして下さい。お願いします」

「おいおい——土下座とか…

道場の門下生となり、関根の指導のもと、

十キロ走らされたり、ウサギ跳びやらされたり、

やっぱり十キロ走らされたり、ウサギ跳びやらされたり…

（それしかやってない…のだが、

そこはご都合主義な詩の世界のことであるからして…）

だが、柔道を教えられている内に、眠っていた才能が目覚め始める——

関根の紹介でクラブ活動に参加する頃には、

顔つきが変わっていた山田一郎こと僕…

しかし柔道部の部室に、因縁の大谷…

関根の顔を見る——山田…

（俺が呼んでおいたんだ——

こいつに勝ってお前は変わるんだ…）

という胡散臭い熱血系モノログ流れた

しかし、何故か野尻も呼んでいて、

自分がこいつを指導した、いい先輩で、

いわゆる今度、一緒に飯喰いませんか？

という、美味しい展開に持っていこうとしていた

てめえは、何をやっても駄目な男なんだよ。」

「山田、ユニクロのシャツのように畳んでやれ

大谷、ユニクロのシャツになる

ユニクロのシャツを野尻が見て、これ、売り物、と聞く

そうすると関根が、昨日買ったんです、と言う

ネズミのように、クラスメイトたちがやって来る・・

僕に、よくやったな、頑張ったな、と駆けよってくる

（そうして新しい勇者が誕生したのだった）

という読売的な胡散臭い、RPG的なモノローグが流れ、

この物語は終わるのである

響き

演奏された楽器

燃えるものがあったということだ

燃えるものがあった・・

のこりは何処か

遠く 響く

やさしい波の音よ

香水よ、肌のかおりよ！

曲—それが愛撫する

電話か？ 電話が・・・

Girl friend ～柔らかく温かい日～ #ave-w73

よく晴れた、暑い日。絵具箱と画布とイーゼルを自転車に積んで、敬虔と哀愁のtokio

風の吹く度に簀から魂がこぼれ落ちそうな、さまざまに大好きなパラソルの骨。

梨か林檎の汁。なめらかで複雑な振子運動。迷路のような比喩的世界。

貧しくて薄暗い家の中に引き籠った、「愛撫？」

..この謎が解けたら、灼熱をあげるよロマンティックにさせてあげる

虫籠の中で恋人は霧のように滲み込んで。僕の眼にはそれなりに純粋な月。それなり

にはカメレオンのような窓、sky

そして部屋中にはシャボン玉が一一蝶になったり...蛾になったりして

気忙しいframe..

アルバムの紹介

『hide from view /室井早苗』

(収録曲)

1 hide from view 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「ネオフォークの影響。ローリングストーンズの歌詞が随所に鑲められている。当時のバンドのギタリストである鈴木義博をレコーディングに参加させ、笑い声をサンプリングして使用している。PVでは、日曜日の東京の下町をテーマと言いながら、モデル系美女と、マトリックスの黒服サングラス男にダンスを踊らせている。また、フレデリック・ワイズマン、と連呼する室井本人が登場している。ちなみにジャケット写真は、この下町で撮られたものであるが、実際見た限りでは、何処か判別できるものではない」

2 I know your name 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「R & B。当初はもっとテンポが速かったとのこと。ただ、何言ってるのかわからないので、桑田さんじゃないっすか、ミスチルの深海のあれっすよね、と苦笑混じりに雑誌で答えている。しかしシンプルな題名とは裏腹に、内容は処女の血・死・リストカッターなど放送禁止用語で溢れている。しかし歌詞は亡き妹へ捧げたものです、と室井本人は、雑誌のインタビューに答えているが、妹がリストカッターであったわけではない、ということを何度

も説明している。ちなみに妹は死んでいない。あくまでも、可愛かった妹が結婚してしまって、その旦那にあんなことやこおんなことをされているのだと思うと悔しくて、妹は死んだのだ、おおさらば妹よ、とのこと。ちなみに、いまでも仲がいいらしい。」

3 one's favorite spot 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「自分がどうしても歌いたかった、秋葉原のオタクたち、と室井はインタビューは答えている。だが歌詞に、秋葉原なる単語は一つも出てこない。ウケ狙いではないかと思われるが、愚かでモテないくせに調子こいてる男が歌詞テーマになっており、きつい内容に溢れて、筆者などはちょっと涙目になってしまった。曲は感動的なバラードで、クリスマスシーズンを意識した内容となっているが、十代のうちに学校や、社会について考えさせられることが多くなった人への不信、結局お金がこいつらいいんじゃないか、がベースになっていると雑誌で語っている。イントロにはスネア音が挿入されている。」

4 eternal life 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「一時期、キリストにはまっていた時期があって、と雑誌のインタビューで答えている通り、ゴスペル調の曲で、“永遠の生命”というタイトルも肯ける。アメイジンググレイス、という言葉も歌詞にある。ただ、裏テーマで、レスポールギターへの愛着を挙げており、ストラディバリウスよりレスポールで三度の飯、という変な歌詞がある。ピアノ曲である。」

5 Children's song 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「童謡ですよ、割とありふれた、と室井は語っているが、内容は実話系グリム童話であり、極端にスプラッタな歌詞が特徴。ヘビメタやりたかったんです、と室井が言うとおりの前曲と鏡のようなイメージ交換となっている。筆者は、商業ロックとアンダーグラウンドにシーンがあるのを、あえて説明しているような印象を受ける。あえてオートバイの音を録音して使ってみた、あと、銃の音を使っているんです、これ、すごいですよ、と室井が言うとおりの、ぶおおおん、グアァンとすごい音が聞こえる。ちなみに、スピードを重視したアップテンポのリズムとメロディックで分かりやすい歌からクラシカルなサウンドへと移行し、最終的に疾走感みなぎる速弾きで終わるという凝った形式になっている。ちなみに好きなアーティストは、ヴァン・ヘイレンで、彼とならひと晩寝たい、と雑誌のインタビューで、わけのわからないことを言っている。理由は、何かヴァン、とか、いい。」

6 terrorism 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲: ai komiyama

「日本の政治を皮肉りまくる風刺的な作品で、原子爆弾と核の平和利用の道から、いずれそれはすべてこの世から必要のないものになるだろう、というのがテーマ。ビブラートがきいた歌い方が特徴で、裏声のトレーニングを積んだとのこと。ちなみにライブでは歌えない難曲、何故こんなことやってしまったのかしら、あはは、と雑誌のインタビューに室井は答えている。ちなみにこの作品をつくった背景に『Ray/レイ-Ray(2004年/テイラー・ハックフォード監督、ジェイミー・フォックス主演)』の存在があり、曲もそのオマージュという感じになっている。ただ、このPVでもやはり、よくわからない台詞があり、チャックベリーに

生卵ぶつけろ、と室井本人が叫んでいる。なお、ファンサイトで調べた限りでは、ちょっとイカレテいる感じの室井さんが好き、との意見が続出した。」

7 pop culture 作詞・作曲:sanae muroi / 編曲 : ai komiyama

「ポップカルチャーとか言いながら、実は歌謡曲なんですけどね、あはは、と室井が雑誌で語っている通り、美空ひばりをやたらと意識した内容になっている。ちなみに、遊びとしてこの曲を挙げており、普段使っていない楽器を使おうじゃないかと、トロンボーンや、オカリナが使用されている。しかし作品は、ヒーリング・ミュージックを意識したもので、鳥の鳴き声や、波の音などが使用されており、ころなしか室井の歌い方も優しいものとなっている。ちなみに曲のイメージは、小笠原諸島とのこと。全然ポップカルチャーとか関係ないですよ、と僕が突っ込むと、あ、と脅された（笑）」

ふ つ つつ
(蹂み躪けらるる者の蔵みて知れず露われ出ざれば・・)
ほどこし もろもろ すくい さばき
(施済は栄光の諸の聖き使いの救済と審判とに露われ出ざれば・・)

――聖寵に満ち充ちた方に祝福の辞を――

Ave Maria・・・

celebrate Christmas――
to celebrate one's birthday――
to celebrate the New Year――
celebrate a jubilee・・

(讃えよう・・称えよう・・頌えよう――)

・・しかしイエスよ、神よ、新興宗教と同じように、

私はあなた方の嘘が嫌いだ――しかしそれに優る、

より劣った僕に――より優れた考え方もある・・

――時間を恐れてはいけません・・

(誰かが私に、そう優しく訴えかける・・)

「神があなたを祝福してくれますように・・」

「あなたの心が祝福され、肉体を讃美し、魂が静かで

——この、穏やかな晩を迎えられますように・・・」

敵を愛すること・・・パンがイエスの身体であること・・・

悪を為す者よ離れ去れ・・・

正義の観念に燃え、真理のために尽そう・・・

「愛とは資本主義の手先か？・・・無抵抗に戦争を了解する態度か？——

科学をみだりに批判し——救世主を望み、本人の努力成長を拒むことか？・・・」

——あなたが常に最高の選択をすることを・・・

Ave Maria・・・

celebrate Christmas——

to celebrate one's birthday——

to celebrate the New Year——

celebrate a jubilee・・・

(讃えよう・・・称えよう・・・頌えよう——)

・・・神の依代となれ！ 心の気持ちのいい人と、いつも話をしたい、

私は自由や平等を愛し——君は責任ある使命の人となれ！

、、、、、、、、、、

私という聖書の中で——その判断を求めたい・・・

「心の清き者は福いなり 幸いなり 倅いなり・・・・・・

如くの斯とくに喜びと 歓びと 慶びと・・・」

違う人生を好きなように選べたら、

それはそれでいいんだろうな、

生きてるって実感をする時があって、

そういうなんやかんやを知らながら、

人ってやっぱり弱い生き物だと感じられたら

…いい夢を見よう。

色んなことを考えていたら、

時間はあっという間…。

ふと子供の時のことを

思い出したりして…。

———どうして、

蔵っておけないのかなあ

沈まない太陽が欲しいけど、

中々暑いね、…この陽射し。

沈みゆく、この感じ。

アンニュイのダルのユウユツの…。

沈みゆく、この感じ。

ブルーギルやピラニアの・・。

違う人生はきっと・・。

――でも、本当にいつか、

こんな柔らかさを永遠にしたい

・・・夏は、僕を子供にする――

神の手から逃れられない

消えてゆく、駆け出してゆく、

・・・風、が

おいらはつかうやつ

チカクはへんどうす

シカクはかたいやつ

とかくははやいやつ

イキルはこわいやつ

さけるはやばいやつ

シットルへんなやつ

たたかうそんなやつ

ササルはいたいやつ

オモウはさるなやつ

シジョウなやみつつ

おいらはカンガルウ

アイツはさぼるやつ

なまけるくせなやつ

おいらは鳴らすやつ

カラスみたいなやつ

鳴らすやつはカラス

かまちはカステラす

かますこすごいッス

はまちはぺらぺらス

おいらは食べるやつ

おいらはばらすやつ

バラすはちがうやつ

バラスもちがうやつ

パラスはしらぬやつ

マンモスすごいやつ

おいらんふるいやつ

おいらが鳴らすやつ

ドンブリの内側へ指をかけて、ズズズッ、と器を持ち上げ、スープを飲み干す時が僕は一番好きだ。これは豚骨のこってり系スープでも、鶏ガラを使ったあっさりとした塩ラーメンのスープでも、かなり濃厚な背脂醤油系でも同じだ。

【おおよそ十数人座れるカウンターと、テーブルが十二席。厨房には数人いる。僕等はテーブルに着いた。テーブルには、胡椒、ラー油、紅ショウガと、メニュー。メニューには、写真にラーメンの名前を紹介され、そのラーメンごとに特徴を網羅。】

（窓際の男は、——手拭きを貰うと、何故か窓拭きになる伝説がある。）

…ところで、話変わってない？

、、、
もちろん、健康上の都合とかいう理由で残すのは、マナー違反だ。ただ、もちろん、雑誌の取材で後数件回らねばならないというのなら、これは許されるだろう。

もちろん、唐辛子を入れた激辛は別だ（でも選べますよ、）中辛、激辛、凄辛…

「でも、どうしてマナー違反なの？」

、、、、、、
ズルズルずうう、ゆかり、それにしてもラーメンのすすり方うまいなあ…（何かその筋の人かと思う）と僕は考え、もちろん、タテスジメロン系な額と、横筋鉢巻誤魔化し熱血系な額という選択肢がある（あ、…あの、それ、どういう——）

【…でも、自分にとっての選択肢ってaとかbとかcなんていう、単純な三択じゃない。たとえば寿司屋入らないって言ってくせに、あとでお土産に寿司包んでくれ、と言おうかと思ってる。それを、ゆかりと食べるとか、ねえ、それとも、家に持ち帰って真兄、あるいはマスターに、なんて考えていくと、そこで色んな心持ちになってしまう。けど、やっぱり寿司屋のお土産はマスターに持って帰るために…ゆかりがもし、まだ食べられそうだったら、二

っ包んでもらおうかな——なんて、考えるのが、社会生活ってものさ、いいかい？」

（親切に甘えてばかりいて許される年頃だけど…それじゃ人間って成長しない。エリートロボットを作る謎の中学校は——ロオルプレイングゲエ！…よくはわからないのに、僕はマッシュルームカットで、眉毛を海苔にして、鎧つけて、がっちゃんがっちゃん言わせながら歩いてる今日の僕は勇者！…さあブチ殺そう、バトルロワイヤルの逆バージョン！）

「何故マナー違反かといって、庶民はお腹を膨らませるためにスープを飲むのであって、美味いから飲む、習慣で飲むとかいうことではないからだ」

「それ…美を追及する女の前で言える？」

「違う——ゆかり、女性はダイエットだったんだよなあ、忘れてたなあ、と言える」

「なにそれ、」

「つまり、キクラゲに、紅しょうが、玉子、チャーシュー、メンマに、葱-そして麺までは女の子の食べる範囲なのだワサア」

語尾に付けた変なキャラ付けにあえて、ゆかりは触れず、

「スープ…飲まなくていいの？」と聞いた。

「…太る——太ると、ふつうの男嫌う。」と僕。

……というか、なんで急に喋り方変えたの、と聞かず、ゆかり、（焦らしプレイ！）…ねえ、醒めたふりする男の子ってイケナイよね、中途半端っぽいよね。本気じゃないなら、生きてる価値ないって半笑いで言いたくなるよね。特攻隊の人達に申し訳ないよね。でも、ゆかり（焦らしプレイ！）…

——神崎先生！

やあ、びっくりしたな、（デストロイヤ！）おっと、つい、変な口癖が出てしまった。

と、そこにいたのは、未来を信じるくりくりの（瞳と思った、瞳と思ったの、馬鹿だね！）栗色の髪！ おっと、セバスチャンいわば可愛い次世代のBoy（ヘイ！）オーソドックスな醤油顔の君どうしたの？

――秀一君って縛り系なんですか、縛られ系なんですか？

と、まさしく、（焦らしプレイ！）な質問、ここだけの話、あわせ技じゃないか、と僕は思う。清く生きよ、そして納豆食べよ *Boy!*

「・・・飲む。」

「――おお、なんてノアの方舟にいる女、乗ってる羊からいただく感じですか！」

「・・・飲む。」

「さすが、マイライフ女性人気投票ランキング一位を確保する男前な女！..そろそろ、ポイントが荒稼ぎするつもりですか！」

「・・・飲んで～飲まれて――飲んで～♪」

おっと、わかる人にしかわからない、あの曲も入った（焦らしプレイ！）

「マイホームもローンもあなたの人生には逃げの一手が肝心よ、でも戦わなきゃいけないのね（Body!）そうよ..そうね、あたしは男だわ。あたし、負けない脛毛も剃るし、近頃じゃ、オカマバーにもよく行くの。おかあさん、わたしは元気です。」

そうこう言ってるうちに、ゆかりはどんぶりてのひらいっぱいを持ち上げ、（というか、女の子でその飲み方まずくない？）カタン、とテーブルに置いて、ふう、と手の甲で口の端などを拭い、やはりちょっと男前なあなたの飲み方..。

「トッピング感覚で用いられるネギを、大量にぶちこむラーメンがある…」

と、それはまるで――いまの話の流れとまったく関係ない、ゆかり！

しかも、何か…ちょっとカッコいい…カッコいいよ、お姉さん――

「いろいろな心と考えと学ぶことを感じながら歩いている…夜、夜にはイルミネーションのついた看板に一抹のさみしさを禁じ得ない。たとえば狭い入口があって、そこから階段をあがって行くと、オカマバー！」

…段々と変な話になっていくけど、そこがナイスな（焦らしプレイ！）

――神崎先生！

やあ、びっくりしたな、（ハチ公って蜂かと思ってた！）こんばんは、ニュースキャスターの神崎です、でも何故か占いをします。はい、あなたは明日まちがいなく、蜂の巣になるでしょう。死にま――す！…

（質問されてんだから話聞けよ、という場面…でもそれすらやたら面倒臭い！）

「男だったら四の五の言うな…男は黙って、六と七――言え」

――なんか、やたら語呂悪いイイイイ！

「ねえ…出よう」

、、、、、、、、、、
彼女の震える肩を掴んで――吹き出しそうな俺…

「…そうだね、出ようこの迷路を――チョコレートと、片栗粉と、少しセメントいれてる感じのあやしげな固さだけど、まだ石像になってない真鍮のボディ…」

いや、真鍮になってたら、あやしげな固さとかじゃないだろ…。

ふっと、ゆかりを見ると――サングラスをしていた・・。

「しいっ、これから・・奴等が来る……」

「奴等？ ふっ――お前、女のくせにあそこもついてないよ」

元々、ついてないよ・・でも、このおかしい世界を終わらせることは出来る。

「うん、出よう――店を出ると、ポリスが完全武装した世界・・」

（でも、そろそろ行くか――海？・・）

燃える街、燃える葛藤

…火葬場で死者の声を聞く

。私のもろもろの感情は噴火のように天を衝く！

ジャコメッティ「道をわたる人」のような、ほそながい、扁平な人間たち

うすいせんべいの型からぬいたような人間たち、

灼熱の原子炉に一日、二日、三日まだキリコの「詩人の不安」

眼玉も掻きむしる、木の根草の実を食べる——幸福な様な悲しい様な

空想の地獄…。パルミジャニーノ「長い首の聖母」みている様な

かなしい母を求める幻の様な、可憐な命の常夜燈

デルフォイの御者像は焦げた人のように思えます。

アアレは墨れす…、でなけりゃ闇の国の人です

地獄の最下層でじぶんは魔術を知った。「何んだか声がしたので、又誰

だれか来やがツたと思ったんだが、空耳…」

でも憑いていました、見出されぬ出口が、憎しみが、

帝国崩壊後まもなく、強い者に巻かれる、支配されるということが

起こったわけなのですけど、ビルマ・ニューギニアの魂は

どこへ帰ったのでしょうか…。

きょう、腐った死体をみました。生命保険のかけられた死体を。

証人喚問中のFのxxでした。一般傍聴席でそのしらせをきいた、

情報提供者の提供者が小便をもらすほどの事態でした。

その時、Fの秘書はほくそ笑みました。そのあと、

新聞記者が姿をくらましました。

夢、空想の半分に、

バケツを伏せたように現われた

肖像画と遭遇

一死刑囚が絞首台に

のぼる前に懺悔

をしなければならない

ように

突如そこに現れた

愛、恵みと慈悲の

マリア像、

回想は、神の息子、

一すっかり忘れて

いた、稀薄な空気

この部屋の空気の悪さ

air pollution

air pollution

・・・空気汚染

フレームを外した

刹那

せつな

、胸に描いた天使が

１９９９年の

あのシーズンのこども

の姿を借りて、

明暗入り乱れ

スperl！誘惑！

神よ、憐れみたまえ

憐れなたましいを墓に追いやることで

地平は肩飾りとなり

黒く眠っている朝の海は

したたるように青いのだ

ーそして世界は全身バネのように

きゅっと縮む

ファインダーは眩らんで撮れない

人工的な

光線でしか見えない

よごれた水、白い息

のように

このところ人一人

がやっと通れるかどうか

の扉のこと

を考えていた。

分度器状の小さな小窓

が井戸を覗きこむような格好

でついでおり

三角形のドアノブがあり

ロマンスを彩っているかのように

ロールしてい

るカーテンと

…その向こう側に

冷たい夜風がある

柩の中で眠っている

鏡の底

映画の底があると僕は思った

それが網目のように透いた時

ヒン剥かれるように

“虫籠”

と僕は直感した

花の盛りがすぎてゆかないように

“鳥籠”

いつの頃からか

貝殻に惹かれた

海の音に惹かれた

まるで開けっ放しの窓のように

くっきりと見えた

…トビラノサキニ

亀裂や結び目という暮らし

いつからか等身大が境界線となり

そこは留置場となった

そして時計の針が止まっ

たように

僕は夕暮れの中にいる

ほこりまみれでもう食べられない

飴細工（は、）

過去の暗い悲しみだ

花のひらくようには

good-byeできない

澱んだ　――愛の真実

そこに細長い紐が見えることがある

堕ちてゆく、くらい時間の海の

ように

エルフが飛び廻わって

る首筋が透けてみえ

る花ひらくように

いままでが芝居か、それとも瞬間

か？　傷ついた人達の小箱をあける

と、いつも張りつめた糸

があった

いつも色んなものを抑えていて、

別に・・・そんなに 難しくない つもり、で

けど、やっぱり 俺、弱っているかも・・・

言葉を濁して いたら、

——もう聞こえな い

からだが 軽くなるような 、歌

・・・いまでも旋律 を

覚えて る

あなたが呼ばれる時、誰かが望んでいる——

でも願いが叶っても、誰かが泣いてる・・・

.....うまく（は、）伝わらなくて...そう...

...でも（でも、）今のままじゃ...いられない.....

困惑、陰気 な こんな夜・・・

（やさし い 誰かのことを思い出してる・・・）

少し素っ気なかったかなあ

――素直さが

隙間ない垣のように、さらに追い立てる――

(でも、うまくは 泣けなくて..)

..新聞のびっしりした文字、

血で固まっていて取れない

...意志の苦痛を伴う作業...脅迫観念との戦いだ.....

.....浮かない顔をして...誰に勝ったの?...

いま 、顔を探して

まだ 言っていない! ..何も言えない

...絡まってる、情熱の激しさ

――でも、もう一度聴きたい

からだが 軽くなるような 、歌

無邪気だった、愛しい、可愛い

..この気持ち

…………絶え間ない迫害の中にあって

……いま 絶対的な 不足を語る（よ）――

好き 、たった一言

それさえあったら

どんな国にでも行ける

――どんなイメージの向こう側 も

好き 、埋めようのない穴 を、

――旋律 で

……男（は、）誇らしげに…語る…

…女のこと（スボイル、）ああ 弱さを…捨てられず……

（今日もまた女を抱く、）――《たとえそれが 嘘でも…》

だから僕等、遠い日の僕等に 会いにゆこう…

…ねえ、近いうちに、見に行こう よ

――海、

案内するよ 、風…

…いま 恐れることはなく…いま 欲しいもの…

...いま 触れているもの...へ と...

(僕は、) 腕を伸ばして、疎ましかった青空

...自由だった鳥

何も考えず、

好き 、埋めようのない穴 を、

——きつとね、きつ と、ね！って

...繰り返しながら...そう 繰り返しながら...

...君の真っ直ぐな瞳に...答えるよ...

もうようやく、わかったから

...雨あがり、高い見晴らしから眺めたい

、、、

自由な愛..

...ただ、方法と時間を決定する やさしさに

...貫かれながら...でも その痛みを欲しながら...

...愛はまるで...優しい嘘...

陶醉

<http://p.booklog.jp/book/68483>

著者：かもめ7440

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/baed3549/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68483>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68483>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ